山形県埋蔵文化財調査報告書　第63集

農林事業関係遺跡(1)

—発掘調査報告書—

1983

山形県教育委員会

谷地遺跡
後原遺跡

—発掘調査報告書—

昭和58年3月
山形県教育委員会

序

本報告書は，昭和54年に実施した，県営ほ場整備（井の下地区）並びに広域営農団地農道整備事業（北村山地区）に伴う，谷地・後原遺跡の２遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめたものであります。

発掘調査において，谷地遺跡では縄文時代中期の住居跡をはじめ，多くの土器や石器の遺物が発見され，中でも北陸地方との文化交流の一端を示す資料が，また後原遺跡では，縄文時代早期から後期にかけ，最上川を背景とする生活の内容がうかがい知られ，それぞれ貴重な資料を得ることができました。このことは幾千年のかなたで，厳しい自然と融和一体となりながら，新しい文化を創造する先人の心豊かな，たくましい生活ぶりをしのばれる所であります。

近年，埋蔵文化財と農林事業とのかかわりは，増加の傾向にあります。本県の産業基盤である農林事業は，県民の生産基盤の整備や福祉の向上を目的とし，豊な県土を目差して鋭意進められておる所であります。一方，同事業を進めることは，数千年もの間土中に埋もれ続けてきた埋蔵文化財と，直接なかかわりを持つこととなり，その間には数多くの困難な問題が生じております。

県教育委員会におきましては，生活文化の向上や地域環境の整備など，同じ立場から，これらの間の調整をはかり，今後とも埋蔵文化財の保護行政のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが，発掘調査にご協力をいただいた関係各機関並びに関係各位に感謝を申し上げるとともに，本書が埋蔵文化財に対するおおかたの，理解の一助となれば幸いと存じます。

昭和58年３月

山形県教育委員会

教育長　大竹　正治

例　　言

1　本報告書は，山形県教育委員会が山形県農林水産部より委託を受け昭和54年度に実施した，県営ほ場整備事業（井の下地区）並びに広域営農団地農道整備事業（北村山地区）に伴う，小国町谷地遺跡と村山市後原遺跡の２遺跡について，緊急発掘調査の結果をまとめたものである。

2　発掘調査期間

谷地遺跡　昭和54年４月23日～同年７月６日（延49日）

後原遺跡　昭和54年10月１日～同年11月２日（延24日）

3　調査にあたっては，谷地遺跡では小国町教育委員会・県農林水産部耕地第二課・県置賜北部土地改良事務所・井の下土地改良区，並びに後原遺跡では村山市教育委員会・県農林水産部耕地第一課・県村山平野土地改良事務所など，各関係機関や地元の方々の協力を得ました。記して感謝を申し上げます。

4　報告書の体裁は，（１）谷地遺跡・（２）後原遺跡として，それぞれ個別に章をもうけて内容を記した。

5　挿図縮尺は,全体図・遺構図などは1/1000・1/200・1/300・1/20・1/60とし,遺物では土器実測・拓影図1/3・1/4・石器1/2～1/8として，各挿図それぞれスケールを示した。遺物の図版縮尺は，土器1/2～1/4とし，石器では1/2～1/6を原則とした。

6　本文および挿図中の記号は，ＳＴ－住居跡・ＥＬ－炉跡・ＥＰ（Ｐ）－柱穴・ＥＤ－周溝・ＥＵ－埋設土器・ＳＫ－土壙・ＳＤ－溝跡・ＳＭ－集石・ＳＸ－不明遺構，またＦ－遺構覆土・Ｙ－床面である。遺物ではＲＰ－土器・土製品・ＲＱ－石器・石製品を示す。住居跡・炉跡・土壙などは全体に一連番を付け，柱穴・周溝は各挿図毎一連の数字とした。

7　本報告書は，谷地遺跡では佐藤正俊・名和達朗・阿部明彦・長橋　至，後原遺跡は名和達朗が担当し，それぞれ執筆した。編集にあたっては渋谷孝雄があたり，佐々木洋治が総括したものである。

(1) 谷　地　遺　跡

調　査　体　制

調査主体	山形県教育委員会		
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団		
調査担当者	主任調査員	佐々木洋治	（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）
	現場主任	佐藤正俊	（山形県教育庁文化課技師）
	調査員	佐藤庄一	（山形県教育庁文化課技師）
		名和達朗	（山形県教育庁文化課技師）
		安部　実	（山形県教育庁文化課嘱託）
調査協力	小国町教育委員会　県置賜北部土地改良事務所　井の下土地改良区		
事務局	事務局長	山田信一	（山形県教育庁文化課長）
	事務局長補佐	荻野和夫	（山形県教育庁文化課長補佐）
	事務局員	設楽周一朗	（山形県教育庁文化課主事）

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過…… 5
　2　調査の経過…… 5
Ⅱ　遺跡の概観
　1　立地と環境…… 7
　2　調査の方法…… 8
　3　遺跡の概要…… 8
Ⅲ　遺構と遺物
　1　遺　　構……12
　2　土　　器……25
　3　石　　器……41
Ⅳ　ま　と　め……51

挿図目次

第１図　遺跡位置・分布図…… 7
第２図　遺跡全体図…… 9
第３図　遺構配置図（１）……10
第４図　遺構配置図（２）……11
第５図　Ｂ地区遺構平面図……13
第６図　Ｃ地区遺構平面図……19
第７図　Ｄ地区遺構平面図……23
第８図　土器拓影図（１）……28
第９図　土器拓影図（２）……29
第10図　土器拓影図（３）……30
第11図　土器拓影図（４）……31
第12図　土器拓影図（５）……32
第13図　土器拓影図（６）……33

第14図　土器拓影図（７）……34
第15図　土器拓影図（８）・土器実測図（１）……35
第16図　土器実測図（２）……36
第17図　石器実測図（１）……42
第18図　石器実測図（２）……43
第19図　石器実測図（３）……46
第20図　石器実測図（４）……47
第21図　石器実測図（５）……48
第22図　石器実測図（６）……49

図版目次

図版１　遺跡遠景（西から）　遺跡近景（南から）　遺跡近景（東から）……53
図版２　Ｃ地区土層セクション（１）・（２）　面整理作業……54
図版３　Ａ地区遺構確認状況（１）・（２）　Ｂ地区調査風景……55
図版４　ＳＴ81・86・ＳＫ85・95・96全景　ＳＴ88・94・98全景　ＳＴ89全景他…56
図版５　ＳＫ83全景　ＲＰ18・31～33出土状況（１）・（２）……57
図版６　Ｃ地区調査風景　ＳＫ１・２全景　ＳＴ10・12全景……58
図版７　Ｄ地区調査風景　Ｄ地区全景　ＳＭ215・216全景……59
図版８　出土土器（１）……60
図版９　出土土器（２）……61
図版10　出土土器（３）……62
図版11　出土土器（４）……63
図版12　出土土器（５）……64
図版13　出土土器（６）……65
図版14　出土石器（１）……66
図版15　出土石器（２）……67
図版16　出土石器（３）……68

付表目次

表―1　周辺の遺跡群…… 4
表―2　谷地遺跡発掘調査行程一覧…… 6
表―3　包含層内出土土器点数……26
表―4　遺構出土土器点数……26
表―5　遺構内における土器類別組成……26
表―6　土器分類基準……27
表―7　土器観察一覧（包含層）……37
表―8　土器観察一覧（遺構）……38

表－1　周辺の遺跡群（第1図）

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	立地(標高)	時期（他）
1	畔坪	1386	小国町大字字畔坪	段丘（142m）	旧石器時代・縄文時代・平安時代
2	湯の花	1378	大字湯の花	段丘（165m）	旧石器時代・縄文時代　（S48年調査）
3	鳥谷沢	1388	大字大宮字鳥谷沢	段丘（150m）	旧石器時代・縄文時代
4	高稲場A	1377	大字西字高稲場	段丘（140m）	縄文時代
5	館分	新規	大字増岡字館分他	段丘（136m）	縄文時代
6	大下	1380	大字増岡字大下他	段丘（138m）	縄文時代（中期）
7	下野	1381	大字増岡字下野	段丘（131m）	縄文時代（中期）　（S55年調査）
8	田子山	1383	大字増岡字団子山	段丘（136m）	縄文時代（早・中・後期）（S55年調査）
9	才頭	1382	大字増岡字才頭	段丘（130m）	縄文時代(前・中期)
10	墓窪	新規	大字増岡字墓窪	段丘（136m）	縄文時代(前・中期)　（S56年調査）
11	笠又	1384	大字増岡字笠又	段丘（158m）	縄文時代
12	壁田B	1394	大字若山字壁田	段丘（144m）	縄文時代(中期)
13	館	1395	大字若山字館	段丘（145m）	縄文時代
14	女子岡平	1396	大字若山字好雅	段丘（146m）	旧石器時代・縄文時代(前・中期)
15	蟹沢	1389	大字舟渡字蟹沢	段丘（145m）	縄文時代(中～後期)　（S54年調査）
16	舟渡堂の前	1390	大字舟渡字堂の前	段丘（148m）	縄文時代(中・後・晩期)

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

小国町の増岡地内は，小国盆地の中でも有数の米作地帯であり，一方，埋蔵文化財もまた多く包蔵する地域でもあり，旧石器時代から縄文時代にかけての集落跡などが点在しており，遺物もた多く採集されている。

これらの地域が，昭和54年から井の下地区の県営ほ場整備事業として実施することになり，県教育委員会は小国町教育委員会と共に，県農林水産部耕地第二課・置賜北部土地改良事務所・井の下土地改良区などの関係各機関と，埋蔵文化財の保護対策について協議を重ねたものである。その結果遺跡は，できるだけ現状のまま残すことを基本として，やむを得ず破壊されるものについては，記録保存による緊急発掘調査を実施することにしたものである。

今回の谷地遺跡の発掘調査は，この地区が昭和54年度にほ場整備事業に係るため，昭和53年10月に遺跡詳細分布調査を行なった。その結果，事業の工法状の問題で，遺跡の現状保存が困難であるため，関係各機関と協議を進めて昭和54年に緊急発掘調査を実施したものである。なお，遺跡の北東側Ａ地区（第２図）については，工法状表土取りあつかいとなるため，表土が一部削平される程度で，現状のまま保存されることになった。

これまでこの地区で緊急発掘調査が実施された遺跡は，昭和54年には蟹沢遺跡・才頭（さいず）遺跡，昭和55年は下野（しもの）遺跡・団子山遺跡，昭和56年は墓窪遺跡などであり，県教育委員会や小国町教育委員会が主体となって，県農林水産部の委託を受けて，緊急発掘調査を進めてきた。その結果これらの遺跡が，縄文時代中期から後期にかけての集落跡であることが明らかになり，数々の貴重な資料が提供された。

2　調査の経過

今回の発掘調査は，昭和54年４月23日（月）から７月６日（金）まで延49日間に亘って，ほ場整備事業区域に限って実施し，私有地に伴う宅地や畑地についてはほ場整備事業の地区外となっている。調査経過の概要は，第一段階から第四段階に分けて順次進め，第一段階では遺跡の概要を知るため粗掘作業を中心にして精査区域の確認を行なう。第二段階は重機を使用して精査区域を拡張し，面整理作業による遺構を確認する。第三・四段階は実際の遺構などの精査・検出を行い，記録によって保存するものである。作業経過の詳細については、発掘調査行程表（表―２）参照のこと。

表－2　谷地遺跡発掘調査行程一覧

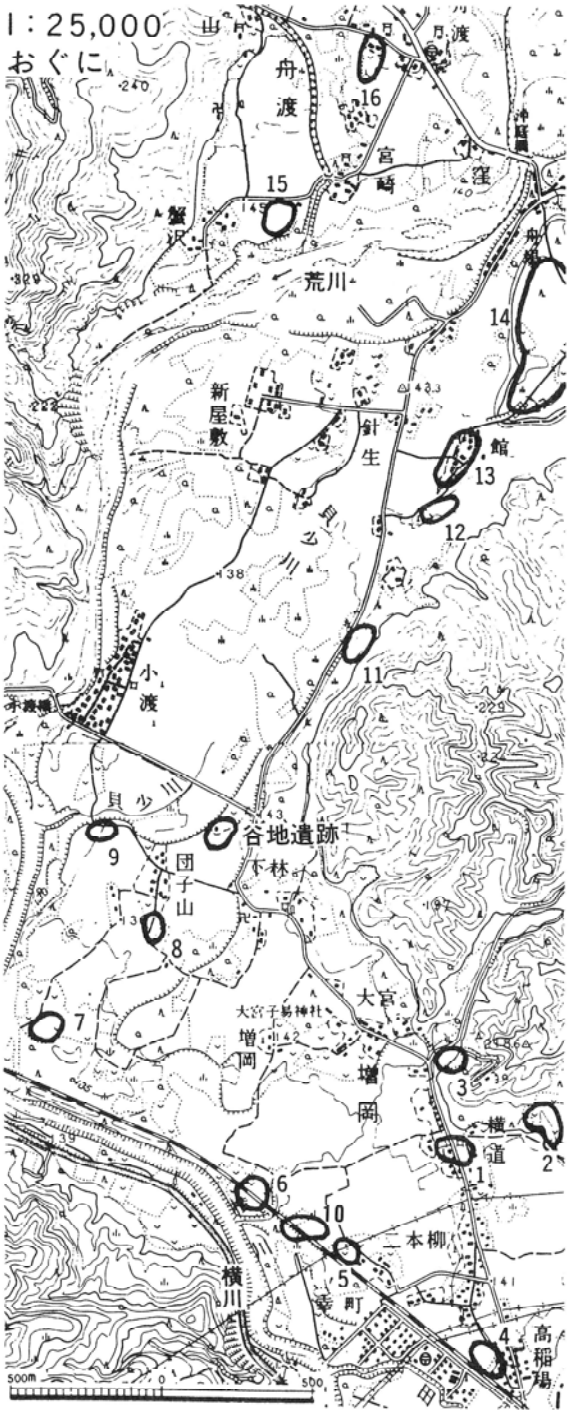
調査内容 ＼ 月・日		4月	5月				6月				7月
		23～27日	7～11日	14～18日	22～25日	28～1日	4～8日	11～15日	18～22日	25～29日	2～6日
準備	資材準備他	――									（器材撤収）――
	調査区設定	――（グリッド設定）									
粗掘	粗掘作業	――	――	――（精査区域の確認）							
	重機使用			――	――〔精査区域の拡張）						
検出	遺構確認	……	……	……	……	――	――（A～D地区各遺構面整理）				
	遺構精査・検出										
遺構精査	A地区遺構					――（ST301～110他平面形確認）			――（ST311～320他平面形確認）		
	B地区遺構					――	――	――（ST31・86・90・92・SK83・85他）			
	C地区遺構						――	――	――（ST10・12・SK1・2・15・17他）		
	D地区遺構					――	――	――	――〔ST4・SK213・264人他）	――（SM215・216・264他）	
	主要遺物取上	――	〔石器）――	――（石器）	――	――（土器・石器）	――	――（埋設土器・一括土器及石器）	――	――	
実測	遺方設定							――（A・B地区）		――（C地区）――	――（D地区）
	平面							――	――（A・B地）	――（C地区）	（D地区）
	土層断面		――（遺跡全体層序）								
	レベル測定		――（主要遺物記録）――			――〔主要遺物記録）	――（主要遺物記録－各遺構内出土）	――	――	――（遺跡全体）	――
写真	全体写真	――	（遺跡遠・近景他）			――	――（A～D地区遺構確認状況）			――（A～D地区全景）	
	細部写真		――	――	――	――	――	――	――	――	
整理	遺物洗浄・注記		――	――（洗浄）――	――（洗浄）	――	（洗浄・注記）	――〔洗浄・注記）	――	――（洗浄・注記）	
備考	日程概略	発掘調査開始	←（第一段階）→		←（第二段階）→		←（第三・四段階）→		6/18～6/22 資料作成 調査説明	6/28（八〇名参加）現地説明会	発掘調査終了

II　遺跡の概観

1　立地と環境

谷地遺跡は，山形県の西南部，新潟県と接する山間の小国盆地にある。この盆地は，飯豊・朝日の両山地にはさまれて南北に開けた盆地である。中央部の谷底平野は北方の朝日岳から南流する荒川と，飯豊山から発して西流する横川とによって，５つの地形面をもつ河岸段丘から形成されている。洪積段丘の平林・横道面，沖積段丘の小国・八木沢面と沖積低地とになっている。洪積中位段丘の平林面には，東山遺跡・平林遺跡があり，洪積低位段丘の横道面には，横道遺跡・鳥谷沢遺跡・岩井沢遺跡などの旧石器時代を中心とする遺跡が分布している。沖積段丘には本遺跡をはじめとして，下野遺跡・墓窪遺跡・団子山遺跡・蟹沢遺跡など縄文時代の前期から後期にかけての遺跡が多く分布している。（表―１・第１図）

本遺跡は，小国町大字増岡字谷地他に所在し，荒川の左岸に位置し，標高136ｍ前後を計る。遺跡は，沖積上位段丘の小国面中央部に立地している。全体的に東方から西方にかけて傾斜しており，遺跡は若干微高地状となっている。地目は，水田・畑地・宅地となっている。南西・南東側の背後地には，２ヶ所の湧水地が認められる。



第１図　遺跡位置・分布図

2　調査の方法

今回の緊急発掘調査は，谷地遺跡の中央地区から南側地区にあたるほ場整備事業区域の東西120ｍ・南北70ｍで，発掘対象面積が約8,400㎡について実施し，とくに遺構や遺物が密集する区域（精査区域）を重点に発掘調査を進め，遺跡北東付近からＡ地区，遺跡の南側をそれぞれＢ・Ｃ・Ｄ地区とした。精査面積は，Ａ地区 1100㎡・Ｂ地区200㎡・Ｃ地区140㎡・Ｄ地区 600㎡であり，Ａ～Ｄ地区を合せて 2040㎡の精査面積を調査したものである。（第２図）

発掘調査は，事業区域内全体にグリッドを設定し，グリッドの基線をほ場整備実施杭に基点を設けて20－50グリッドとして，グリッド基線のＹ軸方向はＮ－27°－Ｅを計り，２×２ｍを一単位とするグリッドを設定する。遺跡の西端中央よりから２×８ｍあるいは２×10ｍのトレンチを併用して，遺跡の東側・南側に向けて粗掘作業を開始し，遺跡の北東側地区と南側地区に大きく拡張し，精査区域Ａ～Ｄ地区を設定し調査を実施した。（第２図）

3　遺跡の概要

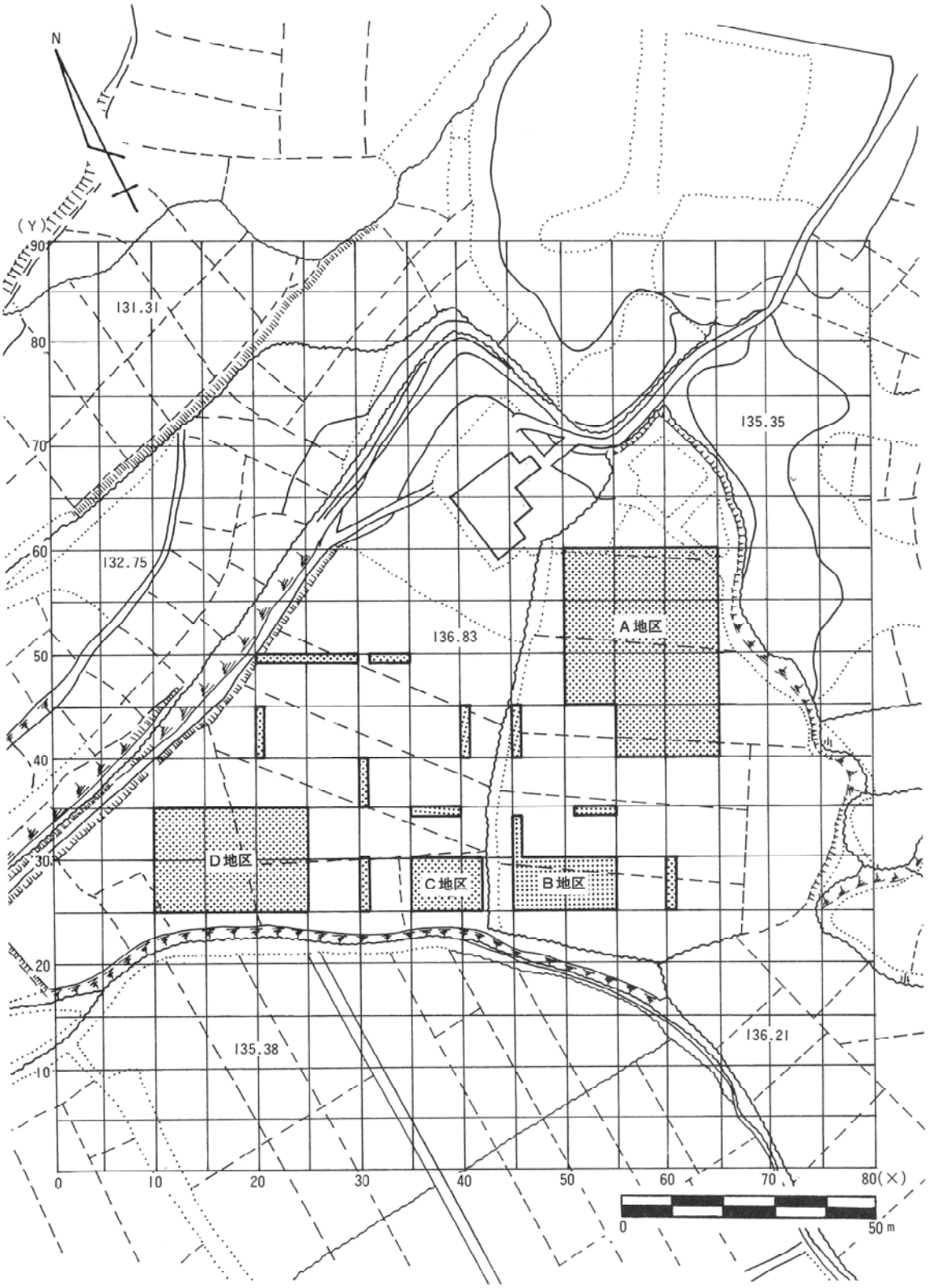
（１）遺跡の層序

本遺跡は，横川によって開析された沖積河段丘に立地し，現地形は全体として南側から北側にかけて若干傾斜しており，遺跡の東・南方では1～1.5ｍの差で低位面となり，西方は小段丘崖となっている。また旧地形は，遺跡の中央部でほぼ南北に走るように鞍部となり緩傾斜地になる。基本的な遺跡の層序は，５層に分けられる。第Ⅰ層暗褐色土（耕作土・13～15㎝），第Ⅱ層暗褐色土（粘質土・15～20㎝），第Ⅲ層黒褐色土（粘質土・14～23㎝），第Ⅳ層褐色土（砂質土・17～29㎝・漸位層），第Ⅴ層黄褐色土（粘質土・地山）である。なお，遺物包含層は第Ⅱ層下部から第Ⅲ層にかけて，遺構の確認面は第Ⅲ層下部から第Ⅳ層中にかけてである。

（２）遺構と遺物

本遺跡で検出した遺構は，竪穴住居跡29（検出12・確認17）・土壙41（検出14・確認27）集石31・不明ピット128である。時期は，いずれも縄文時代中期中葉である。

遺構の分布状態は，遺跡の東端から西端の地区に密集して分布し重複している。住居跡は，Ａ地区では北側に多く在り，さらに北側に分布するとみられ，Ｂ・Ｃ地区では地形に沿って半円状に連り，Ｄ地区は１軒のみ検出される。土壙は，Ａ地区では住居跡と同様な関係を示し，Ｂ・Ｃ地区では住居跡の外郭に重複して在り，Ｄ地区は西側に分布している。集石遺構は，Ｄ地区のみ検出し中央から東側にかけて偏在し，全体として不規則に配置し

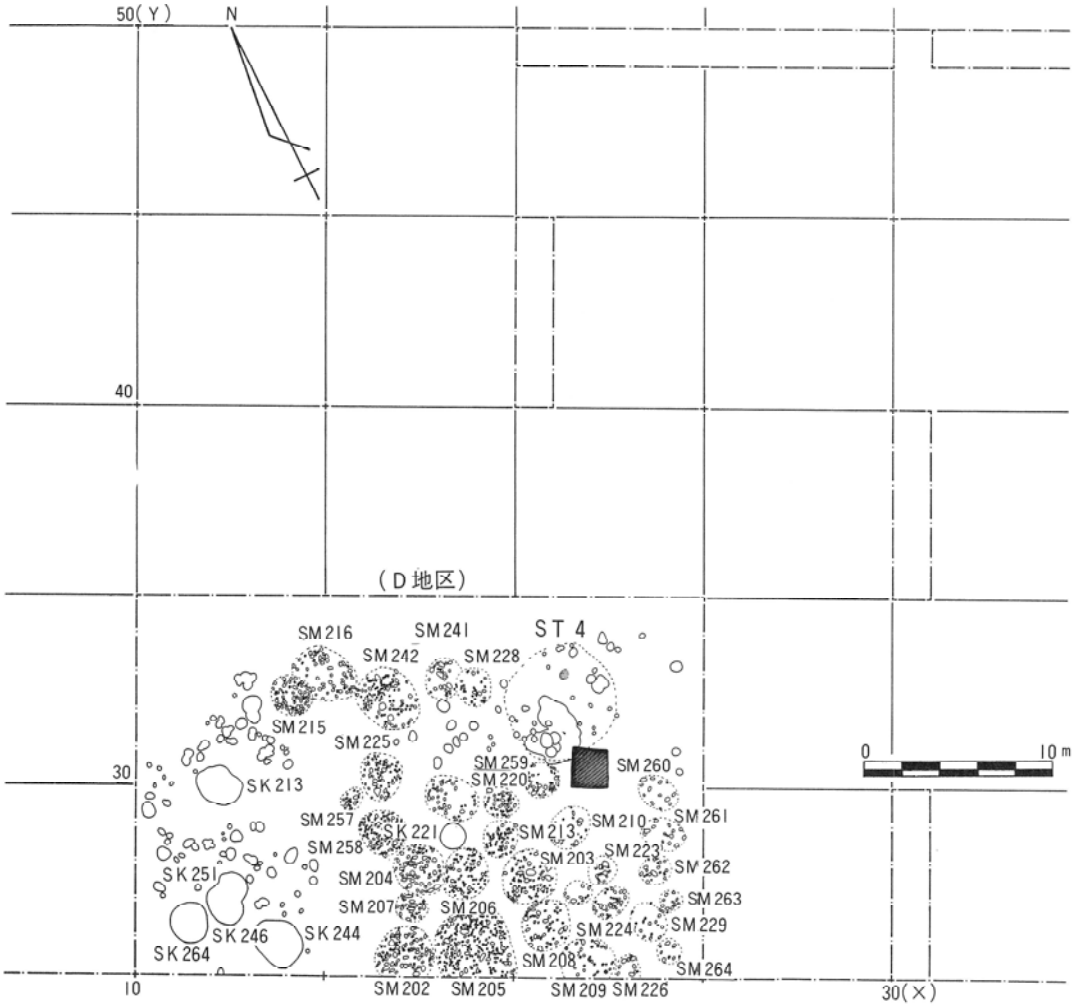

N
(Y)
90
80
70
60
50
40
30
20
10
0
10
20
30
40
50
60
70
80(X)
131.31
132.75
136.83
135.35
135.38
136.21
A地区
B地区
C地区
D地区
0
50m

第2図　遺跡全体図

ている。不明のピット群は，A～D地区に認められ中には住居跡を構成する柱穴が含まれると考えられるが，詳細については明確ではない。このように遺構の分布は，遺跡の東端から南端あるいは一部西端にかけて多く密集し，遺跡の中央部には遺構は認められず，空白域となっている。

今回出土した遺物は，整理箱に約74箱を数え，それらは縄文式土器（中期中葉）・石器・石製品などに分けられる。遺物のほとんどは第II・III層の遺物包含層と住居跡や土壙覆土内から出土している。

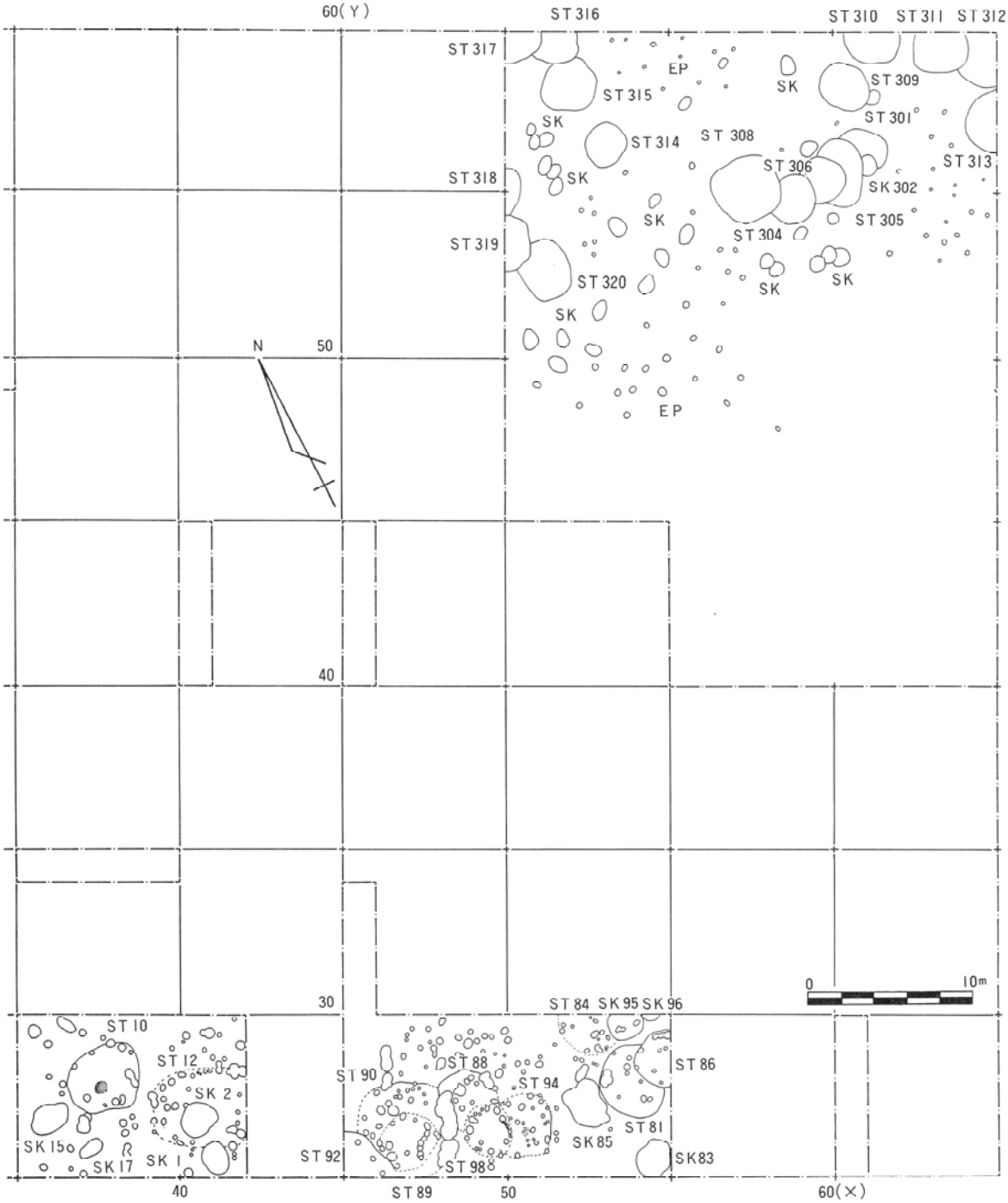
遺物の出土状況は，包含層ではA地区北側・B・C地区の中央部・D地区北東側で最も多く出土し，遺跡の中央部から北側にかけて遺物の出土が希薄になり，遺構の分布状態とほぼ一致している。遺構内では，全体の遺物量の大半を占め住居跡や土壙の覆土内より廃棄した状態で出土したり，とくに81・86・88～90・94・98号住居跡・1・83・95号土壙では顕著に認められる。



第3図　遺構配置図(1)

〈凡例〉　　（なお遺構番号は住居跡・土壙などを含めて一連番号である。）

ST：住 居 跡
SK：土　　壙
SM：集石遺構



第4図　遺構配置図(2)

II　遺構と遺物

1　遺　　構

A地区遺構（第４図　図版３）

遺跡の北東側中部に位置して，住居跡・土壙・ピット群は51～65－48～60グリッド内にあり，平面形を確認したのみで実際に遺構は検出していない。なお，この地区はほ場整備事業の工法状表土取りあつかいとなるため，平面形を確認したのみで，住居跡などは現状保存となったものである。遺存状態は，他のＢ・Ｃ・Ｄ地区よりも第Ⅰ層耕作土がやや厚く堆積し，遺構の遺存状態も良い。確認面は，第Ⅲ層中位より確認され，明確に平面形が検出される。

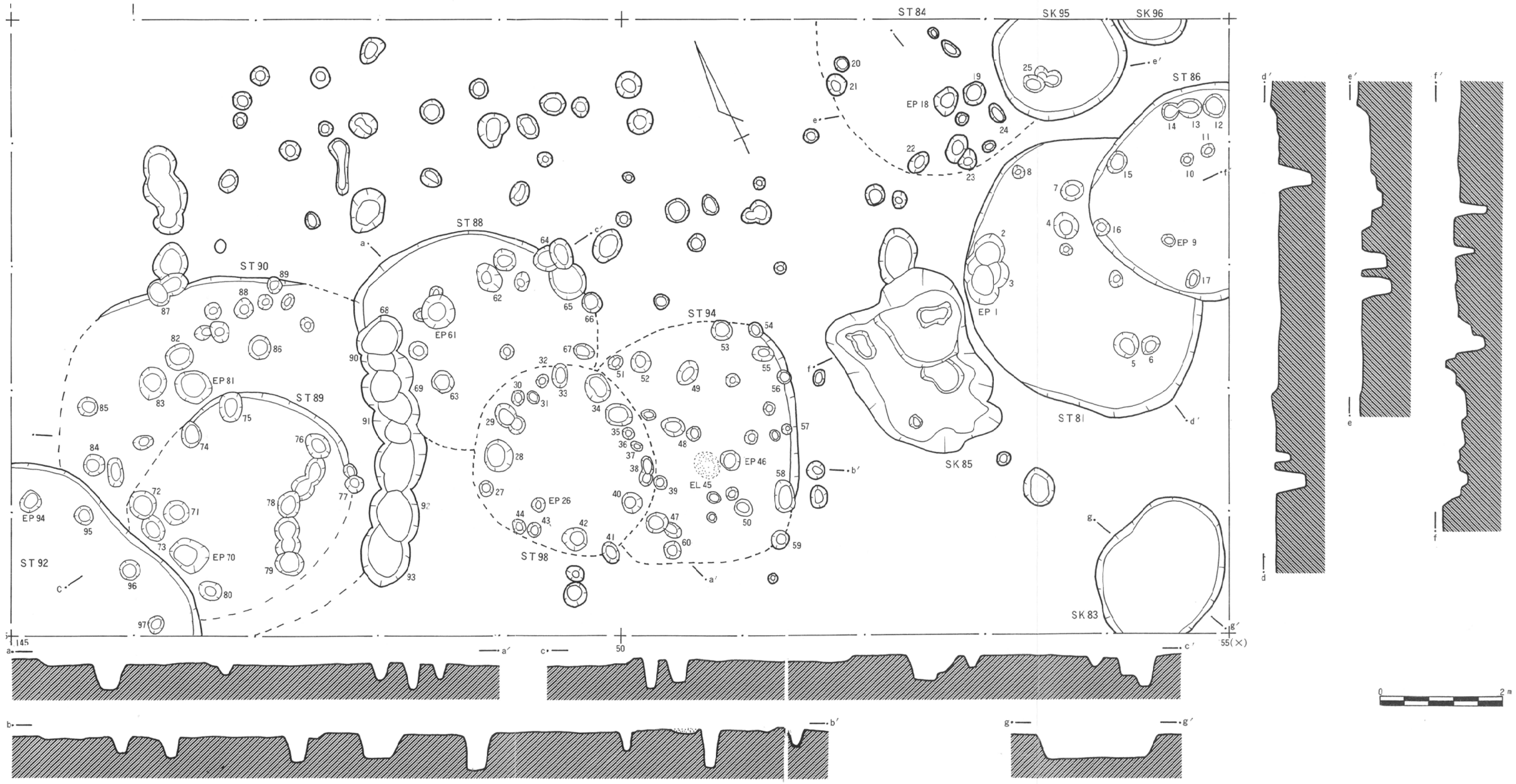
住居跡は，重複している関係から大きく４グループに分けられ，308号住居跡・311号住居跡・316号住居跡・318号住居跡などそれぞれ中心とするグループである。平面形はいずれも不整円形や楕円形を呈し，規模は約３～４ｍ前後となるものである。住居跡覆土は，色調が暗褐色ないし黒褐色を呈し，炭化粒子や黄褐色粒子が多量に混りる粘質土層である。遺物の出土状況は，住居跡の上部から多くの土器片や磨石・凹石類などが出土している。その他，308号住居跡の東側306号住居跡と重複している部分に，幅18～25cmで黄褐色土が外周して認められ，恐らく308号住居跡の東側壁体が構築されている。

土壙は，その大部分がＡ地区の中央部より西側に分布し，住居跡群の回りに在る。平面形は，不整円形や楕円形を呈する。大きさは，約1～1.5ｍ前後である。土壙の覆土は，暗褐色土・黒褐色土で炭化粒子が混る微砂質粘土である。不明ピット群は，その大半が遺構とは直接結びつかないと考えられるが，中には305号住居・302号土壙の南側のピット群は覆土の状態から，住居跡を構成する柱穴群とみられる。

このようにＡ地区は，中央より北半にかけて遺構が密集し，南半域では確認されておらず，遺物の出土状況も遺構分布と一致する。

B地区遺構（第５図　図版４・５）

遺跡の南東側のやや平担地，46～55－26～30グリッド内に位置する。中央から東側にかけて81・84・86号住居跡や83・85・95・96号土壙があり，81・86号住居跡・84号住居跡・95・96号土壙それぞれ重複しており，中央から西側にかけて88～90・94・95・98号住居跡が連続して重複している。北側には不明のピット群が在る。遺存状態は，全体に水田耕作により一部覆土上層まで攪乱を受けている。確認面は第Ⅳ層で，いずれも第Ⅴ層を掘り込



第５図　Ｂ地区遺構平面図

んでいる。

（86号住居跡）平面形は，東側が未掘ではあるがおそらく不整円形を呈する。大きさは長径3.52ｍを計り，確認面から床面までの深さは18～26cmである。壁は，緩やかに掘り込まれ，現存高は約21cmである。壁溝および周溝は検出されていない。床面の状態は，全体に凹凸で軟弱であり，壁際はとくに軟弱である。柱穴は９本で，ＥＰ９～11が主柱穴で，ＰＥ12～17は壁柱穴あるいは支柱穴で，径15～29cm・深さ18～39cmである。なお，炉跡については，確認されていない。

（81号住居跡）東側で86号住居跡と重複し，西側で85号土壙と接している。平面形は南側がやや脹らみをもつ円形を呈する。大きさは長径4.31・短径3.96ｍを計り，確認面からの深さは17～23cmである。壁は北・南側で明瞭に掘り込まれ，西・北東側では若干傾斜している程度で，現存高は確認面からの深さと一致する。壁溝・周溝は検出されていない。床面の状態は，中央部がやや固く踏みしめられているほかは軟弱で，平担である。柱穴は８本検出され，主穴柱はＥＰ・４・５で径32～38cm・深さ35～42cm，支柱・壁柱穴はＥＰ１～３・６～８で径17～43cm・深さ14～28cmである。

（84号住居跡）東側で95号土壙・南側で81号住居跡と重複あるいは近接している。平面形は柱穴の配列からみて円形を呈すると考えられる。大きさは推定長径3.20ｍを計る。壁・壁溝・周溝は確認できなかった。床面の状態は，中央部のＥＰ18付近で若干認められ，やや軟弱である。柱穴は８本確認され，ＥＰ18～25である。大きさは径16～38cm・深さ12～36cmで，主柱穴はＥＰ８で他は支・壁柱穴とみられる。

（98号住居跡）北側で88号住居跡と東側で94号住居跡と重複している。平面形は，床面の範囲と柱穴からみて楕円形を呈すると考えられ，大きさは長径3.18ｍ・短径2.98ｍを計る。壁は若干の高低差をもって傾斜しているが，全体的には不明確である。周溝・壁溝は認められない。床面の状態は，中央部がやや高く凹凸がみられ固く踏みしめられ，外側へむけて軟弱となっている。炉跡は中央部の東側寄でＥＰ35付近に約10cmの範囲で焼土混りの黄褐色土があり，若干焼成されている程度であるが，おそらく炉跡と考えられる。柱穴は17本検出され，壁寄りに外周するのが特徴である。ＥＰ26～42で，主柱穴はＥＰ28・35・42で径36～53cm・深41～52cmである。その他は支柱穴で径18～34cm・深さ15～31cmである。

本住居跡は，柱穴の配列からみて１回の拡張した住居跡と考えられる。

（94号住居跡）西側で98号住居跡と重複している。平面形は，柱穴の配列からみて東側と西側がやや直線になる楕円形を呈する。大きさは，長径3.96ｍ・短径3.14ｍを計り，確認面は第Ⅳ層上面である。壁は，東側で検出され緩やかに掘り込まれ，現存高は６～11cmである。壁溝および周溝は，検出されない。床面の状態は，住居跡の中央部でやや落ち込

み，東側壁付近では凹凸になるほかは平担で，ＥＬ45（炉跡）付近が固く踏みしめられ壁際で軟弱となっている。柱穴は25本検出され（ＥＰ46～60），主柱穴はＥＰ46～50で５本認められ，径35～43cm・深38～51cmであり，ＥＬ45を中心に外周して在る。支柱・壁柱穴はＥＰ51～60であり，径19～43cm・深さ22～35cmである。とくにＥＰ52・54・59・60は支・壁柱穴の中でも主柱穴に準じている。

炉跡（ＥＬ45）は，住居跡のほぼ中央部の南寄りに位置する地床炉である。平面形は不整円形を呈し，大きさは径45cm・深さ15～21cmを計る。とくに底面で良く焼成され，焼土も厚く堆積している。

（88号住居跡）南側で98号住居跡・西側で90号住居跡とそれぞれ重複している。平面形は，北側の一部で方形状になるほかは不整の円形を呈し，大きさは長径4.00ｍ・短径3.50ｍを計る。確認面第Ⅲ層下部で確認される。壁は，東側の一部から北側にかけて検出され，ほぼ緩やかに掘り込まれ軟弱であり，現存高24～29cmである。壁溝・周溝は，確認されない。床面の状態は，ＥＰ61付近で凹凸があるほかは平担で，軟弱である。柱穴はＥＰ61～69で９本検出され，主柱穴はＥＰ61～63で径34～48cm・深さ38～59cm，住居跡の中央部に在り，いずれも半円形状に配列されている。壁柱穴および支柱穴はＥＰ64～69であり，径28～54cm・深さ19～41cmであり，ＥＰ64とＥＰ69は対をなすものである。炉跡は，検出されていない。

（89号住居跡）90・92号住居跡と重複している。平面形は東壁と柱穴の配列から考えて楕円形を呈している。大きさは推定長径4.00ｍ・短径3.00ｍを計る。92号住居跡精査の際に確認される。壁は東側で検出され，緩やかに掘り込まれており，現存高は12～14cmである。壁溝・周溝は確認されない。床面の状態は，住居跡の中央部が凹凸みられ固く踏みしめられ，壁付近では平担で軟弱である。柱穴は11本検出されＥＰ70～80で，主柱穴はＥＰ70・75・79であり，住居跡の壁際にあり三角形状に対応しており，径38～61cm・深さ45～59cmである。ＥＰ71～74・76～78・80は支・壁柱穴となり，径24～42cm・深さ18～33cmである。炉跡は確認されない。

（90号住居跡）89・92号住居跡と重複している。平面形は，柱穴の配列状態より不整円形を呈し，大きさは推定長径6.00・短径5.92ｍを計る。89・92号住居跡の精査および検出の際に確認される。壁は，北側の一部で検出され，緩やかに掘り込まれ，軟弱である。現存高は８～13cmである。壁・周溝は認められない。床面の状態は，全体に軟弱であり，平担である。柱穴はＥＰ81～93で13本検出され，主柱穴はＥＰ81・86の２本認められ，径32～63cm・深さ18～24cmである。支柱穴他はＥＰ82～85・87～93でその大部が壁際にあり，外周している。炉跡は認められない。

（92号住居跡）89・90号住居とそれそれ重複し，全体の約４分の１を検出したものである。平面形・規模などは不明であり，壁溝・周溝は検出されず，炉跡は確認されていない。壁は，緩やかに掘り込まれ固くなり，現存高は12～15cmである。床面の状態は，壁際で軟弱であるほかは，固く踏しめられ凹凸がみられる。

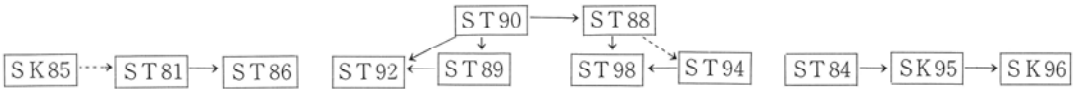
（83号土壙）55－26グリッド内に位置し，南西側は未検出である。平面形は，北側がやや張らむ楕円形を呈し，推定長径2.41・短径2.04ｍを計る。確認面は第Ⅲ層下部より確認される。壁は全体に緩やかに掘り込まれ，軟弱である。壙底は，中央部がやや高く壁付近でやや低くなる。土壙の中央部で一括土器群が投棄されている。

（85号土壙）東側で81号土壙と接している。平面形は，北側・東側・南側が突出する不整形を呈し，覆土中に黄褐色土が上層から下層にみられる。規模は長径2.78・短径2.00ｍを計る。壁および壙底は，不規則に掘り込まれ，とくに壙底では不整ピット群が掘り込まれている。

（95号土壙）西側で84号住居跡と重複し，東側で96号土壙と接している。北東側の半分は未検出である。平面形は，ほぼ円形を呈するとみられ，径約2.00ｍを計る。確認面は第Ⅲ層下部である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，軟弱である。壙底はほぼ平坦であるが中央北側で凹凸がみられる。

（96号土壙）西側で95号土壙と接している。大半が未検出で詳細は不明である。壁や壙底はしっかりと掘り込まれている。

Ａ地区における住居跡・土壙の新旧関係は下記の図式となる。



（矢印の方向は旧→新である）

Ｃ地区遺構（第６図　図版６）

遺跡の南側のやや平坦地，36～42－26～30グリッド内に位置する。中央から東側にかけて10・12号住居跡や１・２号土壙があり，西側に15・17号土壙がある。12号住居や１・２号土壙がそれぞれ重複している。住居跡や土壙の囲りには不明のピット群があり，ピットの配列や構成および第Ⅳ層の状態からみて，直接に住居跡を構成する柱穴とは判定しにくいものである。全体的に水田耕作により一部覆土上層まで撹乱を受けており，第Ⅱ層から第Ⅳ層にかけて小礫群(河原石等)などが多量に混入されているため，遺構を検出する際は困難をきわめた。確認面は，12号住居跡が第Ⅲ層下部で，その他の住居跡や土壙は第Ⅳ層において確認され，検出したものである。

（10号住居跡）37～39－28～30グリッド内に位置し，確認面は，第Ⅳ層中位より確認されたものである。平面形は，周溝（ＥＤ２）の形状によって，南側がやや突出する楕円形を呈している。大きさは長径4.88ｍ・短径4.09ｍを計る。壁は認められない。同溝ＥＤ２は，住居跡を全周し，北側・東側・南側で幅がやや広くなり，南西側で狭くなっている。幅は18～44㎝・深さ12～18㎝で，断面がＶ字状になっている。床面の状態は，中央から東側は凹凸があり固く踏みしめられ，西側ではほぼ平坦で軟弱である。柱穴はＥＰ１～10で10本検出され，主柱穴はＥＰ１～４でＥＰ２～４は壁に寄っており，主柱穴の位置関係は台形状を示して，径38～56㎝・深さ35～51㎝である。ＥＰ５～10はいずれも壁・支柱穴であり，径19～32㎝・深さ25～31㎝である。炉跡（ＥＬ１）は，住居跡の西側寄りに位置する地床炉である。不整円形を呈し，径65㎝で深19㎝である。炉跡中央部が良く焼けている。

（12号住居跡）40～42－26～29グリッド内に位置し，１・２号土壙と重複している。1・２号土壙の精査・検出の際に確認される。平面形は柱穴の配列状態からみて楕円形を呈しており，大きさは推定長径約7.00ｍ・短径5.09ｍを計る。壁は確認されない。床面の状態は，住居跡の中央部がやや落ち込むほかは平坦であり，軟弱である。柱穴は28本検出されＥＰ11～38である。径14～47㎝・深さ19～52㎝である。炉跡は確認されなかった。

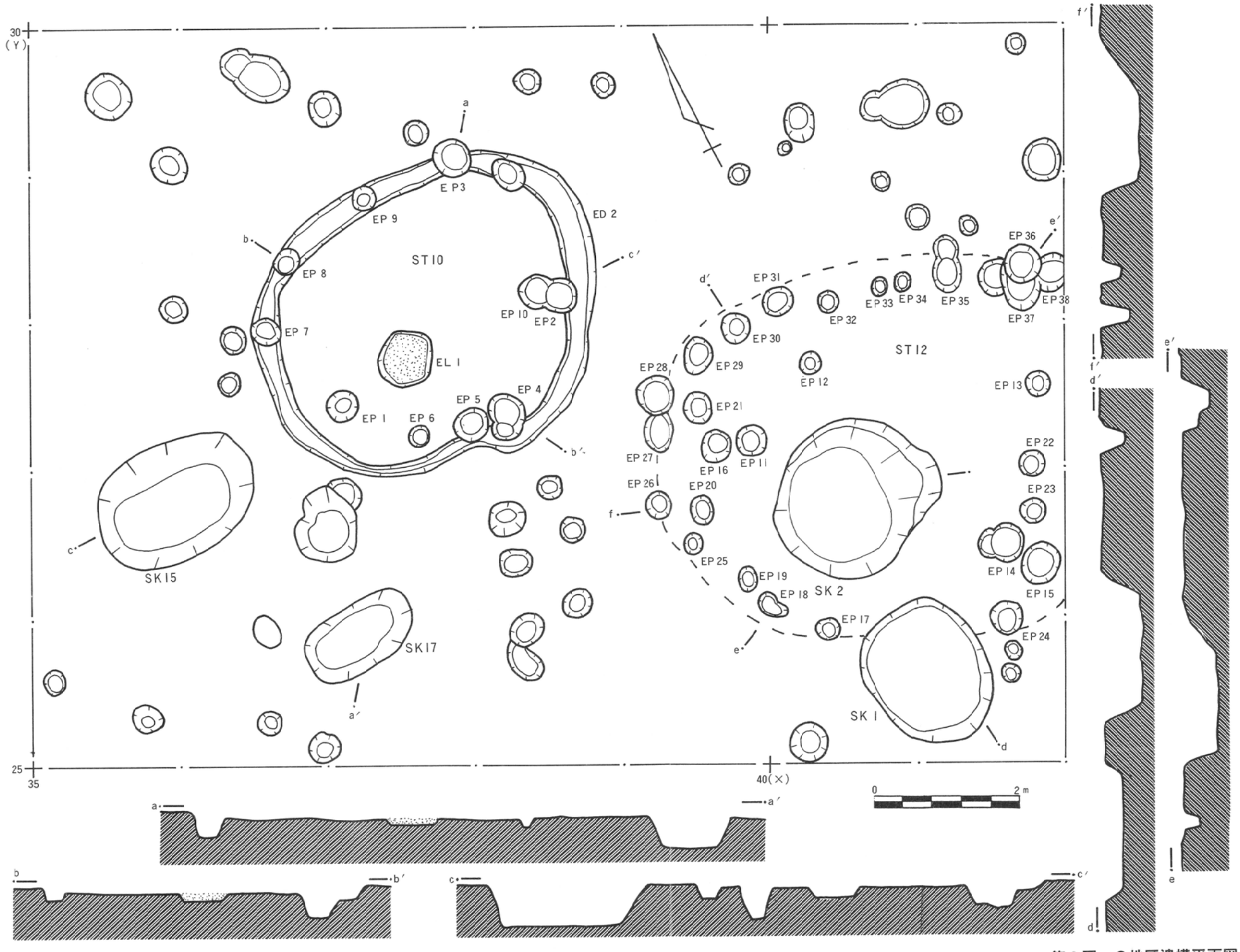
本住居跡は，柱穴の配列状態からみて１～２回の拡張が行なわれている。また１・２号土壙との新旧関係は，いずれの土壙よりも旧いものである。

（１号土壙）北側で12号住居跡と重複している。平面形は楕円形を呈し，大きさは長径2.01ｍ・短径1.58ｍ深さ25㎝を計る。壁は緩やかに掘り込まれ軟弱である。壙底は，ほぼ平坦で軟弱である。12号住居跡よりも新しい。

（２号土壙）12号住居跡の中央部で重複している。平面形は，東側が大きく脹らむ不整の円形を呈し，大きさは長径2.16ｍ・短径1.68ｍ・深さ58㎝を計る。壁はとくに東側で緩やかに掘り込まれ，上部でややオーバーハングしている。壙底は，中央部がやや高く壁際付近で低くなっており，軟弱である。12号住居跡よりも新しい。

（15号土壙）36・37－27・28グリッド内に位置し，10号住居跡と近接する。平面形は北側と南側がやや脹らむ楕円形を呈している。大きさは，長径2.23ｍ・短径1.57ｍ・深さ59㎝を計る。壁体は全体的に緩やかに掘り込まれ軟弱である。壙底は，やや西側に傾斜しているがほぼ平坦で軟弱である。

（17号土壙）37・38－26・27グリッド内に位置し，北側で10号住居跡と近接している。平面形は，南側がやや不整形になる楕円形をしている。大きさは長径1.58ｍ・短径0.87ｍを計る。壁体は全体に緩やかに掘り込まれ，軟弱である。壙底は，ほぼ平坦であり軟弱である。



第6図　C地区遺構平面図

Ｄ地区遺構（第７図　図版７）

遺跡の南西側の平坦地，11～25－26～35グリッド内に位置する。住居跡（４号住居跡）は北東側に１軒検出され，土壙は中央部に１基その他は南西側の地区に偏在し，不明ピット群と近接している。集石遺構群（ＳＭ）はＤ地区の中央北側から南側に重複あるいは近接して在る。これら遺構はいずれも第Ⅳ層の上面で確認されたものである。

（住居跡）

４号住居跡は，20～23－31～34グリッド内に位置する。平面形は，柱穴の配列状態からみて不整の円形を呈している。大きさは長径6.24ｍ・短径5.22ｍを計る。確認面はⅣ層上面である。壁および壁溝・周溝は確認されない。床面の状態は，炉跡（ＥＬ）付近が凹凸があり固く踏みしめられており，その他では平坦で軟弱である。柱穴は32本検出されており，住居跡の壁付近に在り外周している。径24～42・深さ18～63cmである。これら柱穴の配列を考慮すると数時に亘って拡張あるいは建替などが考えられる。

（土　壙）

土壙群はいずれもＤ地区の南西側に位置して偏在する。平面形は，円形ないし不整円形を呈する土壙では221・251・264号土壙であり，楕円形は213・244・246である。土壙群の壁体は緩やかに掘り込まれ軟弱であり，壙底は，全体としてほぼ平坦であり軟弱である。大きさは径1.54～2.21ｍで深さ45～62cmを計る。なお246・251号土壙の新旧関係は 246号土壙が新しい。

（集石遺構）

本遺跡の集石遺構群は，Ｄ地区のみに検出されたものであり，地区内の中央部の北側から南東および南側にかけ重複あるいは近接してみられる。集石遺構群の全体的な概要については，平面形は礫群の範囲の中で示したもので円形・不整円形・楕円形・不定形を呈し，形は様々である。使用した礫群は自然の河原石を用いた円礫・角礫などで大きさも９～40cmものであり，とくに石棒や石皿・凹石・磨石等の出土はみられず，そのほとんどが自然の礫である。構築の状態は，人為的に掘り込んで礫を置く状態ではなく，自然の窪地や落ち込みを利用して礫を配置してるものが多い。礫の配置は，平面的に配列しており，２～３重に積み重ねているものは少ない。出土した遺物の量は，他の地区と比較する希薄である。大きさは，径約1.2～4.6ｍである。

このように，集石遺構群についての全体的な特徴を概略して記述してみたが，各集石遺構の礫の配置状態や集合する集石遺構群の配列および規模からみて，４つのグループに分けられる。Ａグループは219号集石を中心として環状になるもの，Ｂグループは，262号集石あるいは 263号集石など中心部に複数の集石を配列するもの，Ｃ・ＤグループはＡ・Ｂ

グループに属さず規模が若干の差違をもつグループである。

〔Aグループ〕

D地区のほぼ中央部に位置し，東側で4号住居跡と重複しているとみられる。219号集石を中心として直径約12mの環状をなして，各集石遺構が配列している。構成する集石遺構は204・206・213・220・225・228・241・242・258・259号集石である。東側の4号住居跡と重複している地区は，住居跡が造られる際に壊されている。平面形は，円形・不整円形・楕円形を呈し，大きさは約1.90m～2.40mを計る。集石の配列は規則的であり，外周には長方形状になる礫を弧状に配し，中央部には30～40cmの円形状の礫をやや方射状に配しており，とくに204・225・258号集石で顕著に認められる。礫などの抜き取りの痕跡があるものは213・219・228・242号集石で，中央部が抜き取られている。219号集石は，中央部よりもやや南西側寄りに位置し，北東側の地区が空間地帯となっており，礫の配列は25～40cmのやや中形の礫を使用し，中央部に50～55cm前後の角柱礫の抜き取り痕がみられる。204・258号集石は，自然の若干の落ち込みを利用して礫を配しており，その他の集石は，多少の凹凸がみられてもほぼ平坦な部分に礫を配している。

〔Bグループ〕

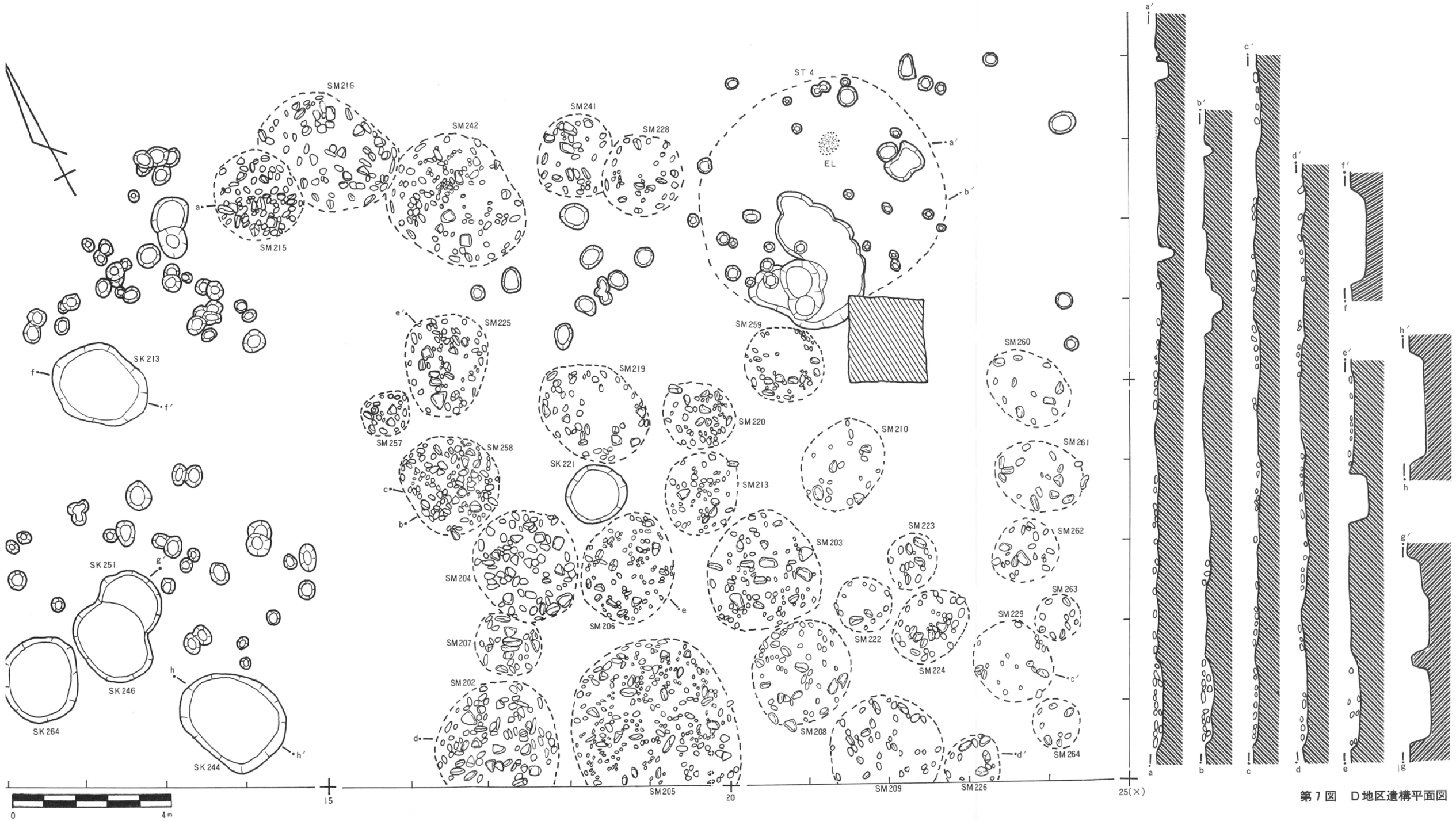
D地区の南側に位置し，東側の地区については未検出である。262・263号集石を中心として直径10～12m前後の環状をなすとみられる。複数の集石遺構が中心部でさらに小環状をなすか，他方全体的に2～3重に連らなって配置され環状になると考えられる。構成する集石遺構は，203・208・209・210・222・223・224・226・229・260・261・262・263・264号集石である。平面形は，円形・不整円形・楕円形を呈しており，大きさは径約1.20～2.40mを計る。環状の配列は，外周にやや大形の径1.80～240mの203・208・209号集石などが配置され，中央部では不規則的に小集石遺構が配されている。集石遺構の礫の配置は，全体に30～50cmの自然礫を中央部に不規則に間隔をとって配置している。Aグループと違って抜き取りの痕跡が認められず，全体として粗雑である。

〔Cグループ〕

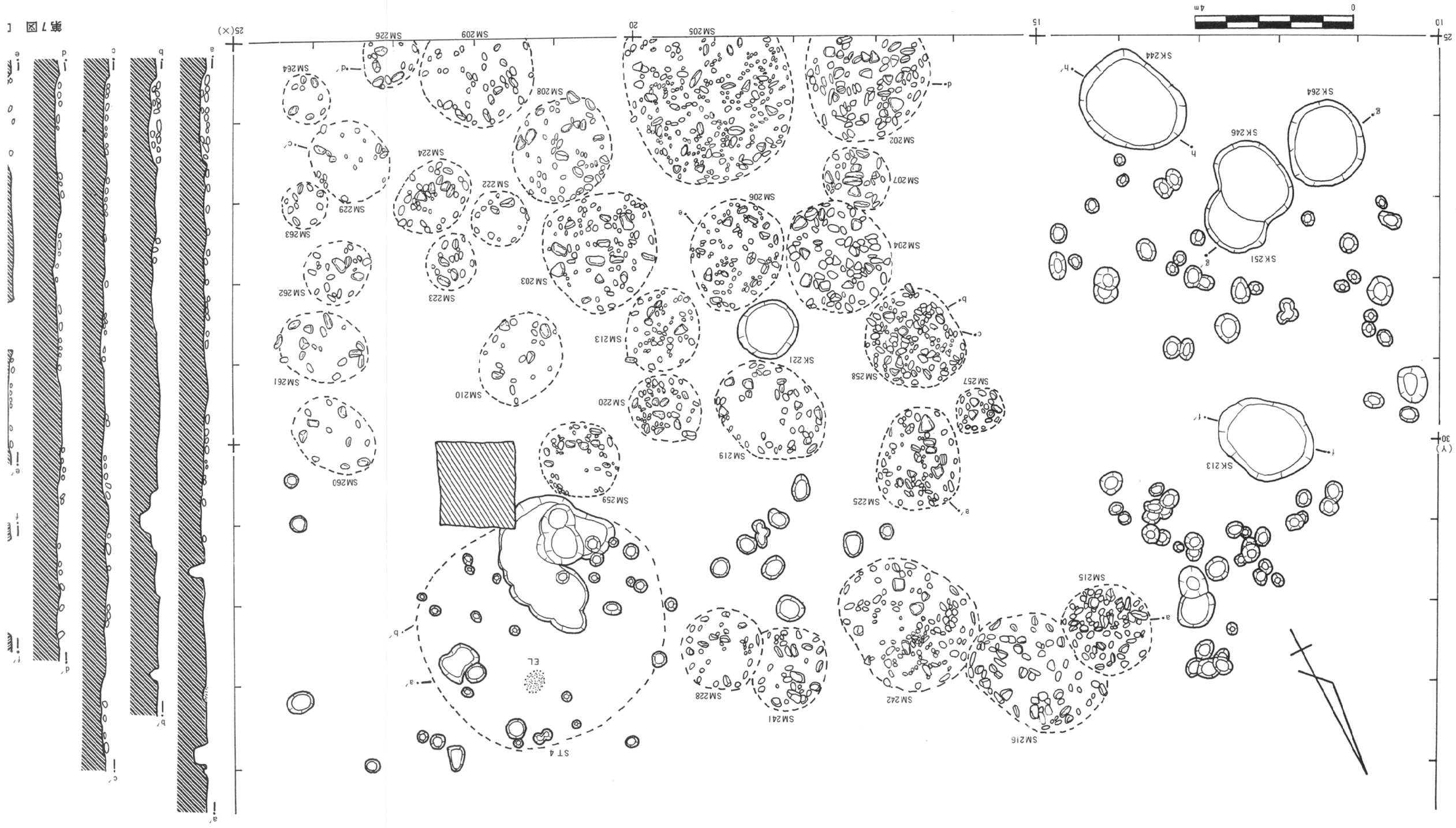
平面形が円形・不整円形を示し，大きさが径1.20～2.00mのもので，Aグループ外周の北・西・南側に位置し，207・215・257号集石遺構である。いずれも自然の落ち込を利用して構築し，集石の配置は中央部やや中形礫を，外周に沿って小形の礫を配置している。258号集石遺構に類似している。

〔Dグループ〕

平面形は楕円形を呈し，大きさは推定径2.50～4.00mを計り，大形となっている。202・205・216集石遺構で，構築の状態は258号集石遺構に共通している。



第７図　Ｄ地区遺構平面図



SM216
SM242
SM241
SM228
ST4
EL
a
a′
b′
SM215
e′
SM225
SM259
SM260
SM219
SK213
f
f′
(Y)
30
SM220
SM257
SM258
SM210
SK221
SM213
SM261
c
b
SM203
SM223
SM262
SM204
SM206
e
SK251
g′
SM263
SM207
SM222
SM224
SM229
c′
SM202
SM208
SM205
SM209
SM226
SM264
d
d′
SK246
SK264
g
h
h′
SK244
25
10
15
20
25(X)
0
4m
a′
a
b′
b
c′
c
d′
d
e′
e
f′
f

第7図

2 遺　物

（1） 土　器

本遺跡から出土した土器は，破片総数で約7,000点を数える。内訳は表－1・2に示す通りであるが，その他にＰＲNo.を付けて取り上げた33点の一括土器がある。以下では，文様判別の不能な細片を除いた包含層・遺構内出土土器および一括土器を対象として分類し，概述する。提示し得た拓影図および実測図には，1～429までの一連番号を付け，対照する土器観察表を設けた。ＲＰNo.の土器は，一部実測図に示し，他は巻末図版に掲載する。

出土土器の分類（第８～16図　図版８～13）

分類は，全形の判る資料が少ない事から，破片個々に施された文様・施文技法等を中心として行い第Ⅰ～Ⅶ群までに大別し得た。これらは各文様要素の組合せからさらに細分できたが，分類の主体が部分文様にあるため結果的に同一個体の破片が複数類にまたがる危険性は歪めない。この点については，分類基準表備考欄他で後記補足する。

第Ⅰ群土器の１～９類は，竹管文を多用する北陸系（新崎・上山田古式・上野・古屋敷式）の土器からなり，同じく10～11類の馬高式併行の土器に先行する一群である。細別の各類は，相互に関連する点が認められ，基本的には２類を中心とする一群（縄文地文）と５類を中心とする一群（格子目状沈線等充塡地文）の二つの施文型式（タイプ）を主体としているのが判る。しかし，細かな形態については不詳であり，全体の構造は不明である。

第Ⅱ群土器は，各種の刺突文を主要な文様要素とする一群と，隆起線と沈線および沈線文が主体となる土器群からなる。器形では，大形の波状口縁をもつ一群が注目され，数点の鶏頭状口縁を呈すものがある。刺突文では，交互刺突を基本とし，その変形および結節沈線文が主要な位置を占めている。隆起線と沈線・沈線文主体の土器では，渦巻文・連弧文・三角形や「Ｘ」・「Ｙ」等のモチーフが多用される。文様は，口縁部や体部上半に限定されるものが多い。これらは，関東系（五領ヶ台式）の土器と評される事が多いが，必ずしも型式的な位置付けの明確な一群ではない。ここでは，問題も多分に残るが，その大方は大木7ａ～7ｂ式に係わり，かつ第Ⅲ群の大半と共伴する東北南半の土器群として捉えておく。地文では，結束を伴う羽状縄文や，結節による綾絡文等第Ⅲ群に近いものがあり，いずれも縦位施文が主流である。第Ⅴ群１類は，本群の組成をなす一員としてよいだろう。

第Ⅲ群土器は，撚糸圧痕文を主要な文様要素とするもので，１～５類に細別される。形態上，第Ⅱ群の一部も含めて口唇を「く」の字状に肥厚させる特徴が顕著である。全体では，２類が主体を占めるが，これには隆起線に伴う圧痕と単独施文の２種が含まれている。地文は，第Ⅴ群２類の大半と３類の一部が該当する。

第Ⅳ群土器は，隆起線による口縁部装飾や，隆線・沈線による体部の意匠文をもつ一群

で，文様帯の構成が明確である。これは，第Ⅰ～Ⅲ群に後続する大木8a式の範中で捉えられる一群である。第Ⅴ群以下の土器群は，一部を除いて，上記各群に帰すべき体部や底部および副次的な土器群からなり，第Ⅳ群では，網代や簾状圧痕文が注目される。

以上のように，本遺跡では，その位置する地域性からか最上川流域ではほとんど見る事のない第Ⅰ群土器がまとまったあり方を示し，加えて第Ⅱ・Ⅲ群土器が混在する状況が注目される。これら土器群の組成比率は，各土器群の文様帯構成を考慮して比較すれば，約半々か，やや第Ⅱ・Ⅲ群が上回ると見る事ができる。次期に降って馬高式併行のものが極端に少なく，大木8a式併行の土器が圧倒する現象は非常に興味ある現象といえよう。

胎土・焼成について

全体に保存状態が悪かった故か，器面の脆弱なものが多いが，概して第Ⅰ群土器や第Ⅲ群土器は焼成が良く，遺存状況も良いものが多い。これに反して，第Ⅱ群土器は器面脆弱なものが多く見られる。胎土では，第Ⅱ群土器の一部に金雲母の顕著なものが認められる他，総じて石英の細粒が各群土器ともに多く含まれる例が多い。

表－3　包含層内出土土器点数

分　類	点　数	備　　考
第Ⅰ群	478	新崎式系(433) 馬高式系(25)
第Ⅱ群	314	第Ⅳ群に含まれる体部片を含む
第Ⅲ群	183	撚糸圧痕文をもつ口縁部片が主体となる
第Ⅳ群	268	隆起線による装飾の著しい口縁部片主体
第Ⅴ群	361	縄文地文だけのもの(283),綾絡文(50)
第Ⅵ群	304	網代圧痕文他有文のもの(95),無文(209)
第Ⅶ群	2	縄文時代中期後葉（大木９式併行）
その他	2,580	細片で文様判別の不能なものを一括
—	計4,490	

表－4　遺構出土土器点数

遺　構	出土点数
ＳＴ	496
ＥＰ	219
ＳＭ	670
ＳＸ	106
ＥＤ	38
ＳＫ	937
ＥＬ	1
—	計 2,467

※点数は破片を１とする

遺構内における土器群のあり方について

下表からは，第Ⅰ群１・２・５，第Ⅱ群７・９，第Ⅲ群２，第Ⅳ群１類等が共伴率の高い事が判り，時期的に同時か，近接する資料群である事を推測させる。しかし，細部や編年上の問題については，さらに比較要件を吟味し，厳密な検討を行う必要がある。

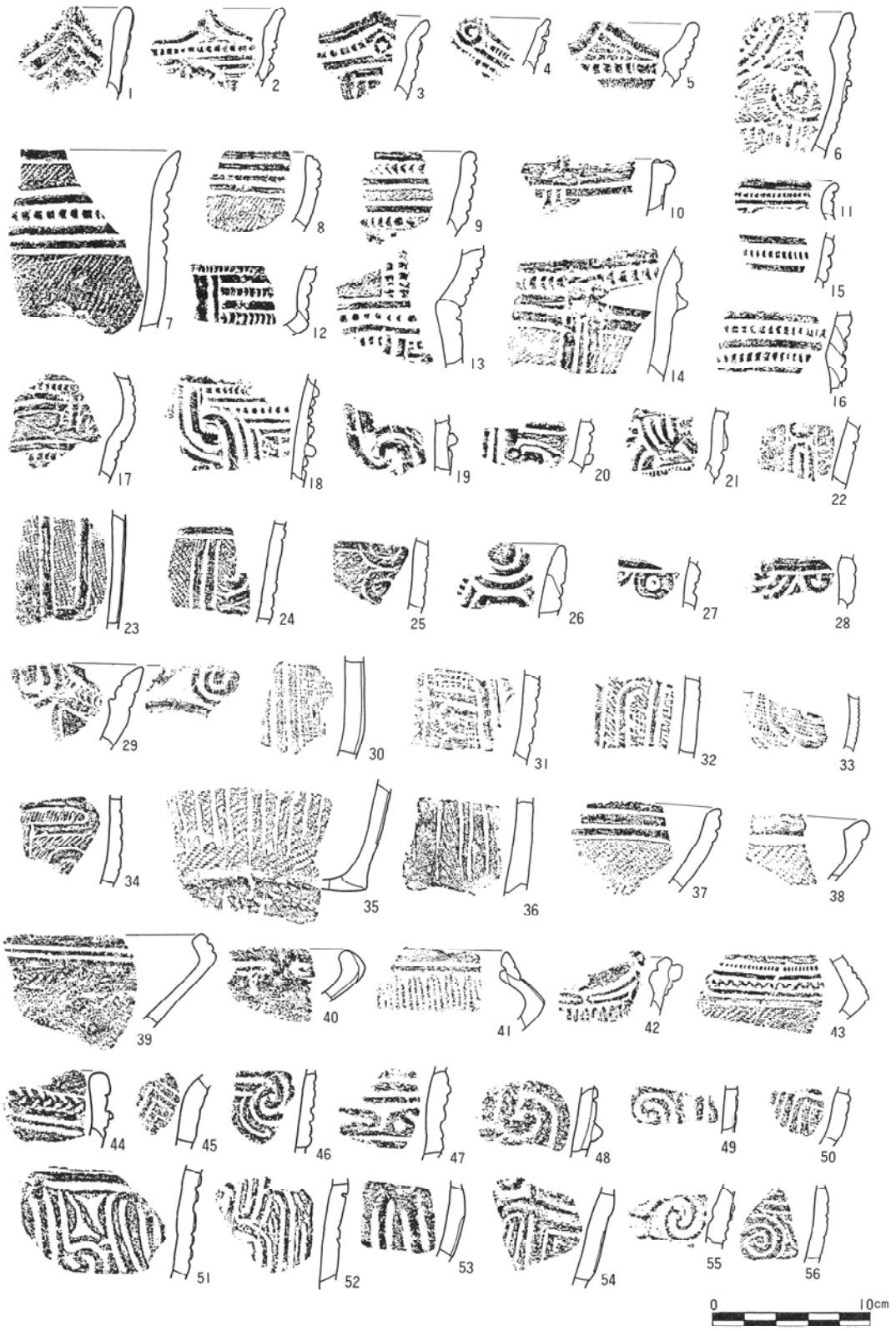
表－5　遺構における土器類別組成

遺構＼群	Ⅰ											Ⅱ										Ⅲ					Ⅳ					Ⅴ				Ⅵ		Ⅶ
類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	1	2	
ＳＴ　10	1																										1	1										
ＳＴ　12	6	7			1										1																							
ＳＴ　86	7	4		1	1															9			4	1											6			
ＳＴ　88	19	8			5										1	2		3		5		1	3	1	1		1					1			17			
ＳＴ　89	2				1															1															1			
ＳＴ　305	10	4														1		1		2	1		2				3						1		8			
ＳＫ　83	4	7									1							1					1				6						6		8			
ＳＫ　231	10	8		1	2		1											2		1			6										2	1	22			
ＳＫ　251	2																						2												3			
ＳＫ　253	7	7			3							1				1		8		18			3	2			4						3		32	3		
ＳＫ　303	4	3					1		1	4								1	1	6			2				1						2		28			

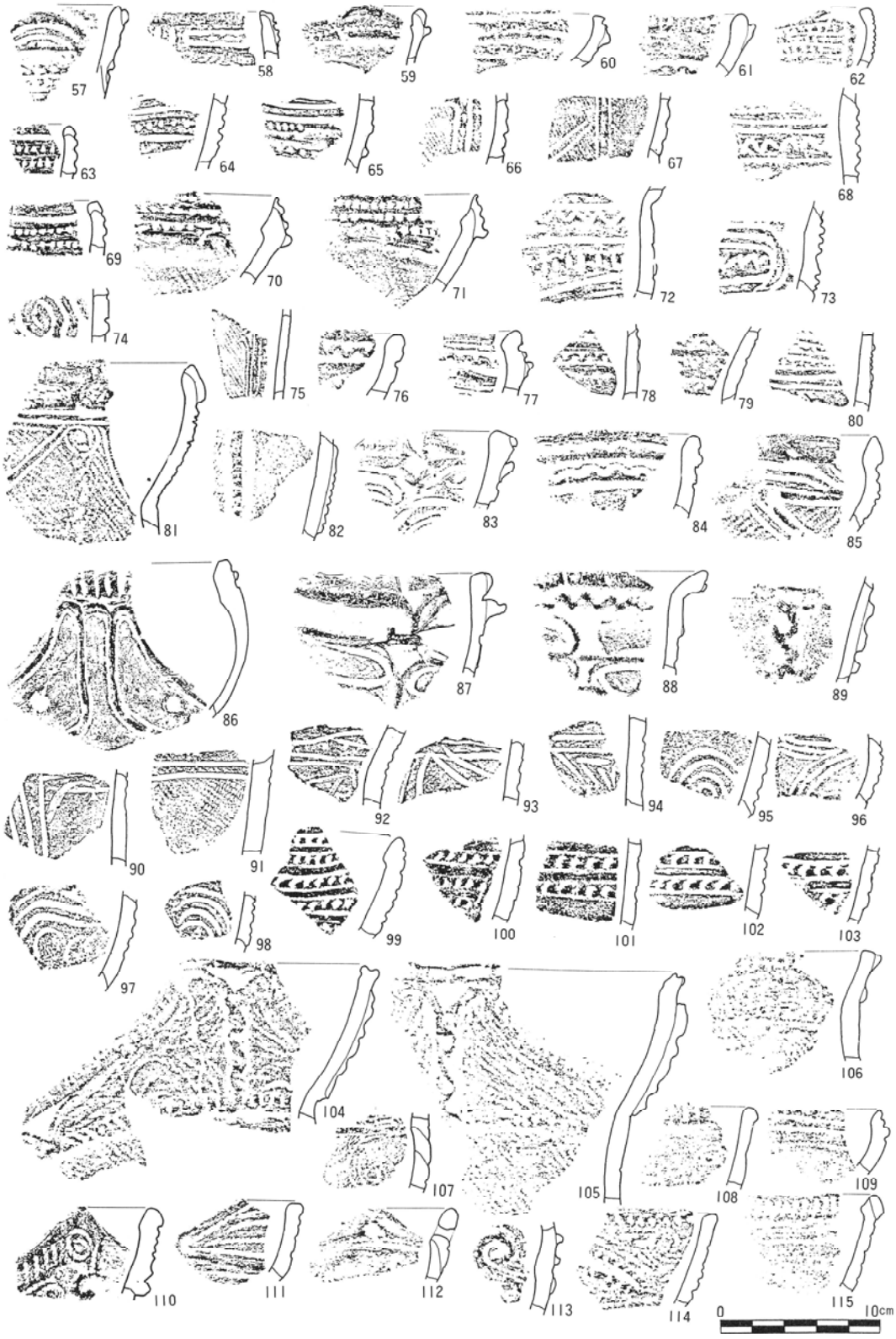
※本表は，出土土器量の比較的多い遺構を抽出し，その出土土器の類別組成を示したもので，
表中の数字は土器片数を示す。（１個体は１と計算）
文様不明の土器は数量から省いた。

表－6　土器分類基準

群	類	主要文様要素・文様技法・併用される文様・文様帯他	地　文	器種	備　考
Ⅰ	1	竹管平行沈線文（半隆起文）　半截竹管の押引きによる半隆起文（断面カマボコ状）を主要な文様とする。器面に直接施文が大半を占めるが貼付文上押引きのものも見られる。（1・22～25・28・35他）	斜行縄文の横位方向施文	深　鉢 浅　鉢	2類の部分片の可能性が強い
	2	竹管平行沈線文（半隆起文）　竹管爪形文（C字状を呈し，半隆起文と同一施文具）　副次的な文様では波状口縁部の円形貼付文や頸部要所の小隆起貼付文等。　（2～4・7～17・26・45他）	〃	深　鉢 浅　鉢	4類の一部を含む可能性が強い
	3	竹管平行沈線文（半隆起文）　竹管爪形文　竹管沈線充填文　大波状口縁をもつ深鉢で，類例は少ない。器面中央に円形貼付文が付される。	〃	深　鉢	（6）
	4	竹管平行沈線文（半隆起文）　隆起入組文（頸部から垂下する竹管調整の隆起線で「互の字」状に入組む）副次的な文様には竹管爪形文，円形貼付文，刻目文（ヘラ状工具）等がある。（18～21・48）	〃	深　鉢	隆起入組文は体部上半が頸部下に施される
	5	竹管平行沈線文（半隆起文）　格子目状沈線文（竹管工具と棒ないしヘラ状工具により描出されるものがある）半隆起文区画内の沈線は，斜位連続刺突文や斜位沈線充填などの多様性がある。	格子目状沈線文（充填）	深　鉢	4類と関連する（5・29～34・50他）
	6	竹管平行沈線文（半隆起文）　沈線による弧状文　沈線で弧文を横位に連続的に描き，外側を彫り込んで刻むもので，内部の円文は沈線による掻き取りを示す。（27）	不　明	深　鉢	5類や7類に関連すると考えられる
	7	蓮華文（広義）　半截竹管の先端を押捺して半円状の弧線とし，その内部に縦位の短い平行沈線文を施す手法（41・42）と半截竹管の押引き手法により「逆U字状」の蓮華文とするもの（347）がある。	格子目状沈線文・斜行縄文	深　鉢 浅　鉢	2類や5類に関連する口縁部資料である
	8	竹管平行沈線文（半隆起文）　竹管爪形文　交互刺突文（棒状工具）　口縁に沿う半隆起文・横位の連続爪形文・交互刺突文・半隆起文・体部地文縄文等から構成される。	斜行縄文（RL縦位施文）	浅　鉢	
	9	隆起線文（貼付文で調整される）　竹管平行沈線文（半隆起文）　矢羽根状交互刺突　幅をもつ隆起線を横位に施し，その間に矢羽根状の交互刺突文が施される。下部の隆帯は竹管調整がある（44）	無　文	浅　鉢	資料的に少ない　全体で2～3点である
	10	隆起線文（竹管調整）　半截竹管により成形調整された隆起文が器面全体に配されるもので，体部が直線的に立上り，口縁が内湾するいわゆるキャリバー形の深鉢と考えられるが全形は不明である。	〃	深　鉢	（46・47・49・52）
	11	隆起線文・沈線文　器面の隆起線は，沈線（棒あるいはヘラ状工具）により両側が調整されるもので，器面全面に施される。（51・53・54）　沈刻による三叉状文が施されるものがある。	〃	深　鉢	（51・53・54）
Ⅱ	1	列点刺突文　棒状工具を連続的に刺突して施文するもので，1段～2段のものを認める。併用される文様は，沈線文，隆起文等がある。刺突文は，沈線間施文と隆起線上施文の2種がある。	斜行縄文の縦位方向施文	深　鉢 浅　鉢	（57・58・62～67・69他）
	2	円形刺突文（竹管工具）　口縁部に，1～2段で並列施文される竹管刺突による円文が見られる。文様は口縁部に限定的に施される。併用される文様は，隆起線文や沈線文がある。	〃	深　鉢	（59・60他）
	3	「ハ」の字状刺突文（棒状工具）　隆起線と沈線で区画された内部に上下から刺突して「ハの字状」の文様を描くもの（68・73）と，沈線間の隆起線に施すもの（72）等がある。副次的な文様に刻目文。	〃	深　鉢	（68・72・73・81他）
	4	結節沈線文（竹管状工具と棒ないしヘラ状工具の二種がある。）文様は，竹管先端を器面に連続的に押引きし「D字状」の結節沈線を描出するものや，棒状工具を用いて施すものがある。（70・71・74他）	〃	深　鉢 浅　鉢	（75）は三角形の彫り込を伴う
	5	交互刺突文（棒状工具主体）　口縁部上半に施文されるグループと頸部に施文されるグループとがある。沈線間の細い隆起線を竹管（77）や棒状工具先端で交互に刺突し，波状隆起線状に仕上げる。	無　文 斜行縄文縦位	深　鉢 浅　鉢	第Ⅳ群の1・2類，第Ⅰ群8類に関連資料有り
	6	隆起線に併用される爪形文（半截竹管）垂下する隆起線上に半截竹管の押捺による爪形文を施文する。隆起線の左右で地文の原体を異にする。資料的に少なく1点のみである。	斜行縄文縦位施文（lr・rl）	深　鉢	（82）
	7	隆起線と沈線文　文様帯は，口縁部に限られるもの（84～86）と，体部に及ぶもの（83・87・88）がある。細い隆起線と両側に沿う沈線で三角形，X字，Y字等のモチーフを構成する一群。	無　文 斜行縄文縦位	深　鉢 鉢	口唇部が肥厚する特徴がある（83～88他）
	8	隆起文　頸部に巡る低い隆起線から垂下するやや幅広の隆起線に，指頭様の工具で斜上から押圧する。地文は土器がもろく，磨滅していて判別が困難であるが，無文地と考えられる。	不　明 無　文（？）	深　鉢	（89他）
	9	沈線文（棒状工具主体）　沈線による渦巻文・同心円文・連弧文等幾何学的な文様や，口縁に平行する多段の沈線文が描かれる。沈線間の間かくの狭いものでは，中間部が隆起線状を呈する。（94～96・98）	無　文 斜行縄文縦横	深　鉢	第Ⅳ群と関連するものが含まれる可能性有り
	10	爪形文（半截竹管）　隆起線を両側から調整して稜上に仕上げ，器面を区画する。区画内には竹管による「C字状」の爪形文が同一施文具の平行沈線間に施されて充填される。（127・129同一個体）	無　文	深　鉢	
Ⅲ	1	撚糸圧痕文（「C字状」爪形文）口縁に沿う多段の平行沈線と，沈線間の撚糸圧痕による「C字状」爪形文が特徴的に施される。沈線以外の併用される文様は判然としない。口唇の肥厚するものがある。	無　文	深　鉢	（99～103他）
	2	撚糸圧痕文（横・斜位施文）　器面を区画する隆起線に沿う撚糸圧痕文や，区画内に施される横位や斜位，連弧文状圧痕と，区画線がなく単独で連弧・平行・渦巻状等に施文される一群がある。（104他）	斜行縄文（結節をもつ）	深　鉢 鉢　浅鉢	併用される文様に，縦位並列撚糸圧痕文等
	3	撚糸圧痕文（連続的な縦位の並列する短い圧痕文）縦位並列圧痕文が，口縁上端部ないし頸部に限定的に用いられる。併用される文様は，貼付隆起線・半隆起文（竹管押引き）（123）等がある。	斜行縄文（単節・縦位施文）	浅　鉢	口唇の肥厚するものが多い　（121～124）
	4	撚糸圧痕文（隆起線を刻む爪形状撚糸圧痕文）　口縁や頸部に巡る1～数条の隆起線に，撚糸圧痕による爪形文が連続して施文される。併用される文様に沈線文等がある。（125）	斜行縄文（単節・縦位施文）	深　鉢	（125・126・128他）
	5	撚糸圧痕文（隆起文上に押圧施文される）　華燭性に富む隆起帯や隆起線が口縁部に施文されるもので，隆線上には横位地文の圧痕文を伴っている。（138他）	斜行縄文	深　鉢	第Ⅳ群1類に関連するもので資料は少ない
Ⅳ	1	口唇部・口縁部・頸部に文様帯を有し，沈線や調整の未発達な貼付隆起線文が文様の主要々素となる口唇に刺突や刻目文，口縁に沈線文，頸部に交互刺突や縦位短線撚糸圧痕文，体部に沈線意匠文の構成。	斜行縄文（単節の縦位施文）	深　鉢	（130・132～134・136・140～143他）口唇肥厚
	2	口縁部・頸部・体部に文様帯をもつグループで，沈線や隆起線文が主要な文様要素となる。口縁に幅広の無文帯，頸部に交互刺突文，体部に隆起線と沈線で描出される意匠文等で構成される。	〃	深　鉢	（135他）　資料は少ない
	3	口唇部・口縁部・体部に文様帯をもつグループ。肥厚させて幅広にした口唇に粘土紐の貼付文で「逆S字」や波状文を施し，口縁上端に若干の無文帯が巡る。体部には，2条1対の貼付文が垂下する。	斜行縄文（単節・縦位施文）	深　鉢	（139）資料は少ない
	4	不調整貼付文（粘土紐の調整が未発達）　文様帯の構成は，大略1類に等しいと考えられる。文様の特徴は粘土紐の貼付文がヘラ状工具等による顕著な調整を受けない点にある。（145～147）	〃	深　鉢	1類と関連するが，文様要素は少ないだろう
	5	調整貼付文（4類に比して貼付文の調整が顕著で，隆起線が定角的）　文様帯の構成は，1類ないし2類に近いと考えられる。体部文様は，隆線と沈線で施される波状文や綾状文である。（144・148他）	〃	深　鉢	〃
Ⅴ	1	地文縄文（主要な文様として縄文が口縁から体部に施されるグループ。）単純口縁で口唇がうすくなるものや複合口縁（折り返し口縁）がある。結節文を伴うものがある。（151・368）	斜行縄文（無節・単節縦位主）	深　鉢	下小野式に関連する
	2	結節を併う斜行縄文　いずれも体部片の資料である。縦位施文が主体を占る。結節部が1個所のものと2個所あるものや，二種の原体を用いるもの（156），単節LR・RL，無節lr・rlがある。（152他）	〃	深　鉢	第Ⅲ群土器や第Ⅴ群1類の体部片の可能性大
	3	羽状縄文（結束のあるものと非結束の二種がある。）　LR＋RL結束によるもので，結束しないで施文するものがある。　単節のもの（162・180・311）と無節のもの（375・386）を認める。	縦位方向施文に限られる	深　鉢	第Ⅱ群土器の体部に施文される例が多い
	4	斜行縄文（他の文様を観察し得ない体部片を一括した。）LR（159）RL（160・164・165）lr（161）等が認められる。これらの帰属すべき土器群は必ずしも明確でない。（159－161・164・165）	縦位・横位・斜位方向施文	深　鉢 浅　鉢？	上記群以外の地文縄文の粗製土器もありうる
Ⅵ	1	網代圧痕文　0.2～0.3cm幅の割竹状の材料を用いて網代編みしたものを一括する。これらは，編方のちがいから数種類に細分されよう。		深　鉢 浅　鉢	（170・171・174～176・181・182・185）
	2	簾状圧痕文　竹ヒゴ等の割竹状の材料を組編みするもので，横通しする割竹材の素材のちがいや，結縛する紐かけ（結び）のちがいが認められる。		深　鉢 浅　鉢	（167・168・169・172・173・178～180・183・184）
Ⅶ		研磨された隆帯や，隆起線，充填縄文等で文様が構成される。	斜行縄文（縦横・斜位）	深　鉢	縄文時代後葉（大木9式期）の土器群


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0
10cm

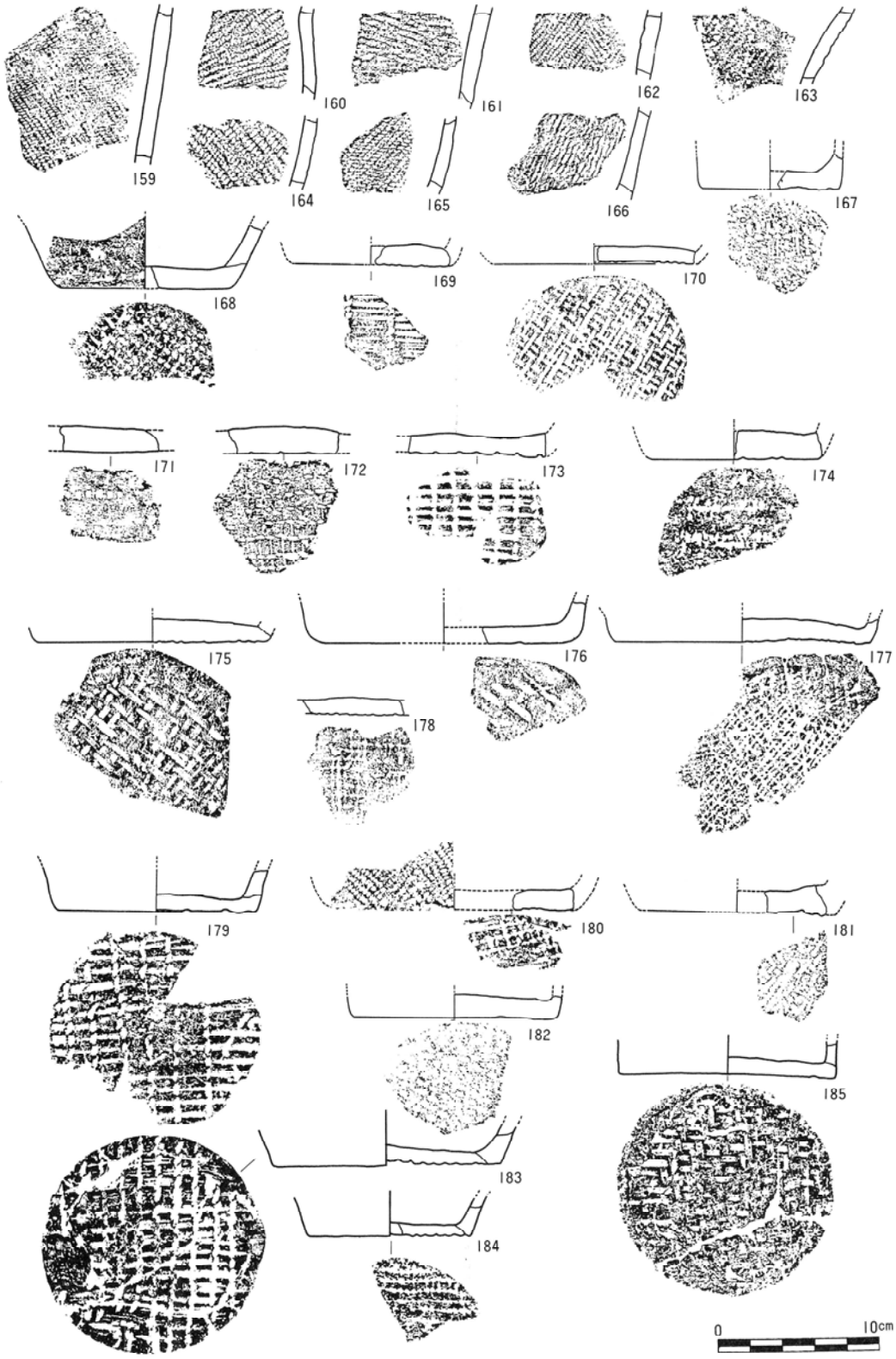
第8図　土器拓影図(1)


57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
0
10cm

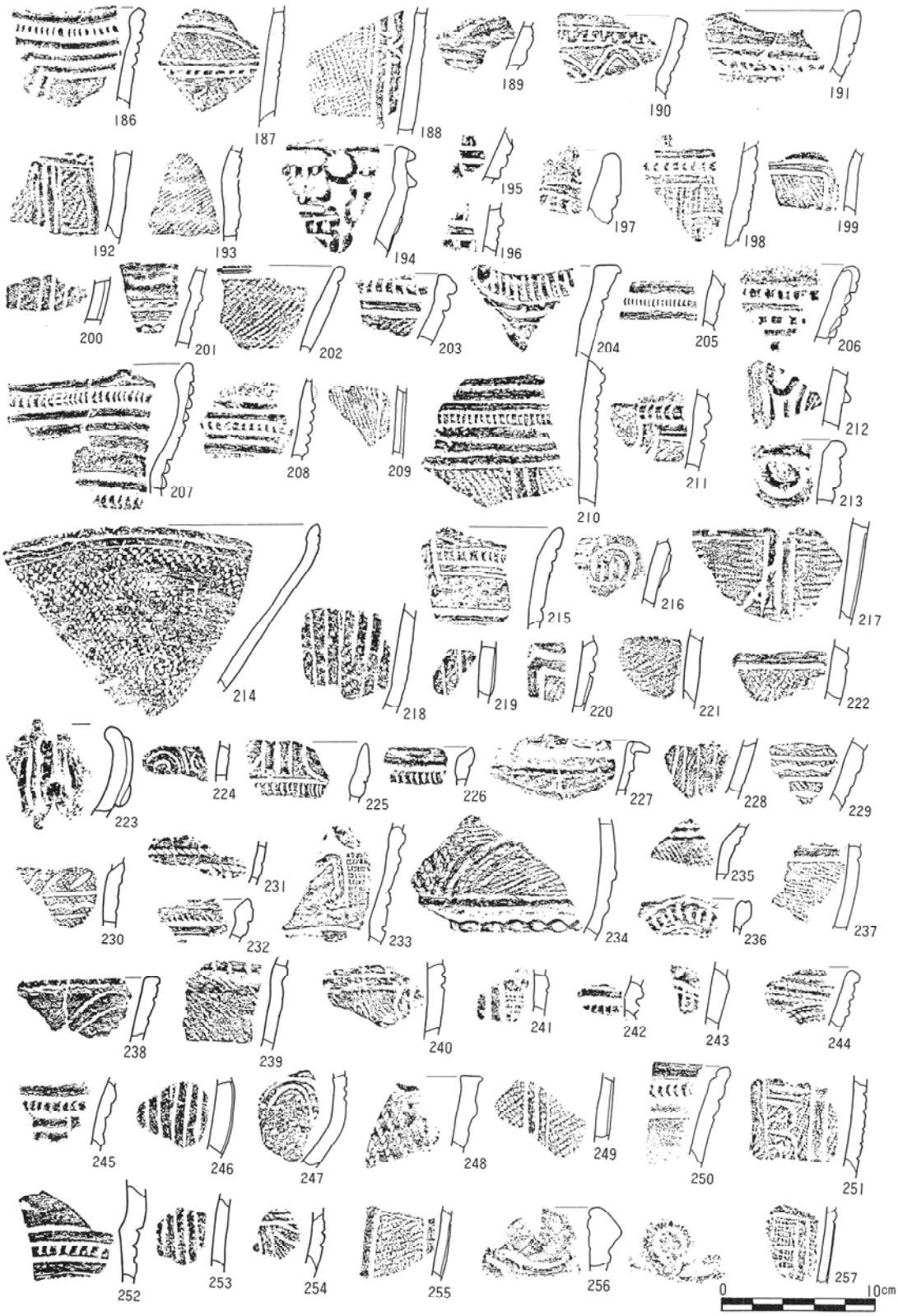
第９図　土器拓影図（２）

116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
0
10cm

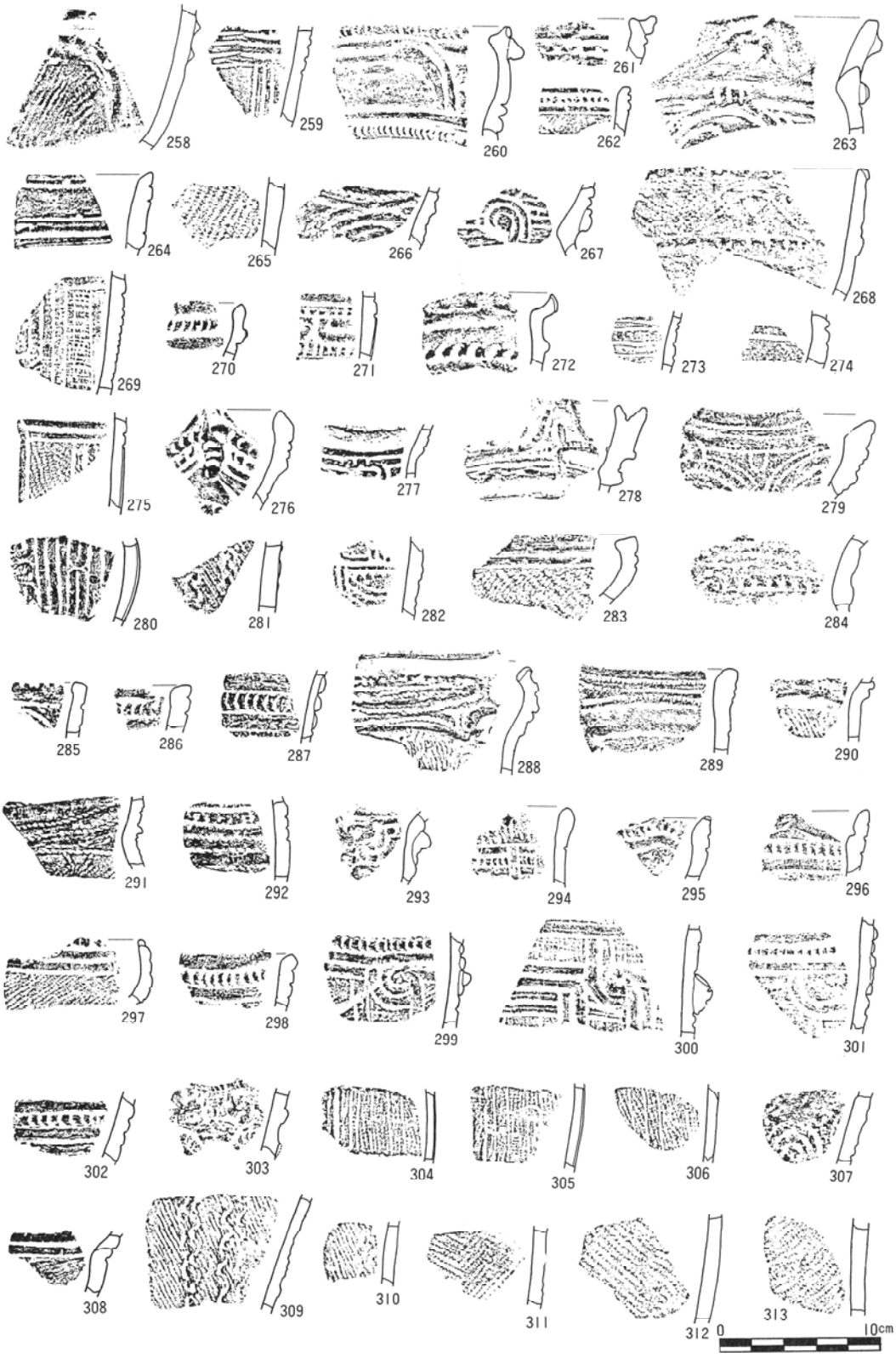
第10図　土器拓影図(３)


159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
10cm

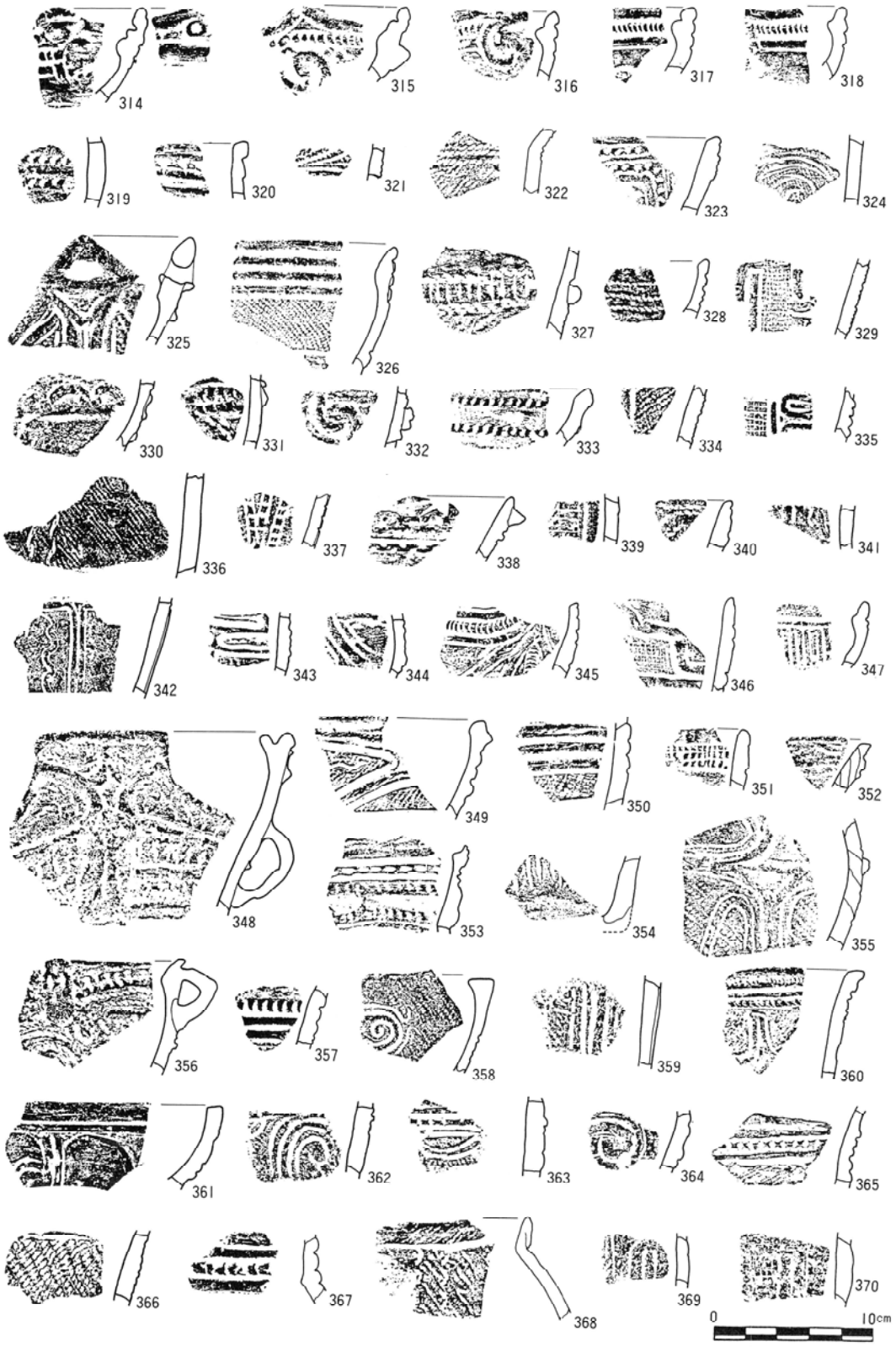
第11図　土器拓影図(４)


186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
0
10cm

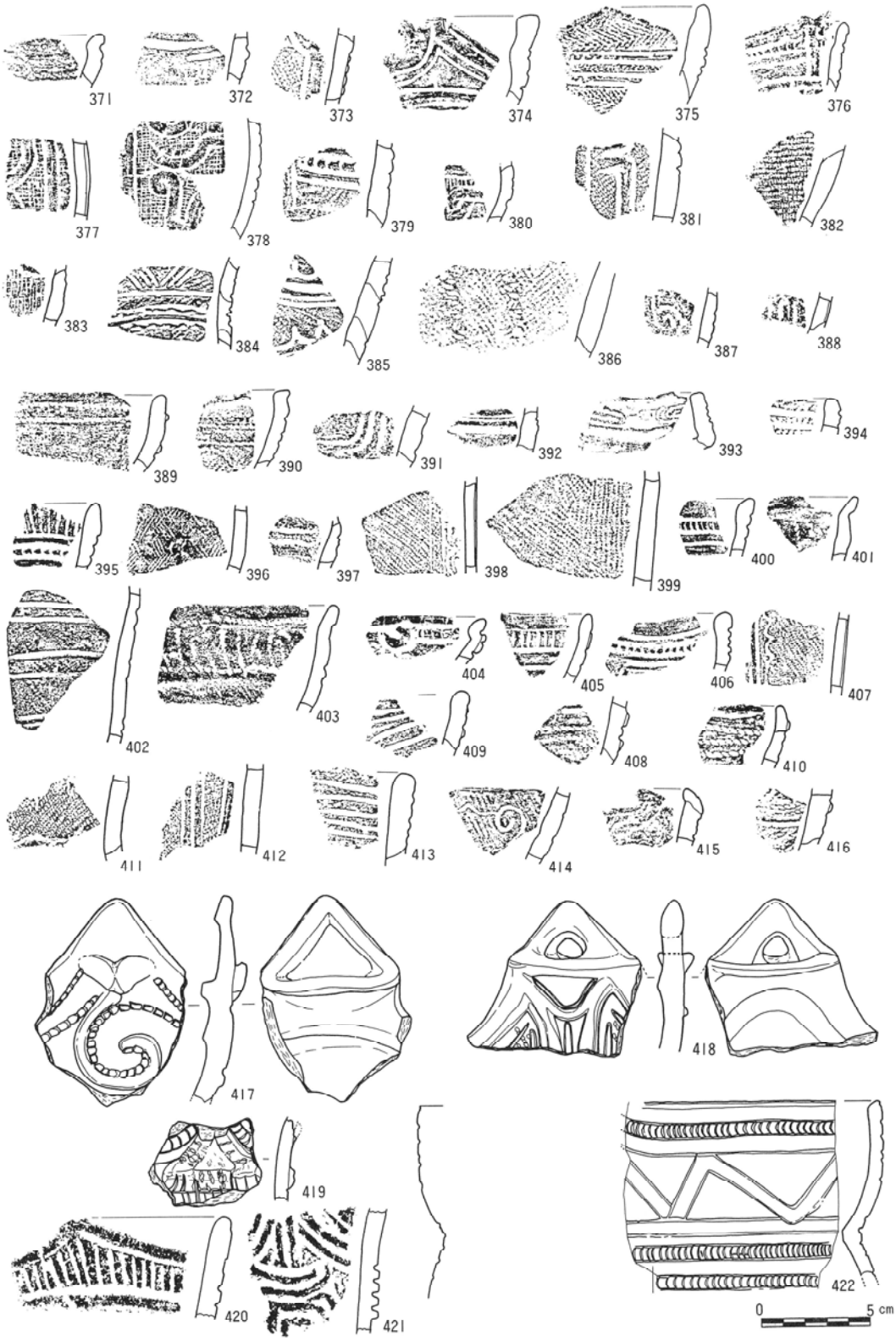
第12図　土器拓影図(５)


258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
0
10cm

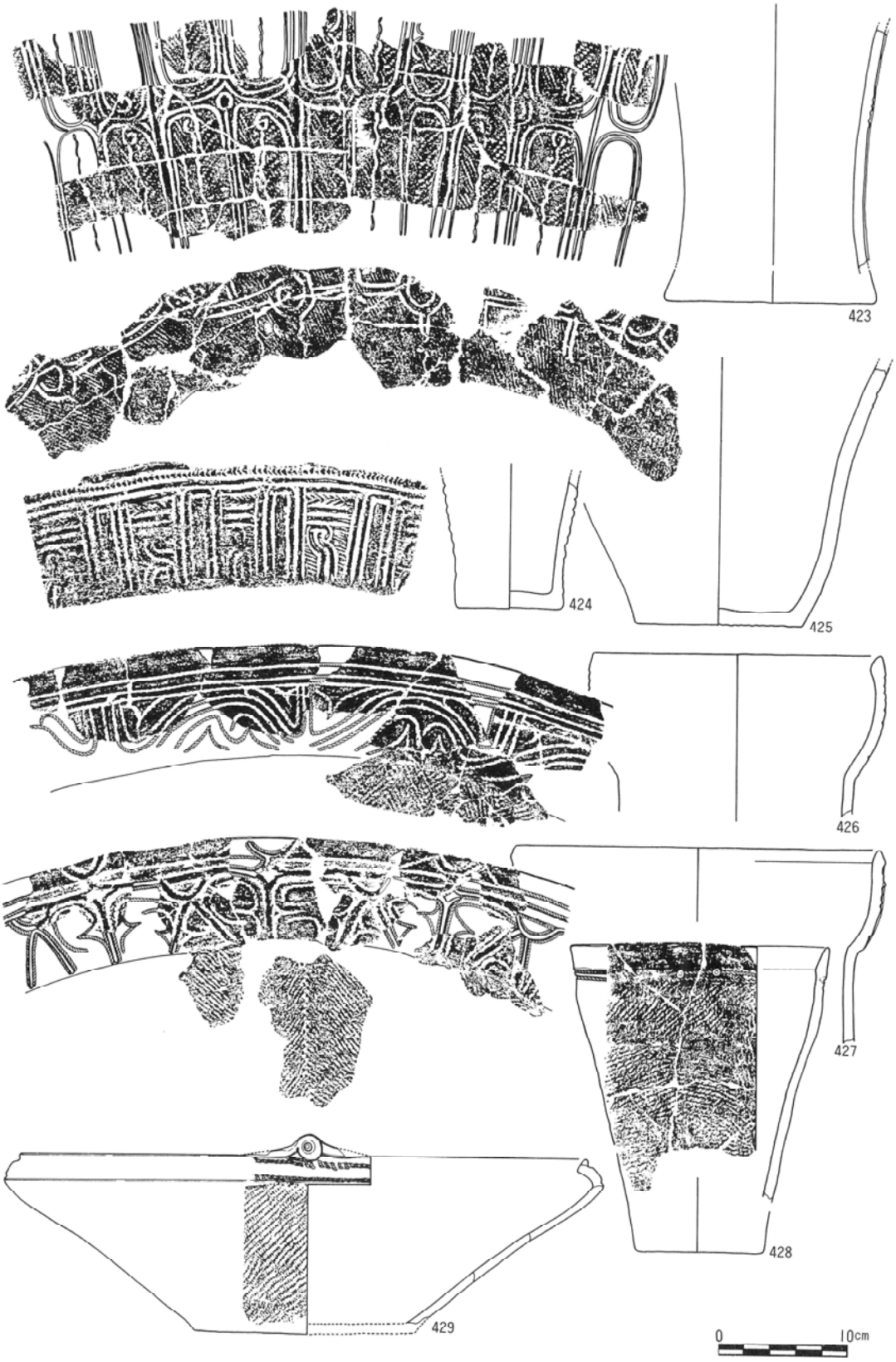
第13図　土器拓影図(６)


314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
0
10cm

第14図　土器拓影図(７)



第15図　土器拓影図(８)・土器実測図(１)



第16図　土器実測図(2)

表－7　土器観察一覧（包含層）

No.	出土地点	層	器形	部位	文様	分類
1	45 － 41～45	Ⅲ	深鉢	口縁	隆線貼付・半隆起文	Ⅰ－1
2	60 － 26～30	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　貼付文	Ⅰ－2
3	10～14－ 26	〃	〃	〃	〃	〃
4	61～65－56～60	〃	〃	〃	〃	〃
5	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　格子目文	Ⅰ－5
6	31～34 － 50	Ⅱ	〃	頸	半隆起文　爪形文　貼付文　沈線充塡	Ⅰ－3
7	50 － 26～30	Ⅲ	〃	〃	半隆起文　爪形文　地文（ＬＲ縦位）	Ⅰ－2
8	60 － 26～30	〃	〃	口縁	〃　地文（Ｒl縦位）	〃
9	60～64－46～50	〃	〃	〃	〃	〃
10	60～64－51～55	〃	〃	〃	半隆起文　沈線	〃
11	21～22－31～34	Ⅰ	〃	〃	半隆起文　爪形文　内外面朱塗り	〃
12	61～64 － 35	Ⅲ	〃	頸	半隆起文　爪形文	〃
13	35－41－26～30	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	〃
14	50 － 26～30	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　貼付文(7と同一個体)	〃
15	70 － 26～30	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	〃
16	Ｘ － Ｏ	／	〃	〃	半隆起文　爪形文	〃
17	51～54－26～30	Ⅲ	〃	〃	半隆起文　爪形文　縄文地文	〃
18	Ｘ － Ｏ	／	〃	〃	半隆起・隆起入組・爪形文　縄文地文	Ⅰ－4
19	51～54－26～30	Ⅲ	〃	体	半隆起文　隆起入組文	〃
20	60～64－51～55	〃	〃	〃	半隆起・隆起入組・貼付文　縄文地文	〃
21	56～60－51～55	〃	〃	〃	半隆起・隆起文　爪形文　刻目文	〃
22	60～64－51～55	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文	Ⅰ－1
23	60 － 26～30	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（ＲＬ斜位）	〃
24	51～55－26～30	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（ＲＬ横位）	〃
25	10～12－29～30	Ⅳ	〃	〃	半隆起文　縄文地文	〃
26	51 － 30	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　縄文地文(不鮮明)	Ⅰ－2
27	20～24 － 50	Ⅱ	〃	〃	半隆起文　沈線弧文	Ⅰ－6
28	51～54－26～30	Ⅲ	〃	〃	半隆起文	Ⅰ－1
29	40 － 26～30	〃	〃	口縁	半隆起文　爪形文　格子目文（竹管）	Ⅰ－5
30	35～41－26～30	〃	〃	体	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	〃
31	Ｘ － Ｏ	／	〃	〃	半隆起文　格子目文（竹管）	〃
32	10～24－26～35	Ⅲ	〃	〃	〃	〃
33	10～14－26～30	〃	〃	〃	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	〃
34	10－14－31－35	〃	〃	〃	半隆起文　沈線文（ヘラ状工具）	〃
35	Ｘ － Ｏ	／	〃	〃	平行沈線文　縄文地文（ＬＲ横位）	Ⅰ－1
36	35～36－26～30	Ⅲ	〃	〃	沈線（ヘラ状工具）	Ⅱ－9
37	51～54－26～30	〃	浅鉢	口縁	半隆起文　縄文地文（ＬＲ横位）	Ⅰ－1
38	20 － 31～34	Ⅱ	〃	〃	半隆起文　縄文地文（ＬＲ横位）	〃
39	25～29 － 50	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（不鮮明）	〃
40	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（不鮮明）	〃
41	10～14－25～30	Ⅲ	〃	〃	沈線（ヘラ状工具・竹管の組合せ）	Ⅰ－7
42	56～59－46～50	〃	〃	〃	沈線（竹管平行沈線の縦位並列施文）	〃
43	61～64 － 35	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　交互刺突（ＬＲ横位）	Ⅰ－8
44	10～24－26～35	〃	〃	〃	半隆起・隆起文　矢羽根状交互刺突文	Ⅰ－9
45	45 － 41～45	〃	深鉢	体	半隆起文　爪形文	Ⅰ－2
46	40 － 41～45	〃	〃	〃	隆起文	Ⅰ－10
47	51～54 － 50	Ⅰ	〃	頸	〃	〃
48	10～14－31～35	Ⅲ	〃	体	半隆起・隆起文	Ⅰ－4
49	50～54－46～50	〃	〃	〃	隆起文	Ⅳ－1
50	20 － 31～34	Ⅱ	〃	口縁	半隆起文　格子目文	Ⅰ－5
51	45 －'41～45	Ⅲ	〃	頸	隆起文　沈線（ヘラ状工具）	Ⅰ－11
52	10～24－26～35	〃	〃	体	隆起文	Ⅰ－10
53	10～14－26～30	〃	〃	〃	半隆起文　沈線（ヘラ状工具）	Ⅰ－11
54	Ｘ － Ｏ	／	〃	〃	〃	〃
55	56～59－46～50	Ⅲ	〃	〃	隆起文	Ⅳ－1
56	65 － 41～45	Ⅲ	深鉢	体	半隆起文	Ⅰ－1
57	Ｘ － Ｏ	／	〃	口縁	刺突文(棒状工具) 隆線文	Ⅱ－1
58	35～36－26～30	Ⅲ	〃	〃	刺突文(棒状工具) 隆線文　沈線文	〃
59	61～65－51～60	〃	〃	〃	刺突文(口唇部隆帯上に円形竹管文)	Ⅱ－2
60	40 － 26～30	〃	〃	〃	刺突文(円形竹管文) 隆帯　沈線文	〃
61	60～64－51～55	〃	〃	〃	刺突文	Ⅱ－5
62	50 － 26～30	〃	〃	〃	刺突文(沈線間に棒状工具) 隆線文	Ⅱ－1
63	10～24－26～35	〃	〃	〃	刺突文(沈線内に棒状工具) 沈線文	〃
64	65 － 56～60	〃	〃	頸	刺突文(沈線間に棒状工具) 沈線文	〃
65	60～64－56～60	〃	〃	〃	刺突文(隆線上に棒状工具) 沈線文	〃
66	20 － 31～34	Ⅱ	〃	体	刺突文(沈線間に棒状工具)地文(ＬＲ縦)	〃
67	〃	〃	〃	〃	〃　縄文地文(不鮮明)	〃
68	10～14－26～30	Ⅲ	〃	〃	刺突文(沈線間に棒状工具) 隆線文	Ⅱ－3
69	10～24－26～35	〃	浅鉢	口縁	刺突文(沈線内に棒状工具)	Ⅱ－1
70	〃	〃	深鉢	〃	押引文(隆帯上の隆線間に結節沈線文)	Ⅱ－4
71	50～54－46～47	〃	〃	〃	押引文(70,71とも縄文地文は不鮮明)	〃
72	60 － 26～30	〃	〃	頸	刺突文(隆帯上に棒状工具) 沈線文	Ⅱ－3
73	15～19－26～30	〃	〃	体	刺突文(68と同一個体)	〃
74	61～65－56～60	〃	〃	〃	押引文(渦巻状に結節沈線文) 沈線文	Ⅱ－4
75	10～24－26～35	〃	〃	〃	押引文(結節沈線) 地文（ＬＲ横位）	〃
76	51～54－26～30	〃	〃	口縁	刺突文(交互刺突・棒状工具) 沈線文	Ⅱ－5
77	61－65－56～60	〃	〃	〃	刺突文(交互刺突・円形竹管) 隆・沈線	〃
78	50 － 26～30	〃	〃	頸	刺突文(交互刺突・棒状工具) 隆・沈線	〃
79	10～24－26～35	〃	〃	〃	刺突文(交互刺突・棒状工具) 隆線文	〃
80	60～64－51～55	〃	〃	〃	刺突文(交互刺突・棒状工具) 隆・沈線	〃
81	50～54－46～50	〃	〃	口縁	刺突文(棒状工具)半隆起文(ＲＬ横位)	〃
82	20～24－26～30	〃	〃	体	刺突文(隆線上に半截竹管の爪形文)	Ⅱ－6
83	10～14－31～35	〃	〃	口縁	隆起線文　沈線文	Ⅱ－7
84	61～64 － 35	〃	〃	〃	隆起線文　沈線文	〃
85	31～34 － 50	Ⅱ	〃	〃	隆起線文　沈線文　地文（ＬＲ斜位）	〃
86	10～14－31～35	Ⅲ	〃	〃	〃（波状の基部に２個の孔を有す）	〃
87	31～34 － 50	Ⅱ	〃	〃	〃	〃
88	10～24－26～35	Ⅲ	〃	〃	〃（地文不鮮明）	〃
89	61～65－56～60	〃	〃	体	隆起線文	Ⅱ－8
90	20 － 31～34	Ⅱ	〃	〃	沈線文　縄文地文（ＬＲ横位）	Ⅳ－1
91	18 － 31	Ⅲ	〃	〃	沈線文　縄文地文（ＬＲ縦位）	〃
92	21・22－31～34	Ⅰ	〃	頸	沈線文　縄文地文（不鮮明）	〃
93	20 － 31～34	Ⅱ	〃	〃	沈線文　縄文地文（ＲＬ縦位）	〃
94	50～54－51～55	Ⅲ	〃	〃	沈線文（三角状文）	Ⅱ－9
95	5～19－20～30	Ⅰ	〃	〃	沈線文（同心円状文）縄文地文(不鮮明)	〃
96	65 － 41～45	Ⅲ	〃	〃	沈線文（弧状文）	〃
97	10～14－26～30	〃	〃	〃	沈線文　縄文地文（不鮮明）	Ⅳ－1
98	50～54－46～50	〃	〃	〃	沈線文（同心円状文）	〃
99	10～14－31～35	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文(多段沈線間)	Ⅲ－1
100	〃	〃	〃	頸	撚糸圧痕文(　〃　)	〃
101	10～14－26～30	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(　〃　)	〃
102	15～19－26～30	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(　〃　)	〃
103	10－14－26～30	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(　〃　)	〃
104	60 － 26～30	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文　隆起線文　地文(ＬＲ縦位)	Ⅲ－2
105	〃	〃	〃	〃	〃	〃
106	〃	〃	〃	〃	〃（104～106　同一個体）	〃
107	25～29－51～55	〃	〃	頸	撚糸圧痕文(渦巻文)　粘土紐貼付	〃
108	Ｘ － Ｏ	／	〃	口縁	撚糸圧痕文(連弧文)	〃
109	10～24－26～35	Ⅲ	浅鉢	〃	撚糸圧痕文(横位並列)	〃
110	15～19－26～30	〃	深鉢	〃	撚糸圧痕文(縦位・渦巻文) 隆起線	〃

No.	出土地点	層	器形	部位	文様	分類
111	10～24－26～30	Ⅲ	深鉢	口縁	撚糸圧痕文(隆線区画内に横位圧痕)	Ⅲ－2
112	21～22－31～34	Ⅰ	〃	〃	撚糸圧痕文(横位　沈線)地文(ＬＲ斜位)	〃
113	63 － 41～45	Ⅲ	〃	〃	撚糸圧痕文(渦巻文) 渦巻状隆線	〃
114	10 － 35	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(縦位並列・渦巻・弧) 隆線	〃
115	60 － 26～30	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(縦位並列・横位並列)	〃
116	60 － 50	〃	〃	頸	撚糸圧痕文(横位・縦位爪形)(ＬＲ横位)	〃
117	64 － 50	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(隆線区画に沿う)(ＬＲ縦位)	〃
118	60～64－41～45	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(隆線区画に沿う連弧文)	〃
119	55～59－51～55	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(　〃　)	〃
120	10～24－26～35	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(　〃　及び充填施文)	〃
121	40 － 26～30	Ⅳ	〃	口縁	撚糸圧痕文(縦位並列) 地文 lr 縦位)	Ⅲ－3
122	45 － 41～45	Ⅲ	〃	〃	〃	〃
123	21・22－31～34	Ⅰ	〃	〃	撚糸圧痕文(隆帯上に縦位並列) 竹管文	〃
124	60～64－51～55	Ⅲ	〃	頸	撚糸圧痕文(粘土紐貼付区画に縦位並列)	〃
125	20 － 41～45	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(隆線上に縦位並列) 沈線文	Ⅲ－4
126	10～24－26～35	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文(隆線上に縦横位)　沈線文	〃
127	51～54－26～30	〃	〃	〃	爪形文（半截竹管）　隆線・沈線文	Ⅱ－10
128	15～19－26～30	〃	〃	頸	撚糸圧痕文(隆線上に爪形状に圧痕)	Ⅲ－4
129	51～54－26～30	Ⅱ	〃	〃	爪形文（127と同一個体）	Ⅱ－10
130	50～54－46～50	Ⅲ	〃	口縁	刺突(竹管・棒状工具) 沈線　隆線	Ⅳ－1
131	10～24－26～30	〃	〃	〃	撚糸圧痕文(縦位並列・隆線に沿う弧文)	Ⅲ－2
132	20～24－26～30	〃	〃	〃	沈線（縦位並列・鋸歯状）隆線	Ⅳ－1
133	〃	〃	〃	〃	沈線（縦位並列・鋸歯状）隆線　撚糸	〃
134	Ｘ － Ｏ	／	〃	頸	沈線　粘土紐貼付→交互刺突	〃
135	60 － 20	Ⅰ	〃	口縁	沈線　粘土紐貼付→交互刺突　隆線文	Ⅳ－2
136	15～19－26～30	Ⅲ	〃	〃	沈線　粘土紐貼付	Ⅳ－1
137	21・22－31～34	Ⅰ	〃	〃	隆線　隆線上に縦位撚糸圧痕	〃
138	56～59－46～50	Ⅲ	〃	〃	撚糸圧痕文(隆帯上に沿う) 沈線	Ⅲ－5
139	55～59－56～60	〃	〃	〃	粘土紐貼付　沈線　地文（ＬＲ縦位）	Ⅳ－3
140	50～54－46～50	〃	〃	〃	沈線　隆線　縄文地文（不鮮明）	Ⅳ－1
141	40 － 26～30	〃	〃	体	沈線　隆線　縄文地文（ＬＲ縦位）	〃
142	51～54－26～30	〃	〃	頸	沈線　縄文地文（ＬＲ縦位）	〃
143	55 － 41～45	〃	〃	体	沈線　縄文地文（ＬＲ縦位）	〃
144	20～24－26～30	〃	〃	〃	粘土紐貼付→沈線調整　地文(Ｌ.Ｒ縦位)	Ⅳ－5
145	〃	〃	〃	頸	粘土紐貼付無調整 沈線 交互刺突(ＬＲ縦位)	Ⅳ－4
146	25～29 － 50	Ⅱ	〃	体	粘土紐貼付無調整　地文（ＬＲ縦位）	〃
147	55～59－51～55	Ⅲ	〃	頸	粘土紐貼付無調整 沈線 地文(ＬＲ縦位)	〃
148	60～64－51～55	〃	〃	体	粘土紐貼付→沈線調整　地文(不鮮明)	Ⅳ－5
149	35～36－26～30	〃	〃	口縁	研磨された隆帯 隆線 充填縄文(ＬＲ斜)	Ⅶ
150	10～24－26～35	〃	〃	〃	〃	〃
151	10 － 35	〃	〃	口縁	縄文地文（ＲＬ斜位）結節文	Ⅴ－1
152	61～65－56～60	〃	〃	体	結節文　縄文地文（ｌｒ）	Ⅴ－2
153	10～14－26～30	〃	〃	〃	結節文　縄文地文（ＲＬ）	〃
154	30 － 26～30	〃	〃	〃	結節文　縄文地文（ＬＲ）	〃
155	50～54－26～30	〃	〃	〃	結節文　縄文地文（ｌｒ）	〃
156	60 － 26～30	〃	〃	〃	結節文　縄文地文	〃
157	15～18－28～31	〃	〃	〃	結節文　縄文地文（ＲＬ）	〃
158	30 － 26～30	〃	〃	〃	結節文　縄文地文（ＬＲ）	〃
159	Ｘ － Ｏ	／	〃	〃	斜行縄文（ＬＲ）	Ⅴ－4
160	51～54－26～30	Ⅲ	〃	〃	斜行縄文（ＲＬ）	〃
161	35・36－26～30	〃	〃	〃	斜行縄文（ｌｒ）	〃
162	10～14－31～35	〃	〃	〃	羽状縄文（結束による）	Ⅴ－3
163	61～65－56～60	〃	〃	〃	結節文　縄文地文（ＲＬ）	Ⅴ－2
164	10～24－26～30	〃	〃	〃	斜行縄文（ＲＬ）	Ⅴ－4
165	35・36－26～30	〃	〃	〃	斜行縄文（ＲＬ）	〃
166	10～24－26～35	Ⅲ	深鉢	体	結節文　縄文地文（ｒｌ）	Ⅴ－2
167	51～54－26～30	〃	〃	底	簾状圧痕	Ⅵ－2
168	ＳＭ214	Ⅰ	〃	〃	〃	〃
169	70 － 26～30	Ⅲ	〃	〃	〃	〃
170	30 － 26～30	〃	〃	〃	網代圧痕	Ⅵ－1
171	50～54－46～60	〃	〃	〃	〃	〃
172	20～24－26～30	〃	〃	〃	簾状圧痕	Ⅵ－2
173	61～65－56～60	〃	〃	〃	〃	〃
174	50～54－46～50	〃	〃	〃	網代圧痕	Ⅵ－1
175	50－54－26～30	〃	〃	〃	〃	〃
176	55～59－51～55	〃	〃	〃	〃	〃
177	35～36－26～30	〃	〃	〃	簾状圧痕	Ⅵ－2
178	10～24－26～30	〃	〃	〃	〃	〃
179	15～19－26～30	〃	〃	〃	〃	〃
180	10～14－31～35	〃	〃	〃	〃	〃
181	70 － 26～30	〃	〃	〃	網代圧痕	Ⅵ－1
182	15～19－26～30	〃	〃	〃	〃	〃
183	54 － 30	〃	〃	〃	簾状圧痕（ＲＰ003）	Ⅵ－2
184	Ｘ － Ｏ	／	〃	〃	〃	〃
185	ＳＴ86	Ｆ	〃	〃	網代圧痕（ＲＰ005）	Ⅵ－1

表－8　土器観察一覧（遺構）

No.	出土遺構	覆土	器形	部位	文様	分類
186	ＳＫ　1	1	深鉢	口縁	半隆起文　爪形文	Ⅰ－2
187	〃	〃	〃	体	半隆起文　爪形文	〃
188	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（ＲＬ横位）	Ⅰ－1
189	〃	〃	〃	頸	撚糸圧痕文(隆線区画に沿う横位・連弧)	Ⅲ－2
190	〃	〃	〃	〃	沈線（交互並列　鋸歯状）	Ⅳ－1
191	ＳＫ　2	1	〃	口縁	半隆起文　爪形文	Ⅰ－2
192	〃	〃	〃	頸	半隆起文　刺突　縄文地文（ＲＬ縦位）	Ⅰ－1
193	〃	〃	〃	体	縄文地文（ＲＬ縦位）	Ⅴ－4
194	ＳＫ　9	2	〃	口縁	隆起線文　沈線　刺突	Ⅱ－7
195	〃	〃	〃	体	半隆起文　爪形文	Ⅰ－2
196	〃	〃	〃	頸	隆起線文　沈線　刺突	Ⅱ－7
197	〃	1	〃	体	半隆起文　爪形文	Ⅰ－2
198	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　格子目文（ヘラ）	Ⅰ－5
199	ＳＴ10 ピット	Ｆ	〃	頸	沈線文　縄文地文（ＲＬ横位）	Ⅳ－1
200	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（不鮮明）	Ⅰ－1
201	〃	〃	〃	頸	沈線　粘土紐貼付→交互刺突　隆線	Ⅳ－2
202	ＳＴ12 ピット	1	浅	口縁	半隆起文　縄文地文（ＬＲ斜位）	Ⅰ－1
203	〃	〃	深	体	半隆起文　爪形文　縄文地文（不鮮明）	Ⅰ－2
204	〃	〃	〃	口縁	結節沈線　隆起・交互刺突・貼付文	Ⅱ－4
205	〃	1	〃	頸	半隆起文　爪形文	Ⅰ－2
206	ＳＫ　17	2	〃	口縁	半隆起文　爪形文	〃
207	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	〃
208	ＥＰ　21	1	〃	頸	半隆起文　爪形文	〃
209	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（ｒｌ横位）	Ⅰ－1
210	ＳＴ12 ピット	Ｆ	〃	頸	半隆起文　縦位並列沈線（ＲＬ横位）	Ⅰ－2
211	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文（ＬＲ横位）	〃
212	ＥＰ　54	1	〃	体	隆起線文　沈線文	Ⅱ－7
213	〃	〃	〃	〃	半隆起文	Ⅰ－1
214	〃	Ｆ	浅	口縁	半隆起文　縄文地文（ＲＬ横位）	〃
215	ＥＰ　72	Ｆ	深	〃	半隆起文　爪形文	〃

No.	出土遺構	覆土	器形	部位	文様	分類
216	EP 72	F	深	体	半隆起文　隆起文　爪形文	I－2
217	ST 81	2	〃	〃	半隆起文　縄文地文（LR斜位）	I－1
218	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（不鮮明）	〃
219	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（LR横位）	〃
220	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（LR横位）	〃
221	ST 81	F	〃	〃	縄文地文（LR横位）	V－1
222	〃	1	〃	〃	半隆起文　縄文地文（LR横位）	I－1
223	ST 82	〃	〃	口縁	半隆起文　貼付文　隆起文	I－4
224	〃	〃	〃	体	沈線文　縄文地文（不鮮明）	II－9
225	SK 83	2	〃	口縁	半隆起文　爪形文	I－2
226	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	〃
227	〃	〃	〃	〃	撚糸圧痕文　隆線文	III－2
228	〃	1	〃	体	沈線文　縄文地文（不鮮明）	IV－1
229	〃	2	〃	頸	沈線文　縄文地文（RL横位）	〃
230	〃	〃	〃	体	沈線文　縄文地文（RL横位）	〃
231	ST 85	Y	〃	〃	撚糸圧痕文	III－2
232	〃	2	〃	口縁	半隆起文　爪形文	I－1
233	〃	Y	〃	体	半隆起文　格子目文	I－5
234	〃	2	〃	頸	撚糸圧痕文　隆線文	III－2
235	ST 86	Y	〃	〃	撚糸圧痕文　隆線文	〃
236	〃	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（隆帯上縦位並列）弧文	III－3
237	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（lr縦位）	I－1
238	ST 88	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（口唇縦位・口縁横位・弧文）	III－2
239	〃	〃	〃	体	撚糸圧痕文（縦位並列）（LR縦位）	III－3
240	〃	F	〃	〃	沈線文　縄文地文（lr縦位）	IV－1
241	〃	〃	〃	〃	半隆起文　格子目文	I－5
242	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	I－2
243	〃	〃	〃	〃	半隆起文	I－1
244	ST89ピット	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位　弧文）	III－2
245	〃	〃	〃	体	半隆起文　爪形文	I－2
246	ST 89	Y	〃	〃	半隆起文	I－1
247	〃	〃	〃	口縁	沈線文　縄文地文（lr横位）	II－9
248	ST89ピット	1	〃	〃	撚糸圧痕文（連弧文）	III－2
249	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（LR斜位）	I－1
250	〃	〃	〃	口縁	半隆起文　爪形文	I－2
251	ST 90	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（RL斜位）	I－1
252	〃	〃	〃	頸	半隆起文　爪形文	I－2
253	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（不鮮明）	I－1
254	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（RL縦位）	〃
255	ST92ピット	F	〃	〃	半隆起文　縄文地文（LR縦位）	〃
256	ST94ピット	〃	〃	口縁	隆起線　沈線文	II－7
257	〃	〃	〃	体	半隆起文　格子目文（竹管）	I－5
258	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（RL縦・斜位）	I－1
259	〃	〃	〃	〃	半隆起文	〃
260	ST 88	1	〃	口縁	半隆起文　爪形文	〃
261	〃	〃	〃	〃	刺突文（交互刺突・棒状工具）沈線	II－5
262	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　地文（LR横位）	I－2
263	〃	〃	〃	〃	隆起線　沈線	II－7
264	〃	〃	〃	〃	半隆起文	I－1
265	〃	〃	〃	体	縄文地文（LR横位）	V－1
266	〃	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（隆線に沿う弧文）	III－2
267	〃	〃	〃	頸	半隆起文　爪形文　貼付文	I－2
268	〃	2	〃	口縁	撚糸圧痕文（口唇縦位・口縁連弧）	〃
269	〃	〃	〃	体	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	I－5
270	〃	〃	〃	口縁	半隆起文　爪形文	I－2
271	ST 88	2	深鉢	体	半隆起文　格子目文（竹管工具）	I－5
272	〃	〃	〃	口縁	隆起線・撚糸爪形文　貼付文	III－4
273	〃	〃	〃	体	沈線（ヘラ状工具）並列撚糸圧痕文	III－1
274	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（RL横位）	I－1
275	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（RL斜・横位）	〃
276	SK 95	1	〃	口縁	半隆起文　爪形文	I－2
277	〃	〃	〃	頸	隆起線・沈線　交互刺突文	IV－1
278	ST89ピット	〃	〃	口縁	隆起線・沈線　粘土紐貼付・刻目文	〃
279	ST96ピット	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（隆線連弧状区画）	III－2
280	ST 96	〃	〃	体	半隆起文（器面と密に施文U字逆U字）	I－2
281	〃	〃	〃	〃	隆起線文（波状）地文縄文（LR縦位）	II－8
282	SM 202	F	〃	〃	半隆起文　爪形文（横位連続、蓮華文）	I－2
283	SM 206	〃	浅鉢	口縁	半隆起文　縄文地文（RL横位施文）	I－1
284	〃	〃	深鉢	頸	隆起線・爪形撚糸圧痕文	III－4
285	SM 209	1	〃	口縁	撚糸圧痕文（口唇部並列）沈線文	IV－1
286	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文（口唇やや肥厚）	I－2
287	SM 210	F	〃	頸	半隆起文　爪形文	〃
288	SM 213	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位連弧状）隆起線区画	III－2
289	〃	1	〃	〃	結節沈線文　隆起線　沈線	II－4
290	〃	F	〃	頸	撚糸圧痕文　縄文地文（結節・lr縦）	III－2
291	〃	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（連弧）縄文地文（LR横位）	〃
292	〃	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（横位・爪形）	III－1
293	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	I－2
294	〃	〃	〃	口縁	半隆起文　爪形文　撚糸圧痕文（並列）	〃
295	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文（波状口縁）	〃
296	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文（波状口縁）	〃
297	〃	〃	〃	頸	半隆起文　爪形文　縄文地文（LR横位）	〃
298	〃	〃	〃	口縁	半隆起文　爪形文	〃
299	〃	〃	〃	頸	半隆起文　爪形文　隆起入組文	I－4
300	〃	〃	〃	〃	半隆起文　隆起入組文　格子目文（ヘラ）	I－5
301	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　縄文地文（不明）	I－2
302	〃	1	〃	〃	半隆起文　爪形文	〃
303	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　隆起線・撚糸圧痕	〃
304	〃	〃	〃	体	竹管平行沈線　縄文地文（RL斜位）	I－1
305	〃	F	〃	〃	竹管平行沈線　縄文地文（RL斜位）	〃
306	〃	〃	〃	〃	竹管平行沈線　縄文地文（RL斜位）	〃
307	〃	〃	〃	頸	沈線（ヘラ状工具）連弧状施文	II－9
308	〃	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（LR横位施文）	I－1
309	〃	〃	〃	体	斜行縄文（2個所に結節をもつlr縦位）	V－2
310	〃	〃	〃	〃	斜行縄文（lr縦位施文，結節を有す。）	〃
311	〃	〃	〃	〃	羽状縄文（結束なし，LRとRL縦位）	V－3
312	〃	1	〃	〃	斜行縄文（RL横位施文）	V－4
313	〃	F	〃	〃	斜行縄文（LR横位施文）	〃
314	SM 214	1	〃	口縁	半隆起文　爪形文	I－2
315	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　隆起入組文	〃
316	〃	F	〃	〃	半隆起文　爪形文　隆起入組文	〃
317	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	〃
318	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	〃
319	SM 216	F	〃	頸	撚糸圧痕文（平行沈線間爪形状圧痕）	III－1
320	〃	1	〃	口縁	半隆起文　刻目文（棒状工具）	I－1
321	〃	〃	〃	頸	撚糸圧痕文（横位施文）隆起線	III－2
322	SM 217	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（横位多段施文）	〃
323	〃	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（平行沈線間爪形状圧痕）	III－1
324	〃	〃	〃	〃	半隆起文（蓮華文）	I－7
325	SM 218	F	〃	〃	隆起線・沈線（鶏頭形波状口縁）	II－7

No.	出土遺構	層土	器形	部位	文様	分類
326	SM 218	F	深鉢	口縁	半隆起文　縄文地文（RL横位）	I－1
327	〃	〃	〃	頸	撚糸圧痕文（横位）隆起文・刻目（RL）	III－2
328	〃	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位平行）	〃
329	〃	1	〃	体	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	I－5
330	〃	F	〃	頸	撚糸圧痕文　隆起線（Y字・連弧）	III－2
331	〃	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（隆帯・隆線区画内）	〃
332	〃	〃	〃	頸	半隆起文　隆起入組文	I－4
333	SM 219	F	〃	口縁	隆起線・撚糸爪形文　縄文（LR縦位）	III－4
334	〃	1	〃	体	半隆起文　縄文地文（LR横位施文）	I－1
335	〃	F	〃	〃	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	I－5
336	〃	〃	〃	〃	斜行縄文　（結節を伴うLR縦位）	V－2
337	〃	1	〃	〃	半隆起文　撚糸爪形文	III－1
338	〃	〃	〃	口縁	刺突文（交互刺突・棒状工具）	IV－1
339	〃	〃	〃	体	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	I－5
340	SM 226	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位・連弧）	III－2
341	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（磨滅で不明）	I－1
342	SM 228	F	〃	〃	半隆起文　縄文地文（金雲母含む）	II－7
343	SM 229	1	〃	〃	隆起線　沈線文	IV－1
344	SK 230	〃	〃	〃	半隆起文　沈線文　縄文地文	II－7
345	SK 231	F	〃	口縁	半隆起文　爪形文（竹管）	I－2
346	〃	〃	〃	体	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	I－5
347	〃	〃	〃	口縁	半隆起文（2条1組の蓮華文状）	I－7
348	〃	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（横位・縦位並列）	III－2
349	〃	〃	〃	〃	隆起線・沈線　縄文地文（RL縦位）	II－7
350	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（RL横位）	I－1
351	〃	〃	〃	口縁	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	I－5
352	SP 234	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（連弧状施文）	III－2
353	〃	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（隆起線状圧痕・連弧文）	III－4
354	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（LR横位施文）	I－1
355	〃	〃	〃	〃	隆起線・沈線文（X・Y字状）縄文	II－7
356	SP 235	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位・縦位並列）把手付	III－2
357	SP 236	〃	〃	体	半隆起文　爪形文（竹管）	I－2
358	SM 241	〃	〃	〃	沈線（ヘラ状工具）縄文地文（LR縦）	II－9
359	〃	〃	〃	〃	隆起線・沈線　縄文地文（LR縦位）	IV－1
360	SM 242	〃	〃	口縁	沈線文　撚糸圧痕文（ループ状圧痕）	IV－2
361	〃	〃	〃	〃	半隆起文　地文無文（金雲母含む）	II－7
362	〃	〃	〃	体	隆起線・沈線　撚糸圧痕文（爪形状）	II－9
363	〃	〃	〃	頸	隆起線（撚糸圧痕付）沈線文	II－7
364	〃	〃	〃	体	半隆起文	I－4
365	〃	〃	〃	頸	隆起線・沈線文　爪形文　貼付文	IV－1
366	SM 243	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（RL横位）	I－1
367	SK 244	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文	I－2
368	〃	〃	〃	口縁	結節斜行縄文（lr縦位）折返し口縁	V－1
369	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（LR横位）	I－1
370	〃	〃	〃	〃	半隆起文（その他観察不能）	〃
371	SK 251	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位平行三段）	III－2
372	〃	〃	〃	〃	沈線文　縄文地文（RL斜位）	II－7
373	〃	〃	〃	体	半隆起文　縄文地文（RL横位）	I－1
374	SK 253	〃	〃	口縁	沈線　縄文地文（金雲母含む）	II－7
375	〃	〃	〃	〃	沈線　交互刺突　縄文地文 lr＋rl羽状	II－5
376	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文（波状口縁）	I－2
377	〃	〃	〃	体	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	I－5
378	〃	〃	〃	〃	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	〃
379	SP 254	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　縄文地文（LR横位）	I－1
380	〃	〃	〃	〃	半隆起文　格子目文（ヘラ状工具）	I－5

No.	出土遺構	層土	器形	部位	文様	分類
381	SM 254	F	深鉢	体	半隆起文・縄文地文（LR横位）	I－1
382	SM 257	〃	〃	〃	斜行縄文（LR横位）	V－4
383	〃	〃	〃	〃	半隆起文・格子目文（ヘラ状工具）	I－5
384	SM 258	〃	〃	頸	沈線（ヘラ状工具）交互刺突文　縄文	IV－1
385	SM 259	〃	〃	体	沈線（　〃　）隆起線　rl地文	〃
386	SM 260	〃	〃	〃	結束羽状縄文（無節）	V－3
387	SM 261	〃	〃	〃	半隆起文（入組文）	I－1
388	〃	〃	〃	〃	隆起文・沈線	I－11
389	SK 262	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（隆起線に沿う弧文）	III－2
390	SK 263	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（横位並列・連弧文）	〃
391	〃	〃	〃	体	隆起線・沈線　縄文地文	II－7
392	SK 264	〃	〃	頸	隆起線・半隆起文・沈線	〃
393	〃	〃	〃	口縁	〃　〃　〃	〃
394	SK 303	1	〃	〃	沈線（ヘラ状工具）縄文地文	II－9
395	〃	〃	〃	〃	半隆起文・爪形文・並列撚糸圧痕文	I－2
396	〃	〃	〃	体	無節斜行縄文（lr）	V－4
397	ST 304	〃	〃	〃	半隆起文　縄文地文（RL）	I－1
398	〃	〃	〃	〃	半隆起文・平行沈線文（竹管）	〃
399	〃	〃	〃	〃	単節斜行縄文（RL）	〃
400	ST 305	〃	〃	口縁	半隆起文　爪形文	〃
401	〃	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（横位・縦位・弧文）	III－2
402	〃	〃	〃	〃	沈線文（ヘラ状工具）縄文地文（LR）	IV－1
403	〃	〃	〃	〃	撚糸圧痕文（横位区画内縦位並列）	III－2
404	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文　隆起文・刺突	I－2
405	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文（刻目状）	〃
406	〃	〃	〃	〃	半隆起文　爪形文（口縁波状部分）	〃
407	〃	〃	〃	体	沈線（縦位区画・波状）LR地文	IV－1
408	ST 309	〃	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位・連弧）	III－2
409	B地区　X－O	／	〃	〃	沈線（ヘラ状工具）縄文地文	II－9
410	〃	／	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位平行）	III－2
411	〃	／	〃	体	斜行縄文（LR横位施文）	V－4
412	〃	／	〃	〃	半隆起文　縄文地文（LR横位施文）	I－1
413	〃	／	〃	口縁	沈線　縄文地文	II－9
414	〃	／	〃	体	沈線　縄文地文（LR縦位施文）	IV－1
415	〃	／	〃	口縁	撚糸圧痕文（横位）	III－2
416	〃	／	〃	〃	撚糸圧痕文（隆線区画に沿う横位）	〃
417	ST 90	F	〃	〃	隆起線（渦巻）結節沈線（鵜頭口縁）	II－4
418	SM 218	3	〃	〃	隆起線・沈線　縄文地文（　〃　）	II－7
419	SM 213	1	〃	頸	隆起線・撚糸圧痕文　半隆起文　爪形文	I－2
420	11－34	III	〃	口縁	半隆起文　沈線（ヘラ状工具）	I－1
421	〃	〃	〃	頸	半隆起文（全面）	I－10
422	〃	〃	〃	口縁	半隆起文　爪形文　（無文）	I－2

No.	出土地点・遺構	層	器形	口径	底径	器高	文様	分類
423	54－30	III	深鉢	—	—	—	隆起線・沈線　結節文　縄文	II－7
424	SK 83	F	〃	—	8.2	—	半隆起文　爪形文　竹管沈線	I－5
425	ST 90	〃	〃	—	13.2	—	沈線文　縄文地文（lr縦位）	II－9
426	ST 94	〃	〃	22.8	—	—	撚糸圧痕文　羽状縄文（無節）	III－2
427	B地区	III	〃	28.8	—	—	撚糸圧痕・隆起線　羽状縄文	〃
428	SK 83	1	〃	20.7	—	—	撚糸圧痕文　縄文（lr横位）	〃
429	ST 89	F	浅鉢	44.6	(19.0)	(15.4)	撚糸圧痕文　縄文（LR横位）	〃

※　観察一覧表の記入について

表No.は，挿図No.と同一で，出土地点・遺構ではグリッド名，遺構No.を記入した。層・覆土では，包含層の場合Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを，遺構では覆土内Fないし覆土が細分可能な場合1・2等の数字を，床面上ではYを用いて区別表記している。文様項目では，土器分類基準表で用いた文様要素の抽出に主眼を置いた。各文様要素の表記は，基準表と基本的に同一であるが，字数制約上，文等を省略化しているものがある。記号等の用法は，「・」が併用ないしセットの意で，（　）は内容説明である。計測値はcm単位で（）推計値，「－」は不明である。

（2） 石　　器

今回の調査で出土した石器は，整理箱で59箱である。その種類は，石鏃・石錐・石槍・石匙・箆状石器・掻器・削器・磨製石斧・凹石・磨石・石棒・石皿がある。石材は，打製石器では大半が頁岩で，他に石英等が用いられている。磨製石器では，砂岩・安山岩・花崗岩等が用いられ，他に量的には少ないが流紋岩が磨製石斧にみとめられる。

なお本節において，出土数の少ない石器については細別せず，個々の説明にとどめた。

石　鏃（第17図　図版14）

出土量は全体的に少なく，調査区の南区からと表面採集のものが数点数えられるのみである。中茎のない無茎のもので，二等辺三角形を呈する。側縁部はほぼ直線的にのび，身の中央部から鋭い先端部を作出している。基部は破損しているが，基部の抉りはやや深く，脚部はその断面から比較的細身であることが推定される（１）。また，身の中央部から脚部にかけては平坦に調整されているが，ピッチ等による着柄痕跡はみとめられない。

表面採集のものは，先端部が破損しているが，二等辺三角形を呈し（１）よりも若干大形である。無茎で，基部の抉りはU字形に深く施されて，側縁部は直線的にのび，脚部はわずかに内湾し細く鋭い形状を示す。

石　錐（図版14）

不定形な縦長剥片の先端に両側縁から調整を加え，鋭部を作出している。基部にはあまり加工が行なわれず，大きな剥離痕を残すのみである。また基部と錐部との境界も不明瞭である。

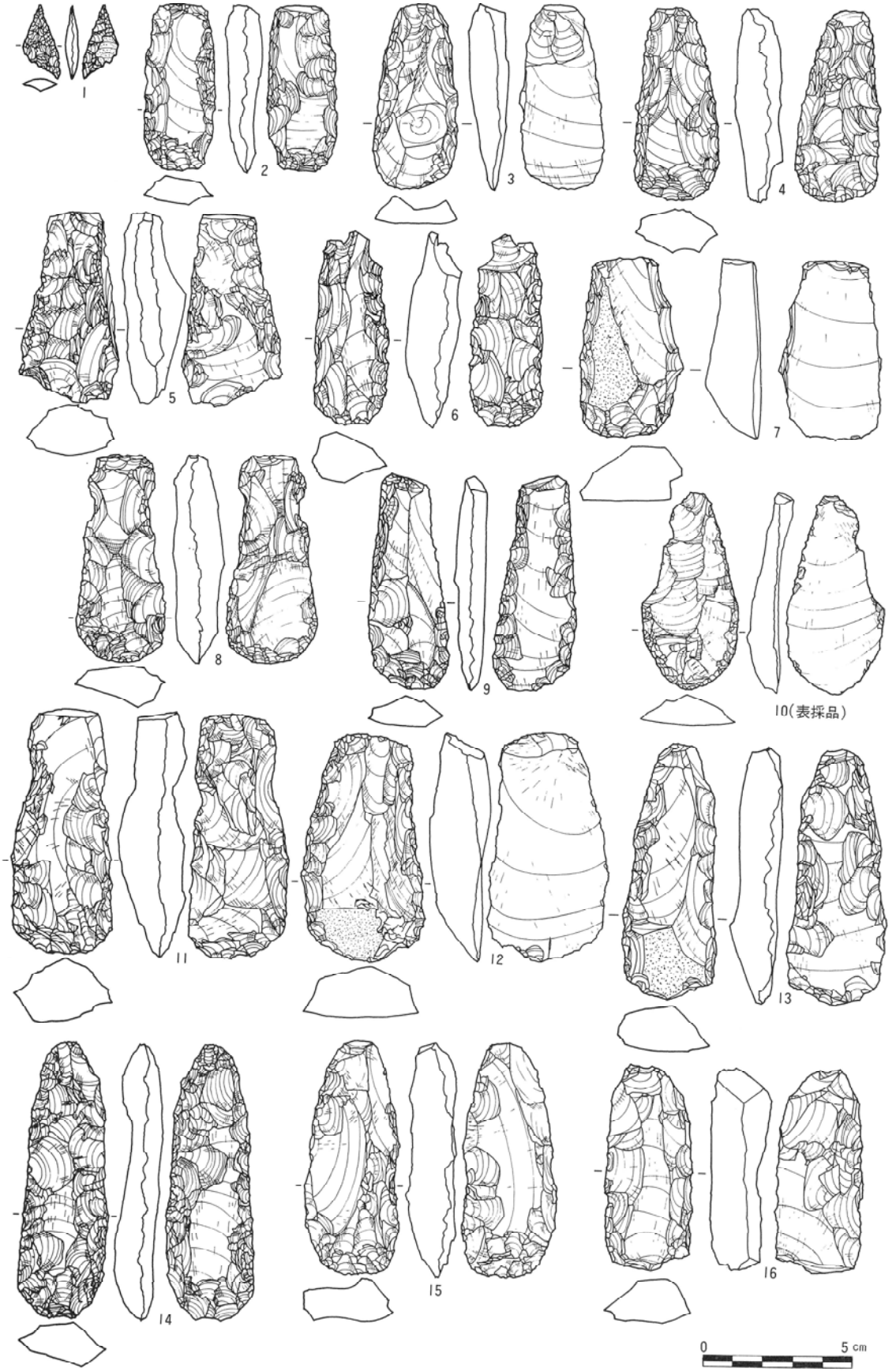
石　槍（図版14）

基部から周囲に両面加工を施した，木葉形を呈する小形の石槍である。身の背面は高く稜をなし，やや粗い剥離が加えられ，主要剥離面は周囲に細かい連続した剥離が丁寧に施されて，側縁から先端部にかけて鋭角な刃部を作り出している。また基部もバルブが取り除かれて，薄く平坦に調整されている。

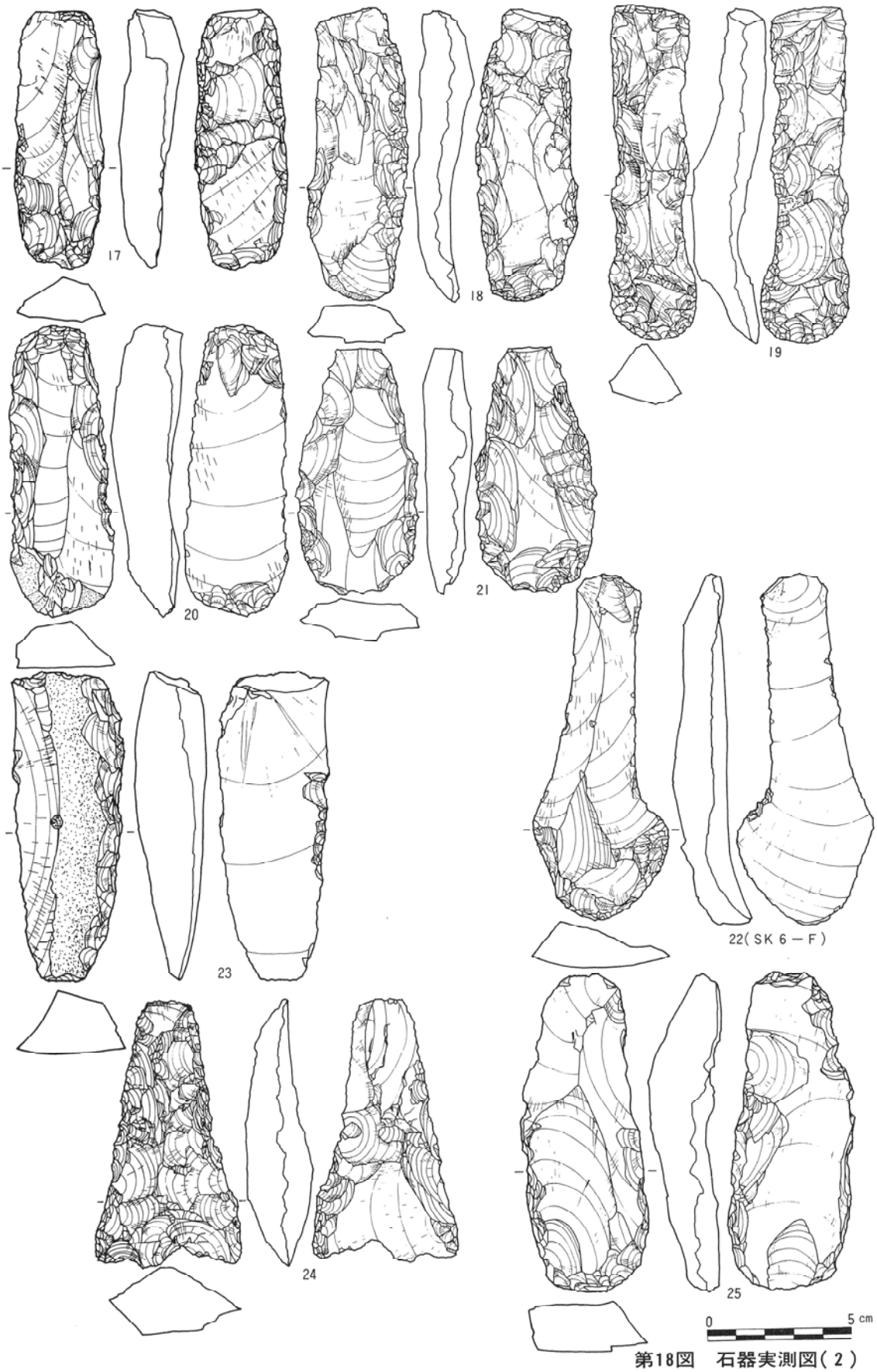
本石器は，当初比較的鋭利な基部を示すことから，箆状石器ないし掻器の範疇に入ると思われたが，先端部の作りが入念に調整され鋭く作出されていることや石鏃よりも身が厚く大形であることなどの点から分類した。

石　匙（図版14）

楕円形を呈し，身の厚い縦長剥片を用いた縦形石匙である。両側縁に浅い抉りを入れ，幅約３cmの大ぶりなつまみを作っている。刃部は右側縁に位置し，片面加工により仕上げられ，丸味を呈する。それ以外の左側縁及び基部については，若干の調整を加えるのみで，全体に粗い作りである。



第17図　石器実測図(1)



第18図　石器実測図(2)

箆状石器（第17図２～６・８・９・11～16　第18図17～21・24・25　図版14）

縦長で先端に刃部を有し，箆状の形をした石器である。通称石箆とも呼ばれる。その外形及び刃部の特徴により，次の５つに分けられる。

ａ類（２～７・９・13～18・20・25）

両縁側がほぼ平行にのび，刃部と基部との幅の差があまり違わない短冊形を呈する石器である。刃部は片面加工によるもの（３・７・25）と両面加工によるもの（２・４・６・８・９・11・13・14・15・17・20・25）とに分けられ，やや直線的なものが多い。刃角は比較的鋭角に仕上げられている。

素材となる剥片は，大部分が縦長のものであるが，中に横長のもの（15）もみとめられる。

ｂ類（８・11）

外形は，ａ類に類似するが，基部よりに左右から浅く抉りを施す特徴を示す石器である。そのため，石匙のつまみのような基部が作られるが，同石器のそれよりも粗い作りである。刃部は，直線的で両面から丁寧な剥離が行なわれ，鋭角である。

ｃ類（12・21）

側縁部が丸味を呈し，身のやや幅広い石器である。刃部は直線的で，粗い剥離による片面加工である。

ｄ類（19）

棒状を呈する身に，丸く舌状に張り出す刃部をもつ石器である。刃部は大きく内側に内湾する。また両面から丁寧な剥離が施されて，丸刃の鋭い刃部を作出している。さらに身の幅よりも刃部幅が広く，身の部分との境界が明瞭である。側縁部から基部にかけては，大きな剥離を加えた後，右側縁部は背面方向から，左側縁部は主要剥離面方向から調整を行ない，ほぼ平行にのびる側縁部を作っている。

本石器は，断面が鳥嘴のように大きく内湾し，鋭い刃部を有する特徴から，掻器に比して刃角がやや鋭角であるが，それに類似した機能であることが推定される。

ｅ類（24）

基部が細身で刃部幅が広く，側縁が直線的に開く石器である。そのため，撥状の外形を示す。基部は，両面とも大きく剥離面を残したままでほとんど無調整であり，素材の剥片の縁辺部をそのまま用いている。主要剥離面の観察から横長剥片を素材としており，母岩からの打撃面の一方を基部に，片方を刃部に用いたものと思われる。側縁部は主に背面側に調整が行なわれ，身の断面形態は凸レンズ状を呈する。主要剥離面は，比較的幅広の剥離で調整されている。刃部は，一部大きく剥離しているが，鋭い直刃に仕上げられている。

掻　器（第17図10　第18図22　図版14）

縦長剥片の先端に調整を加え，主要剥離面に対して急角度の刃部をもつ石器である。外形は縦長ないし楕円形を呈し，調整はほとんど片面加工である。

（10）は，比較的小形で不整楕円形を呈する。右側縁から刃部にかけて細かな剥離を加え，丸味のある刃部を作っている。左側縁は，大きな剥離痕を残したままである。基部は，刃部に比較して薄く，小さな打撃面とバルブを残したままである。

（22）は，やや大形で縦長のものである。剥片の先端部を除いてほとんど無調整であり，素材から剥離した状態のままである。刃部は，入念に調整が施され半円形の刃部を作り出している。また，基部に対して身の下半から鳥嘴状に内湾する断面を示す。基部の方は，棒状に細長く中央に稜が入り，その断面形態は三角形を示す。基部は打撃面とバルブを小さく残している。

削　器（第18図23　図版14）

縦長剥片の側縁部に調整を加え刃部とする石器で，片面加工によるものである。刃部は，直線的に作られるため，素材は石刃状の縦長剥片を用いている。

（23）は，柔らかい頁岩を用い，背面に母岩の自然面を縦に残した石器である。右側縁から先端部にかけて調整が見られるが，左側縁は無調整で剥離面のままである。刃部は，約 1.5cmの幅で帯状に剥離が連続し，直線的である。基部は無調整で，広い打撃面とバルブがみとめられる。

磨製石斧（第19図26～34　図版15）

いずれも基部・両側縁及び刃部にかけて丁寧に研磨された，定角式の磨製石斧である。

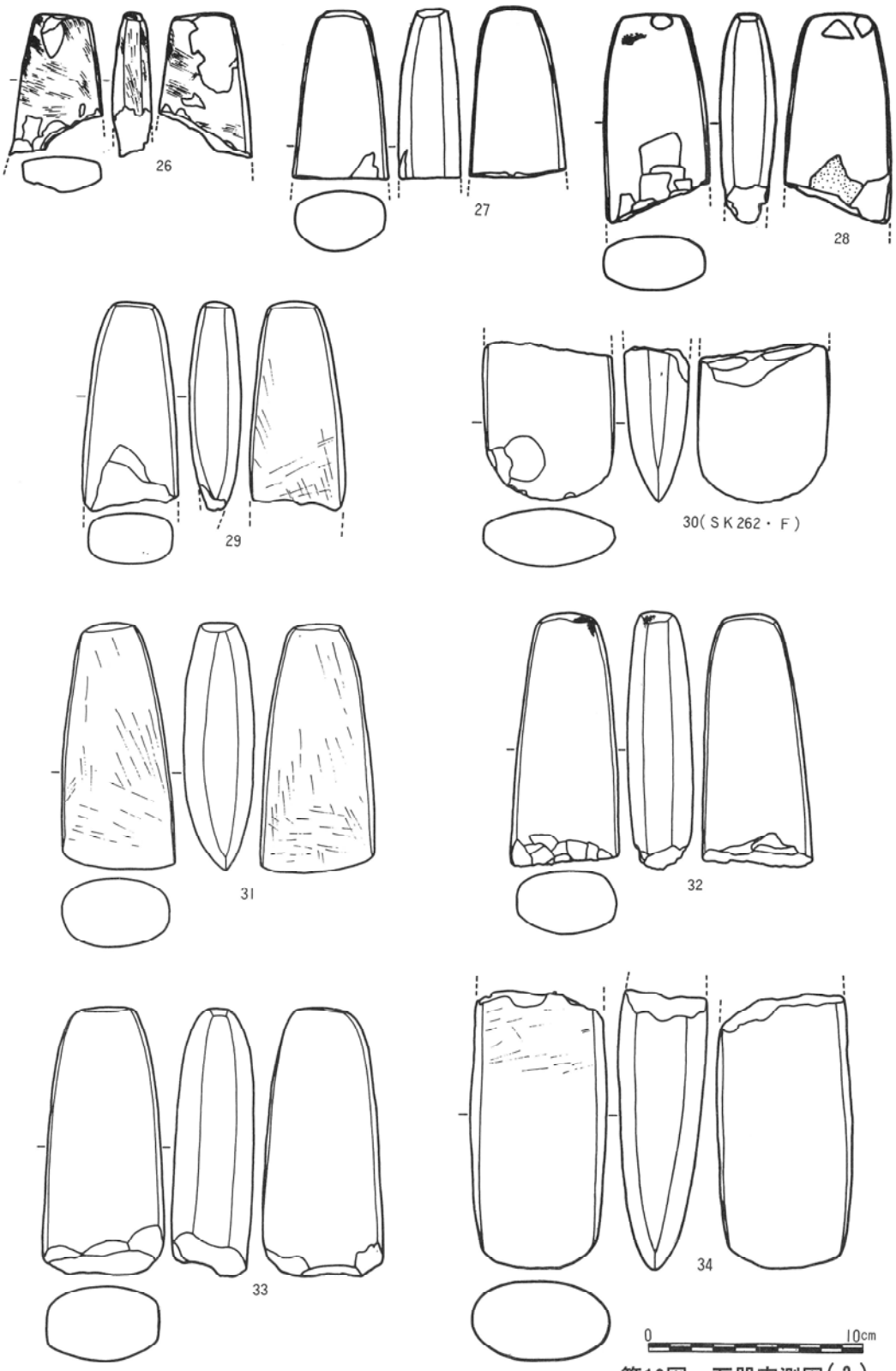
外形は，基部の大きさ並びに側縁部の開き角度等の違いで若干の相違があるが，概ね短冊形を呈する。

石材は，流紋岩を用いているもの（24）も若干見られるが，大半は砂岩・安山岩等が用いられている。

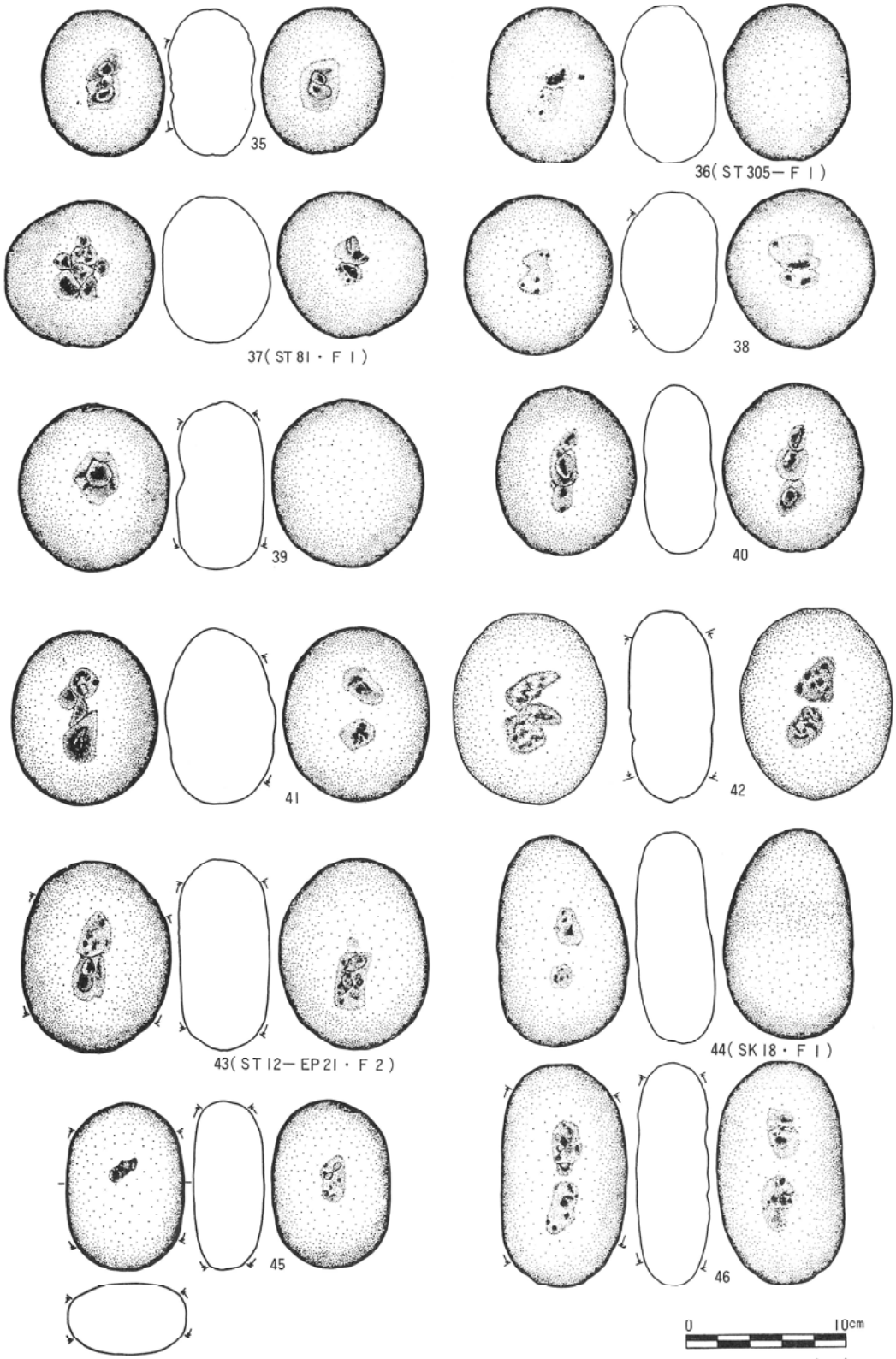
完形品が少なく，身の中央部から折れて基部ないしは刃部のみの破片がほとんどである。また，それらの中には刃部の破損面に，二次的な打痕を残すもの（32・33）があり，刃部が折れた後敲打用に再使用したものと思われる。

断面形態は，偏平で身のやや薄いもの（26・28～30）と楕円形で身の厚いもの（27・31～34）に分けられる。特に,（26）は，各面とも強く研磨されて断面が四角形を呈し，稜線が明瞭であることなどから，鋭利な刃部をもつことが想定され,「のみ」あるいは「手斧」のような機能が推察される。

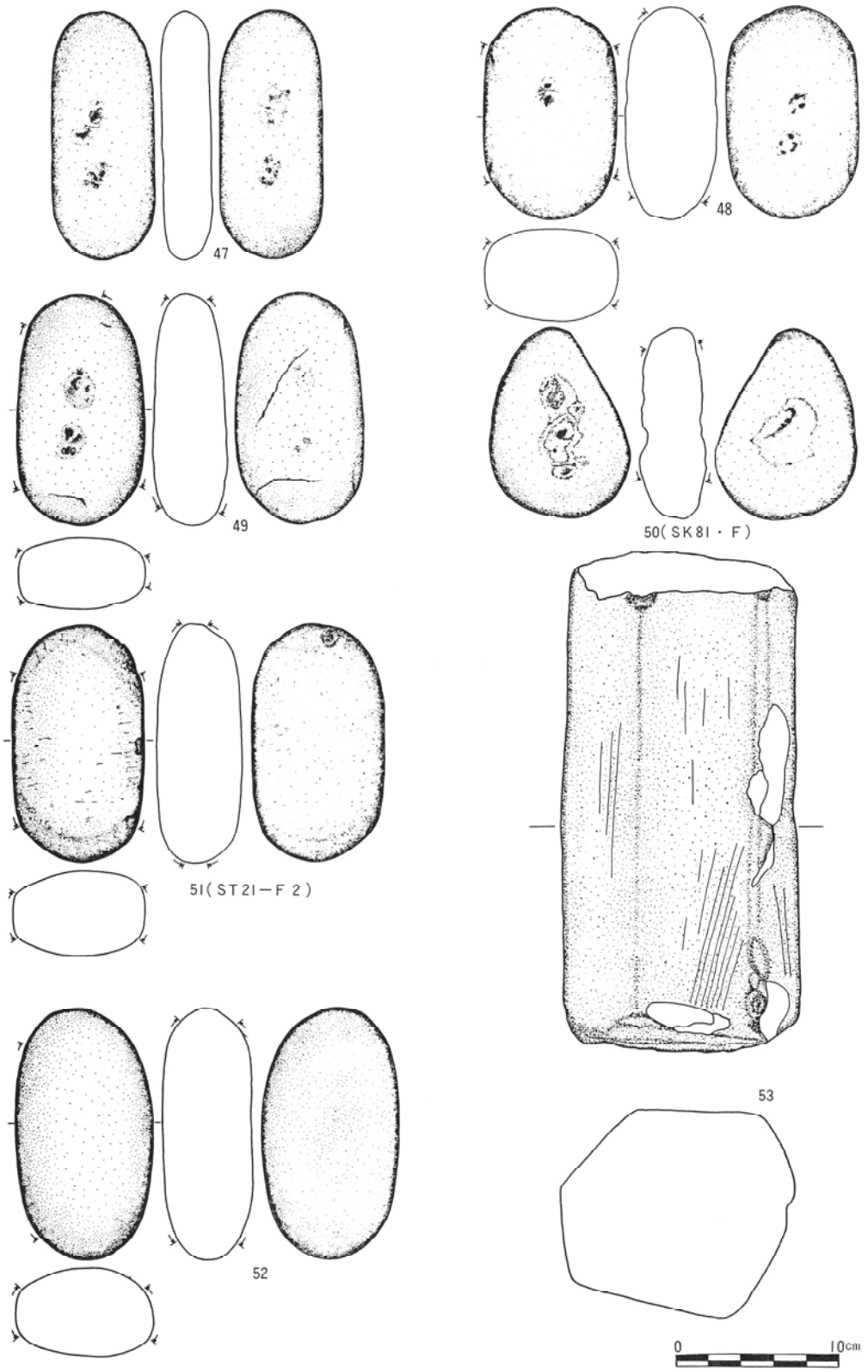
刃部は，丸刃（30）と直刃（31・34）のものがあり，いずれも両刃のものである。



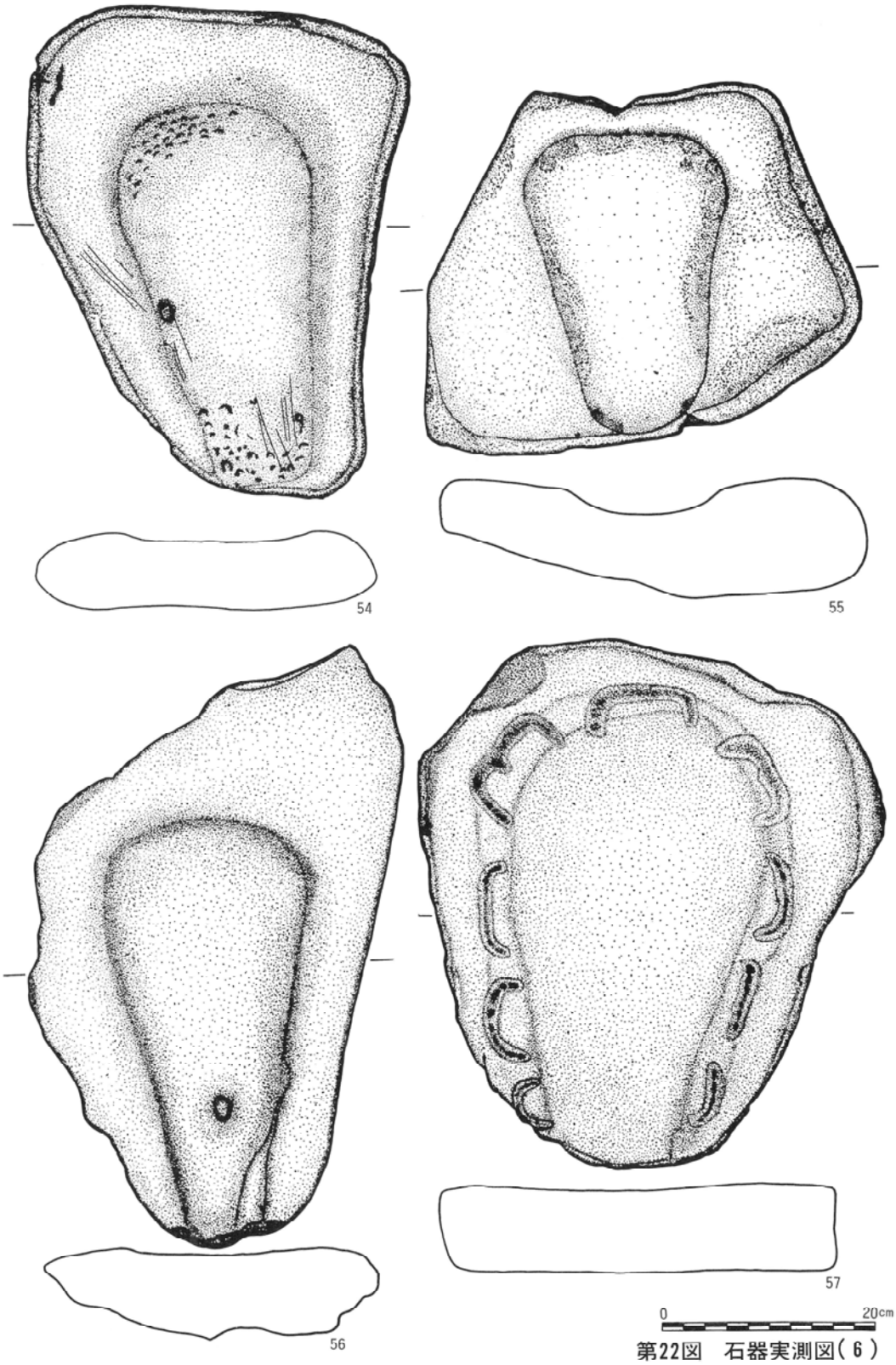
第19図　石器実測図(3)


35
36(ST305－F1)
37(ST81・F1)
38
39
40
41
42
43(ST12－EP21・F2)
44(SK18・F1)
45
46
0
10cm

第20図　石器実測図(4)



第21図　石器実測図(5)



第22図　石器実測図（６）

凹　石（第20図35～46　第21図47～50　図版15）

出土石器の中では，出土量が多く遺構内からも多数出土している。偏平な河原石を素材に用い，片面ないし両面に数個の凹みをもつ石器である。また，表面及び側縁部が磨滅している場合があり，磨石に転用しているものも多くみとめられる。

外形により，次の２つに分けられる。

ａ類（35～43）

円形を呈するもので，表面中央部に数個の凹みをもつ石器である。凹み部分は，１ヶ所にまとまっているもの（35～39），列状に連続するもの及び二ヶ所に分散するもの（40～43）などがある。

磨石として転用しているものは，その使用により表面が平滑になり断面形態が角張っている場合が多い（39・43）。

ｂ類（44～50）

細長い楕円形ないし不整楕円形を呈する石器である。前類に比してその形状から二つに分散するものや，列状につながる凹みを有するもの（44・46～50）が多い。また，大きさも比較的大形（46・49）である。

磨石への転用は，前類と同様であるが，表面の他に側縁部を用いている場合（45・48・49）もみとめられる。

石　棒（第21図53　図版16）

棒状ないし柱状を呈し，先端部のくびれは不明瞭である。素材には，自然石を用いている。破損品も含め，７点出土している。

（53）は，基部のみであるが自然石の表面を磨いて，柱状の六面体に整えている。各面には，研磨の際の擦痕が残っている。基部底面は，小さな敲打により平面的に仕上げられている。出土した中では，最も大形の石棒である。

石　皿（第22図54～57　図版16）

大形の偏平な自然石の表面に，皿状の磨面をもつ石器で本遺跡において多数出土している。磨面には小さな敲打が施されて舌状ないし馬蹄形に調整され，基部を除いた周囲を縁どる特徴を示す。

（54）は磨面の敲打痕及びその内外に擦痕が顕著であり，（55）は磨面が擦り減って深く湾曲し，長期間の使用が推定される。また（56）は，細長い舌状の磨面を呈し，比較的平坦である。一方，（57）は板状の自然石を用い，幅広く平滑な磨面を作っている。さらにその周囲には，磨面に向って敲打による鋭状の装飾が９単位めぐらされており，特徴ある石皿である。

Ⅳ　まとめ

今回発掘調査した谷地遺跡は，小国盆地の南西部に位置し，荒川の左岸の沖積河岸段丘上に立地し，縄文時代の中期前葉から中葉の集落跡である。本遺跡で検出された遺構は，竪穴住居跡29（検出12・確認17）・土壙41（検出14・確認27）・集石31・不明ピット 128であり，出土した遺物は主に土器・石器で整理箱に約74箱を数える。

今回は，小国町増岡地内に昭和54年度に一連の県営ほ場整備事業（井の下地区）に係る緊急発掘調査を実施したものであり，これら記録をまとめたものが本報告書である。

（1）遺構について

本遺跡で検出された遺構は，遺跡中央部の南北に走る旧地表鞍部をはさんで，大きく分けて東側と西側の平坦地に偏在して分布している。時期的には，縄文時代中期前葉から中葉にかけて，大きく２時に区分される。

第Ⅰ期（中期前葉・大木７ｂ式期）

Ｃ地区の中央から西側寄りにある10号住居跡・15号土壙・17号土壙のみである。10号住居跡は，平面形が楕円形を呈し，大きさ4.50ｍ前後を計り，主柱穴の位置が東側と西側の壁寄りにり，台形状を示す位置関係になり，小国町墓窪遺跡の70号住居跡と構造が類似している。土壙の性格は不明である。また，遺物の分布をみる大きく３地域に分けられ，Ａ地区の北側，Ｃ地区西側，Ｄ地区西側などと第Ⅰ・Ⅱ群土器が出土し，Ａ地区の住居跡・土壙およびＤ地区の不明ピット群は，この時期に一致する遺構などもあると考えられる。

第Ⅱ期（中期中葉・大木８ａ式期）

本遺跡の主体となる時期で，Ａ地区からＤ地区にかけて密集して偏在しており，遺物の分布する範囲と一致している。住居跡はとくにＢ地区に集中し，それぞれ重複している。平面形は，不整円形あるいは楕円形を呈しており，径4.20～6.24ｍの大きさになっている。４・12号住居跡は住居跡の中でもやや大形となり径6.00ｍ前後であり，柱穴の配列が共通しており，いずれも２～３回の拡張あるいは建替が認められる。その他住居跡はいずれも径4.00ｍ前後を計り，３～６本の主柱穴を中心に，壁柱穴で構成されており，近接した時間の中で重複している。炉跡が検出された住居跡は，４・94号住居跡であり，若干の掘り込みをもつ地床炉で，住居跡の中央から西・南側にずれているのが特徴である。土壙では85号土壙のロームマウンドを有するものを除くと，貯蔵用としての性格が強く，83・95号土壙では，多量の一括・完形土器が押しつぶされた状態で出土している。集石遺構は，大

きく分けて２つのグループになり，直径10～12ｍ前後となる環状を示しており，外周の集石遺構が７～10基とみられる。とくに中央の中心部に１基みとめられる場合と，複数の集石遺構が小環状を示す場合とがありる。長野県原村阿久遺跡の立石を用いた集石遺構群とは異なっており，集落跡内における場所的な差異もみられる。

（２）遺物について

出土した土器は，第Ⅰ群土器から第Ⅶ群土器まで大きく分け，さらに描出された文様や施文技法によってさらに分類した。第Ⅴ～Ⅶ群土器は，第Ⅰ～Ⅳ群土器の時期に該当する体部・底辺部の土器である。第Ⅰ・Ⅱ群土器は，半截竹管や竹管を施文具として，格子目状沈線や結節沈線あるいは刺突を施し文様を描出しており，この一群は北陸・中部系の土器群であり，大木７ａ・７ｂ式と係わっており，広義に大木７式に相当する。第Ⅲ群土器は撚糸圧痕文を主要な文様要素としており，大木７ｂ式に比定される。第Ⅲ群土器は隆線・沈線を主体として文様を構成する一群で，大木８ａ式に比定される。また，本遺跡でみられる第Ⅰ・Ⅱ群土器は，住居跡や土壙などの覆土より破片として，第Ⅱ・Ⅲ群土器と混在して出土しているため，時間差として明確に判断できにくく，今後の新らたな資料をまって検討を加えるものである。

このような他地域からの流入する土器の事象は，小国町増岡地内にある墓窪・下野・蟹沢遺跡との比較によっても明らかで，墓窪遺跡では大木１式期に関東の黒浜式が，大木７ｂ式期に北陸の新崎式他や中部系の梨久保式がそれぞれ共伴し，蟹沢遺跡では後期初頭の三十稲葉式が多量に出土している。下野遺跡では，大木９～10式期に相当する複式炉を伴う住居跡が十数棟発見され，この時期になると北陸系や中部系などの土器群の流入する現象は認められず，この地域は最上川流域の遺跡群とは異なる土器型式の様相が把握される。

出土した石器は，その大半が礫石器の一群で圧倒的に多く，中でも石皿は磨面に舌状あるいは馬蹄形状に調整されているのが特徴であり，県内でも特異な形状を示し長野県の井戸尻・尖石遺跡出土の石皿に共通している。

〈参考文献〉

藤森栄一他　「井戸尻」　中央公論美術出版社
江坂輝弥他　1962　「新潟県中魚沼郡津南町上野遺跡発掘調査報告書」　津南町教育委員会
中村孝三郎　1973　「千石石原」　長岡市立博物館
中島栄一他　1974　「吉野屋遺跡」　新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ　調査報告第５冊
室岡　博他　1974　「長峰遺跡発掘調査報告書」　新潟県中頸城郡吉川町教育委員会
小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年－戦後の研究史と現状－」『大境第５号』
神保孝造他　1977　「富山県砺波市厳照寺遺跡緊急調査概要」　富山県教育委員会
阿部明彦他　1975　「上山市牧野遺跡」　上山市教育委員会
〃　1981　「下野遺跡発掘調査報告書」　山形県教育委員会
渡辺徳太郎　1980　「小国町蟹沢遺跡発掘調査報告書」　小国町教育委員会
会田久一郎　1980　「上山市思い川Ｂ遺跡発掘調査報告書」　上山市教育委員会
家田順一郎　1980　「中道遺跡」上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ　安田町教育委員会
土肥　孝　1981　「阿玉台Ⅰａ式以前の土器－五領ヶ台式と阿玉台式の間－」　『土曜考石』
笹沢　浩他　1981　「阿久遺跡－長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書－原村その５－」長野県教育委員会
佐藤正俊他　1982　「墓窪遺跡発掘調査報告書」　山形県教育委員会
石川県立郷土資料館　1975　「北陸の縄文文化」
新潟県美術博物館　1979　「火焔型土器」

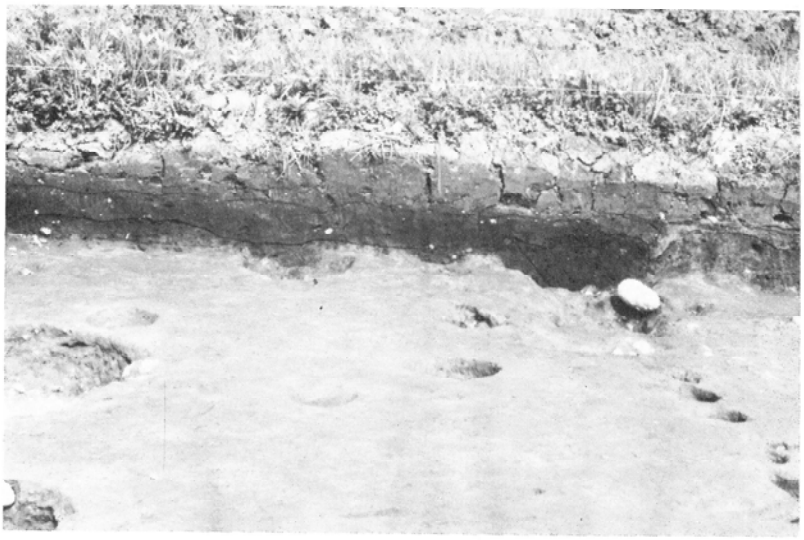
遺跡遠景(西から)

遺跡近景(南から)

遺跡近景(東から)

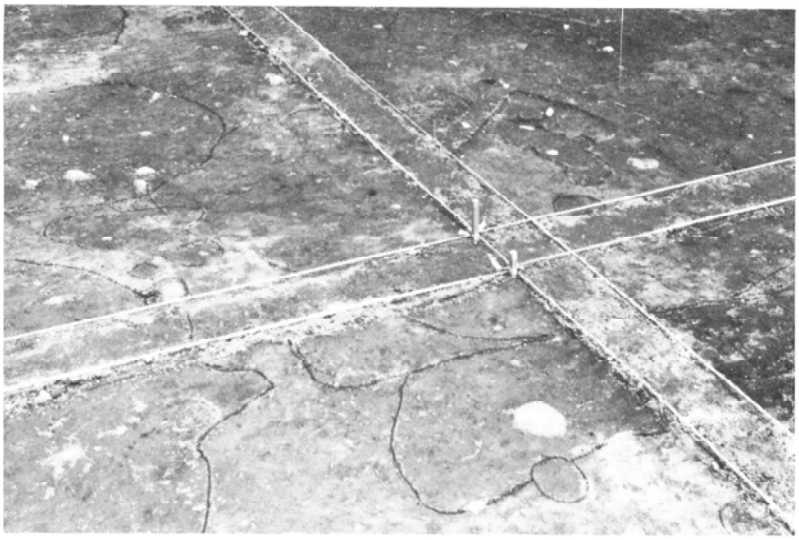
図版 2

C地区土層セクション(1)

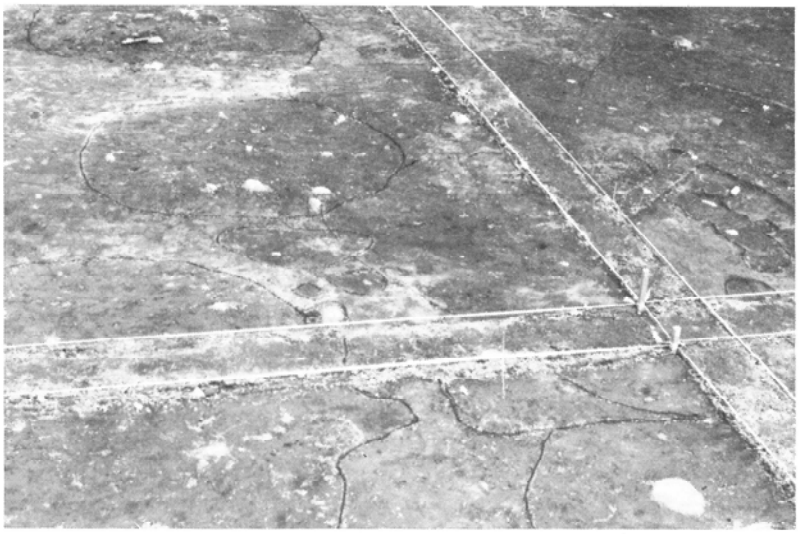


C地区土層セクション(2)

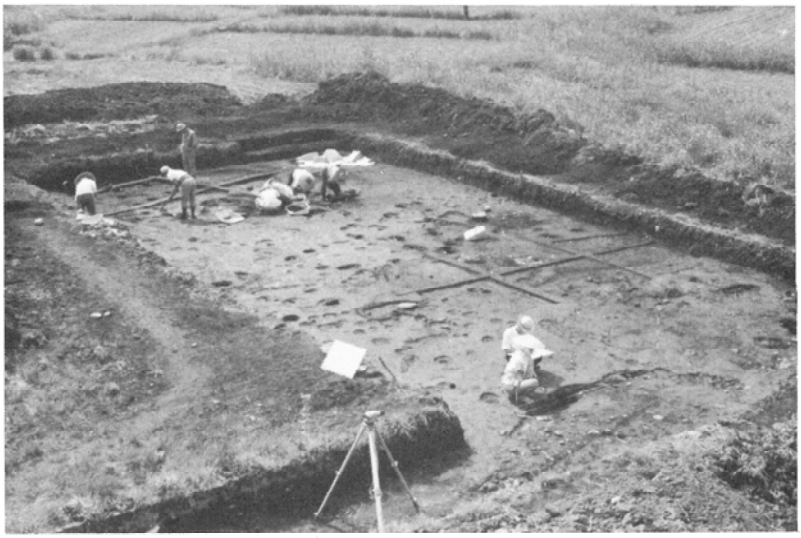
面整理作業



A 地区遺構確認状況(1)

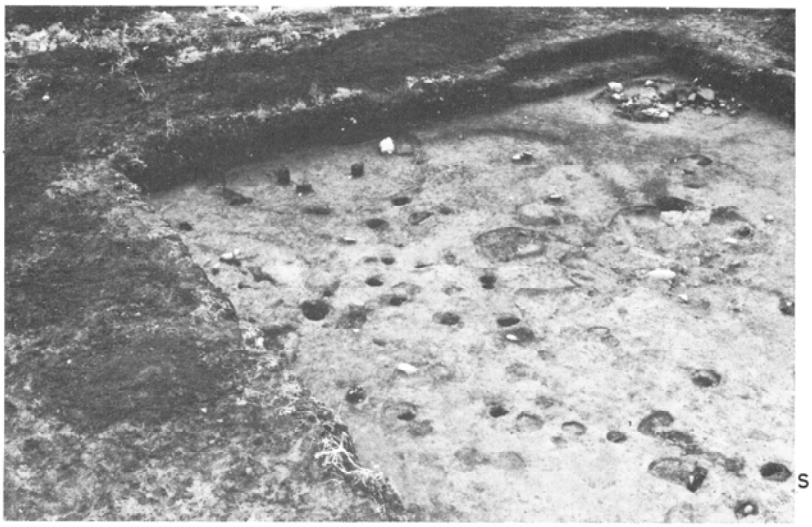


A 地区遺構確認状況(2)



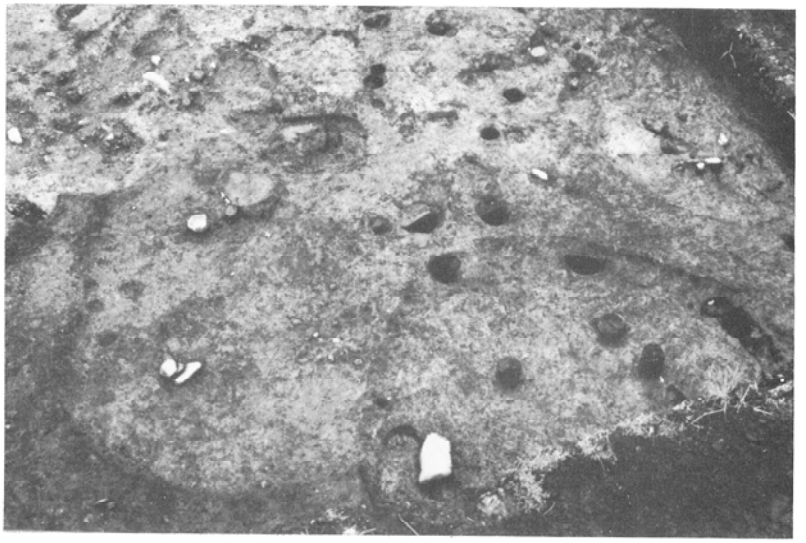
B 地区調査風景

図版 4



ST81・84・86・SK85・95・96全景

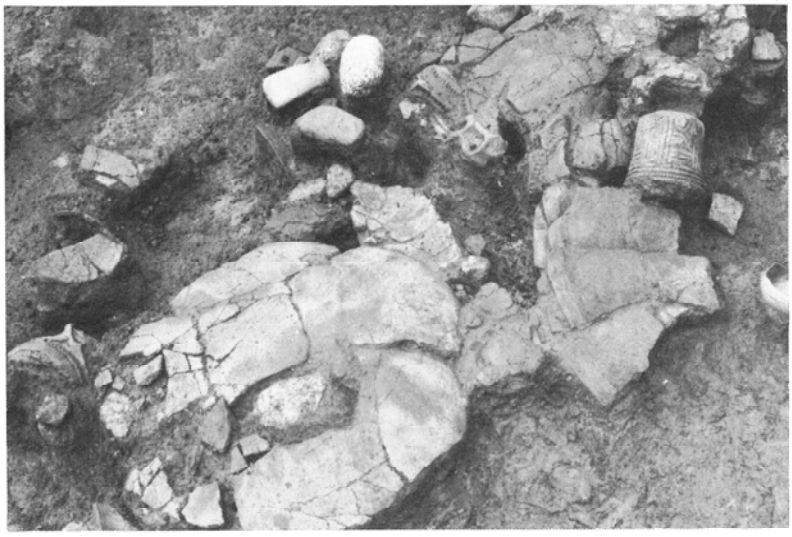
ST88・94・98全景



ST89・90・92全景

SK83全景

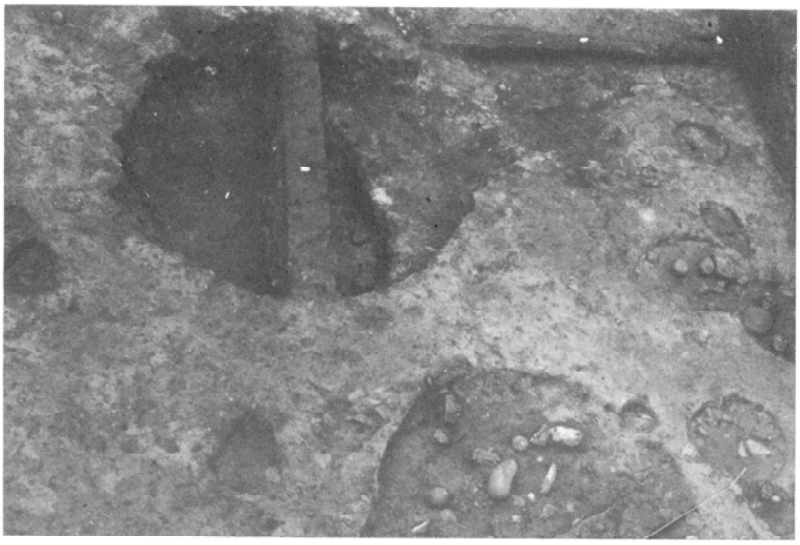
RP18・31～33出土状況(1)



RP18・31～33出土状況(2)

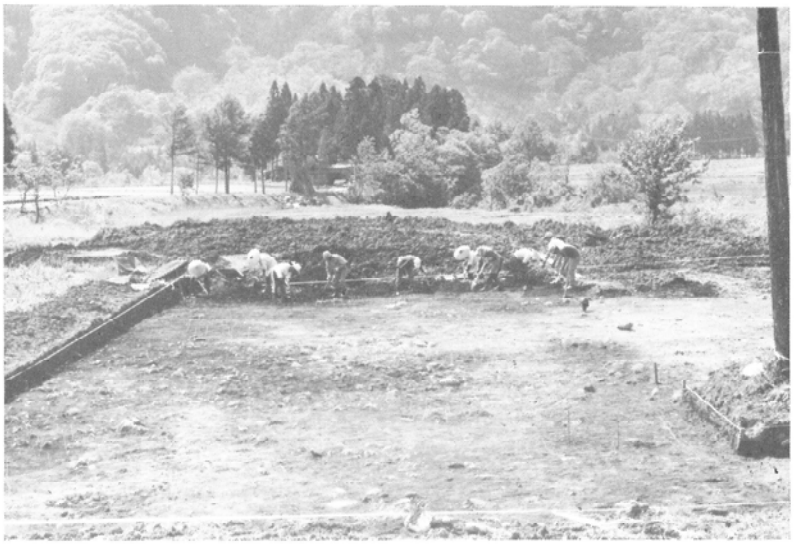
図版 6

C地区調査風景

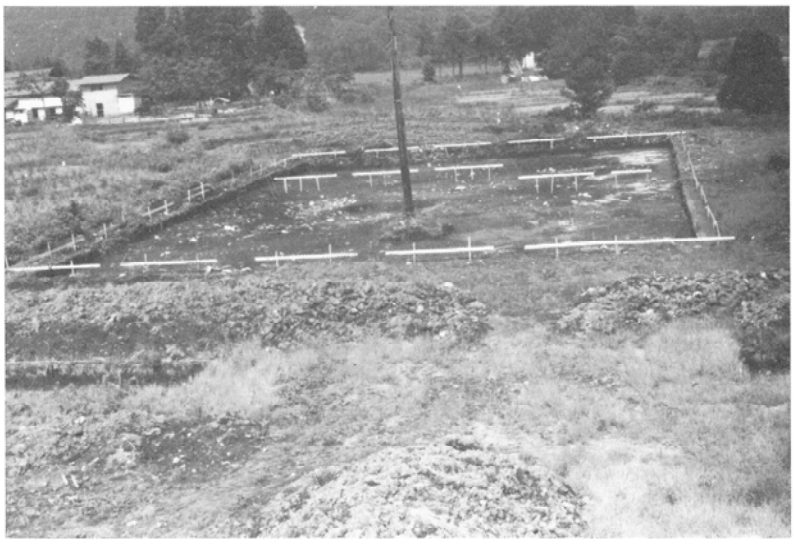


SK 1・2 全景

ST 10・12全景



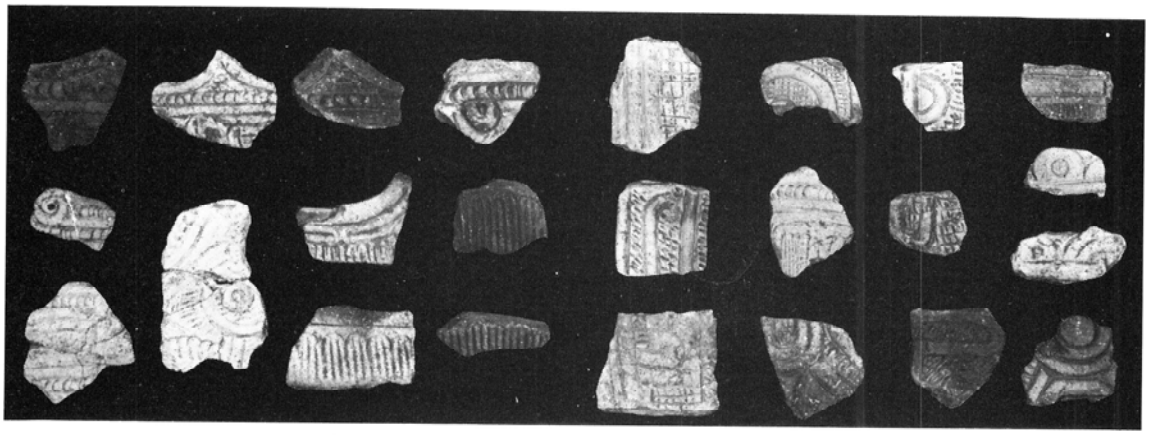
D地区調査風景



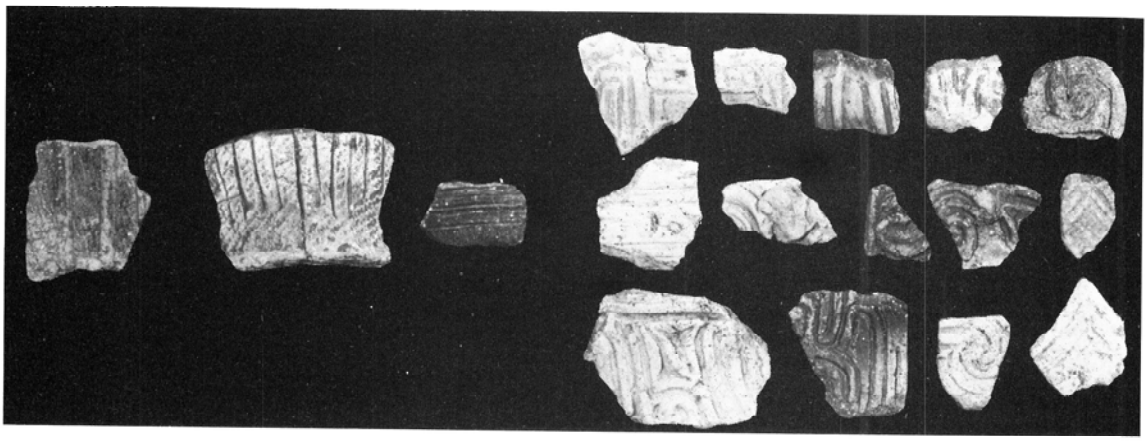
D地区全景

SM215・216全景

第Ⅰ群1・2類土器　　第Ⅰ群1・2・4・8・9類土器

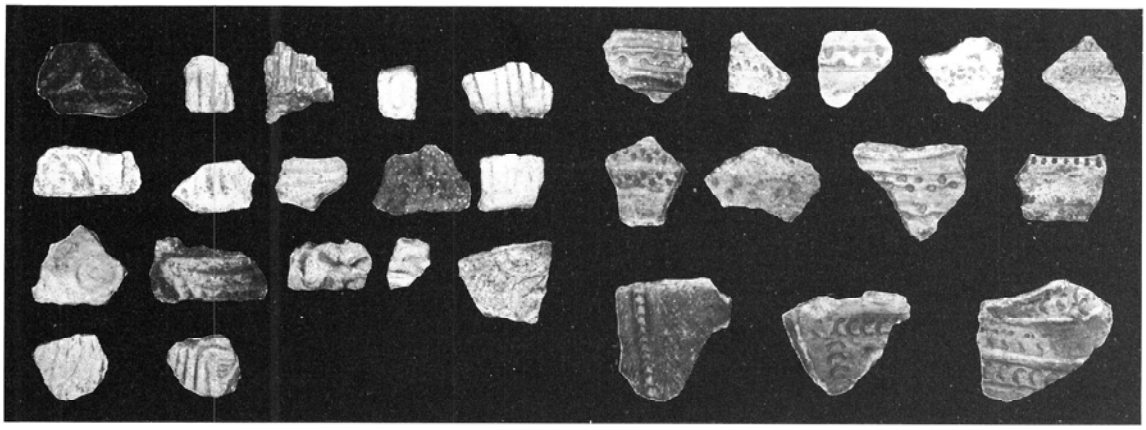


第Ⅰ群2・3・7類土器　　第Ⅰ群2・5・6類土器

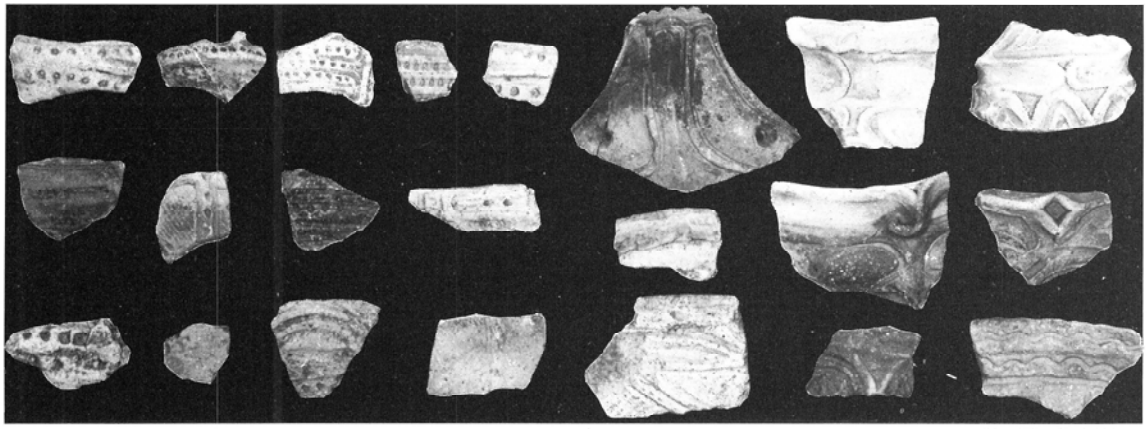


第Ⅰ群1類土器　　第Ⅰ群10・11類土器

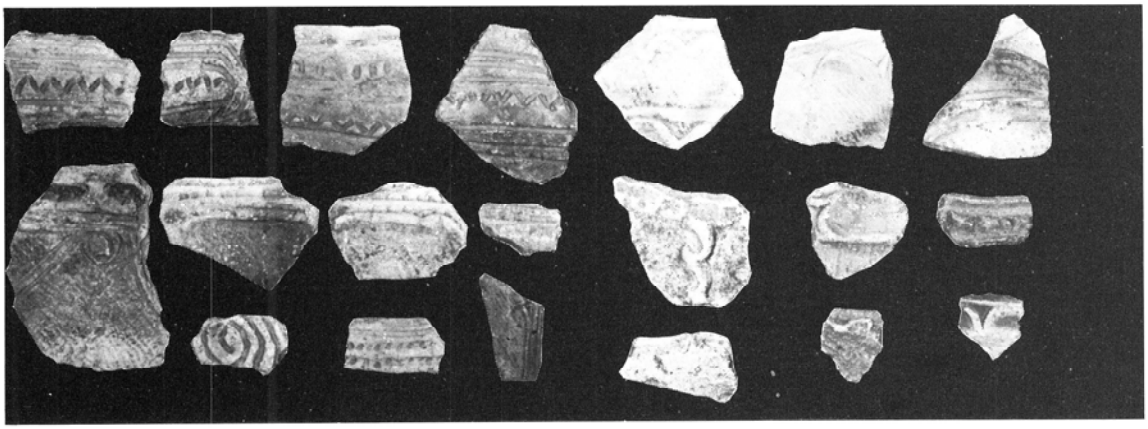
出土土器(1)



第Ⅰ群 1 ・10・11類土器　　第Ⅱ群 5 ・ 6 類・第Ⅲ群 1 類土器

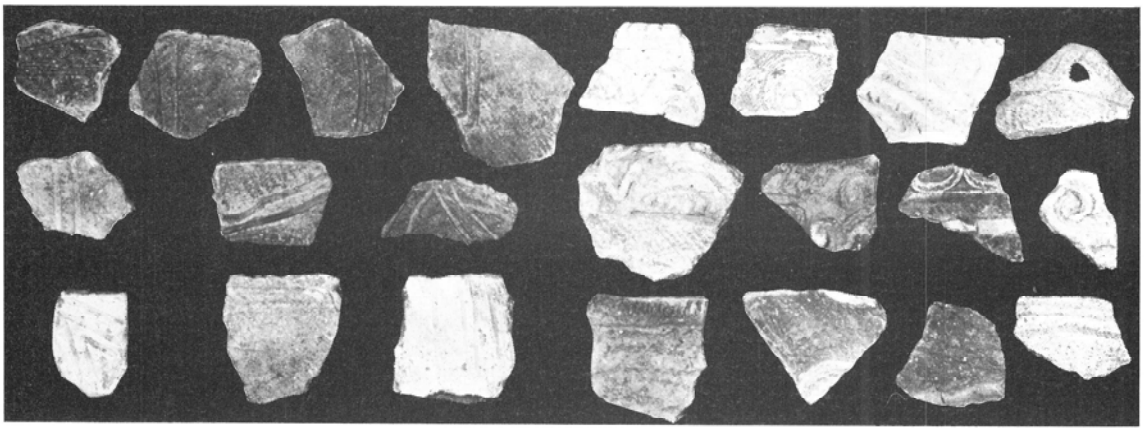


第Ⅱ群 1 ・ 2 類土器　　第Ⅱ群 7 類土器

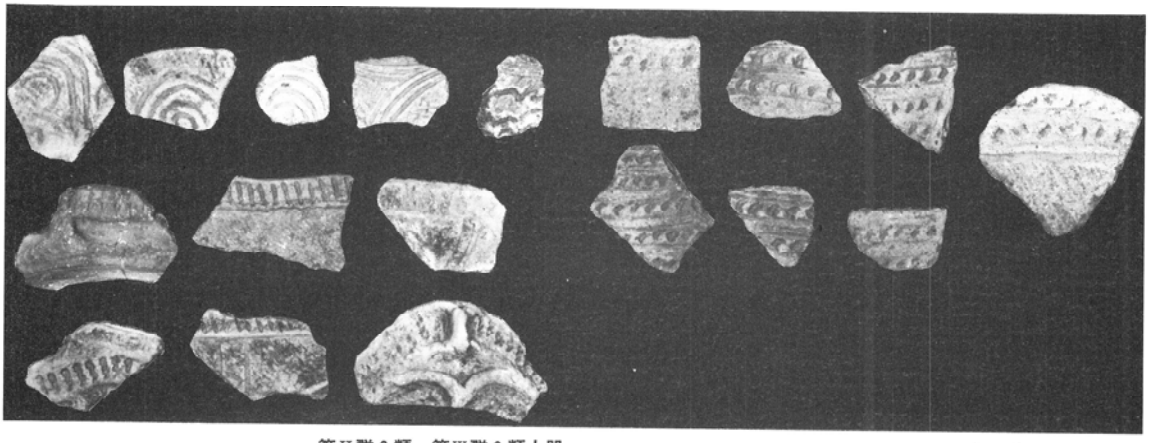


第Ⅱ群 3 ・ 4 類土器　　第Ⅱ群 6 ・ 7 ・ 8 類土器

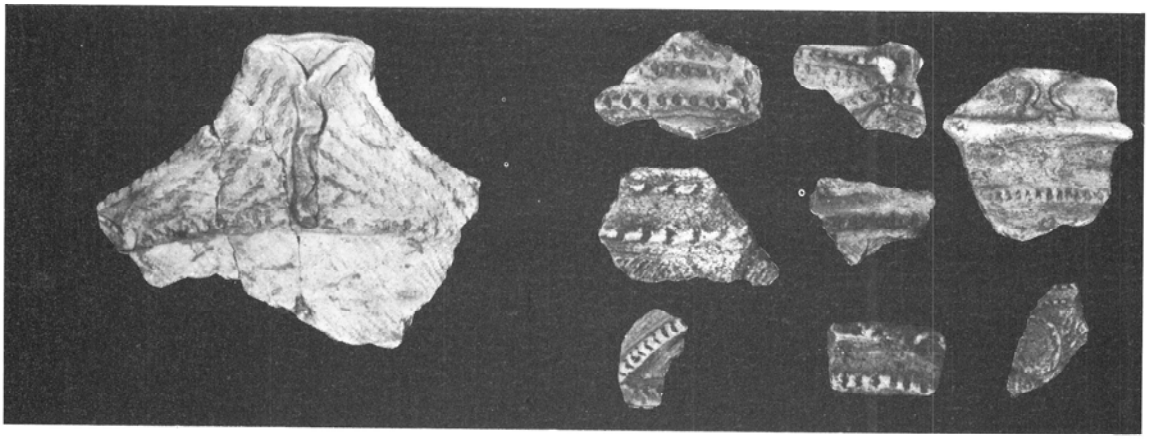
出土土器(2)



第II群 9 類・第IV群 1 類土器　　第III群 2 類土器

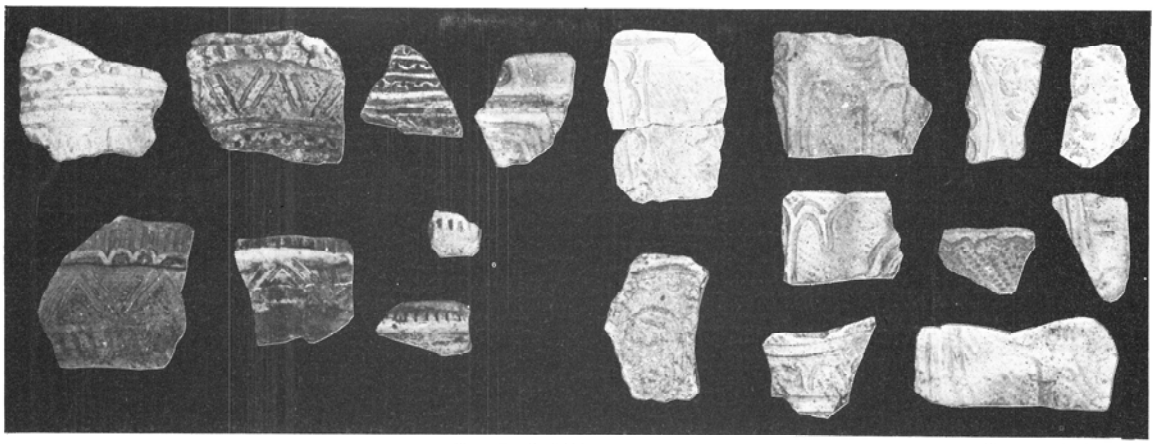


第II群 9 類・第III群 3 類土器　　第III群 1 類土器

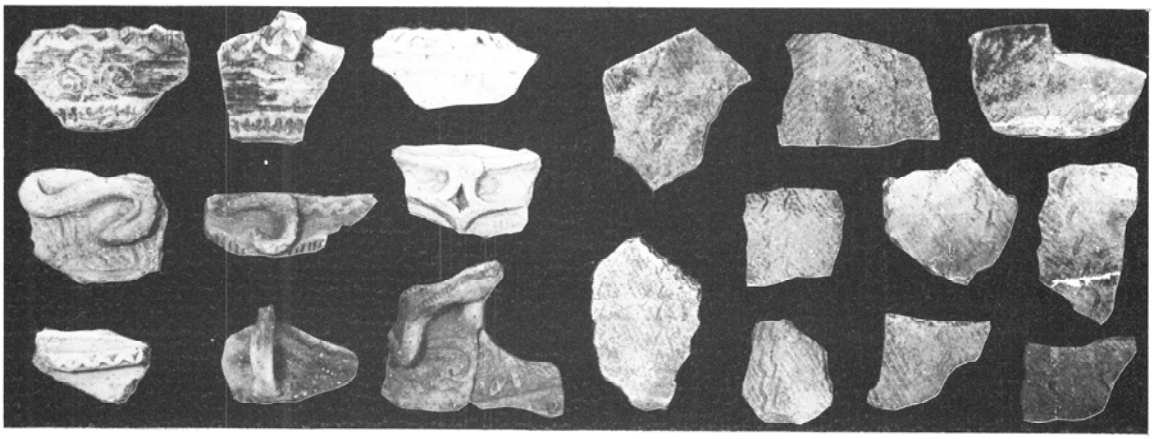


第III群 2 類土器　　第III群 4 類・第IV群 1 類土器

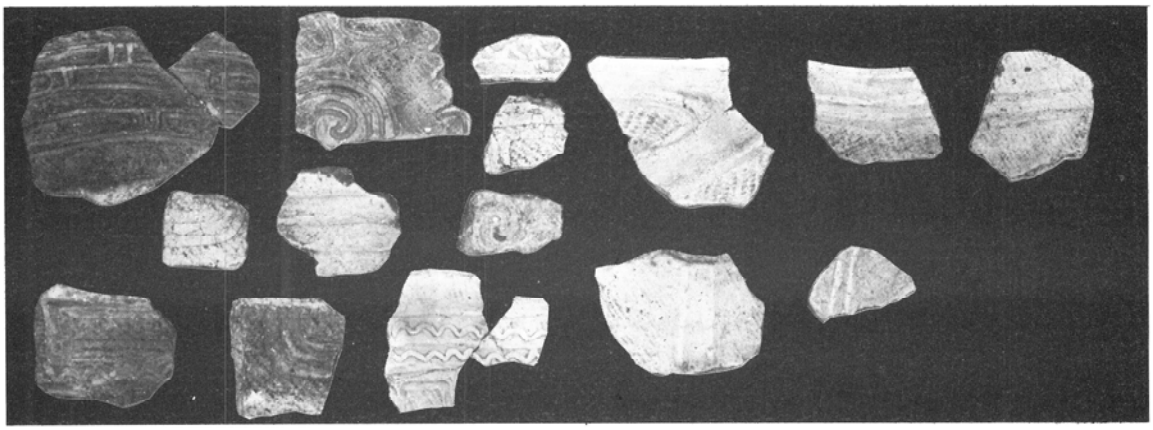
出土土器（3）



第Ⅳ群 1 類土器　　第Ⅳ群 1 類土器

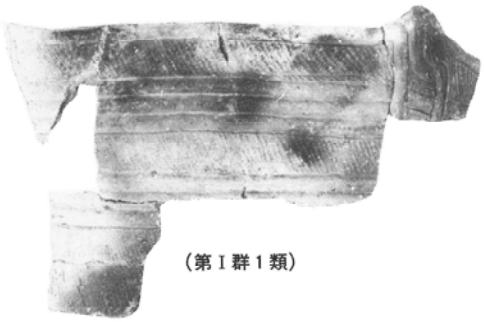


第Ⅲ群 5 類・第Ⅳ群 1 ・ 2 ・ 3 類土器　　第Ⅴ群 2 類土器



第Ⅳ群 4 ・ 5 類土器　　第Ⅶ群土器

出土土器（4）

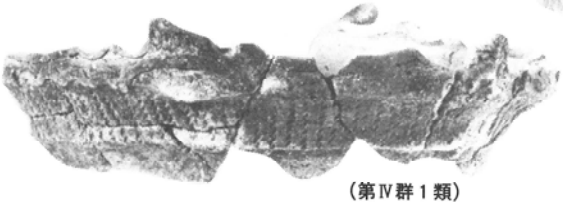


（第Ⅰ群１類）

（第Ⅳ群１類）

（第Ⅰ群５類）

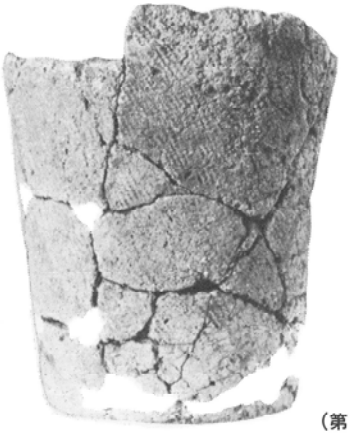
（第Ⅲ群２類）



（第Ⅳ群１類）

（第Ⅲ群２類）

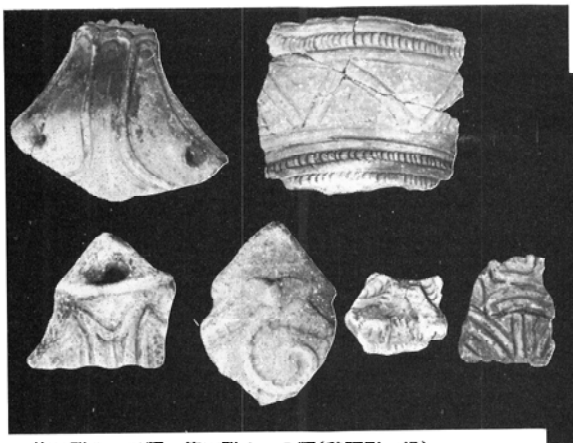
（第Ⅱ群７類）



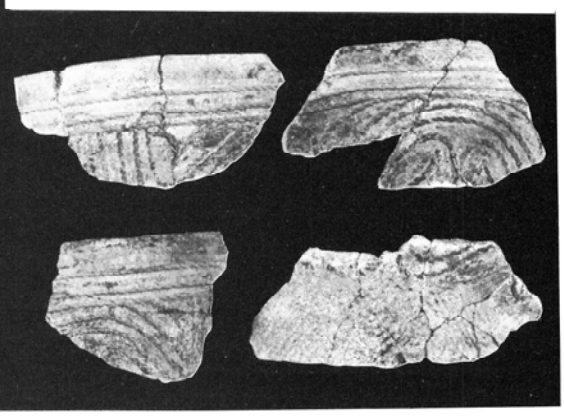
（第Ⅴ群２類）

（第Ⅱ群９類）

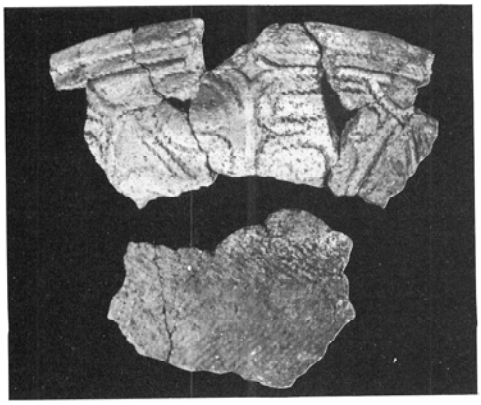
出土土器（５）



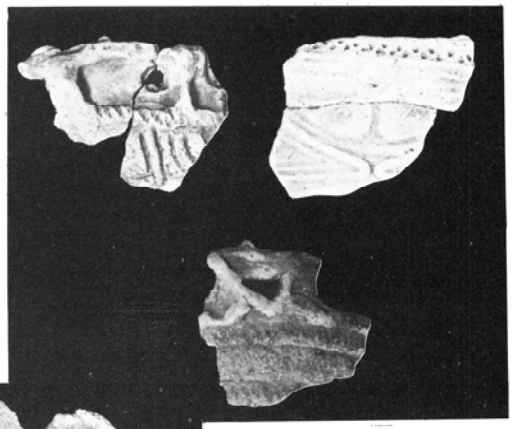
第Ⅰ群2・10類・第Ⅱ群4・7類(鶏頭形口縁)



第Ⅲ群2類

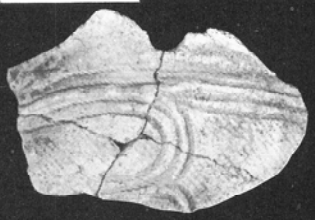


第Ⅲ群2類



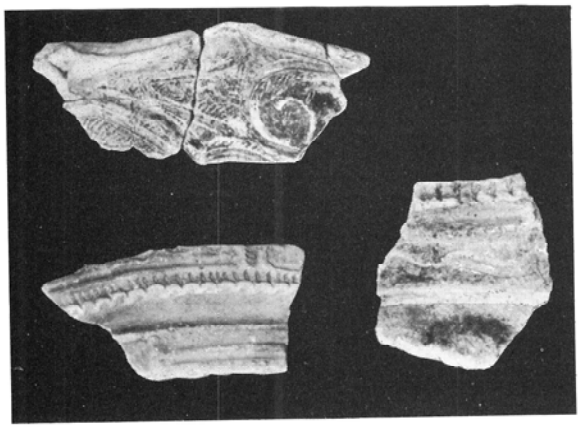
第Ⅱ群7類・第Ⅳ群1類

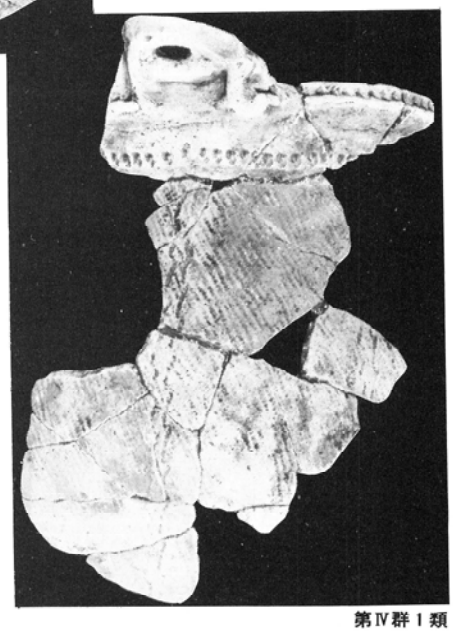
第Ⅲ群2類



第Ⅲ群2類

↓第Ⅱ群7類・第Ⅳ群1類



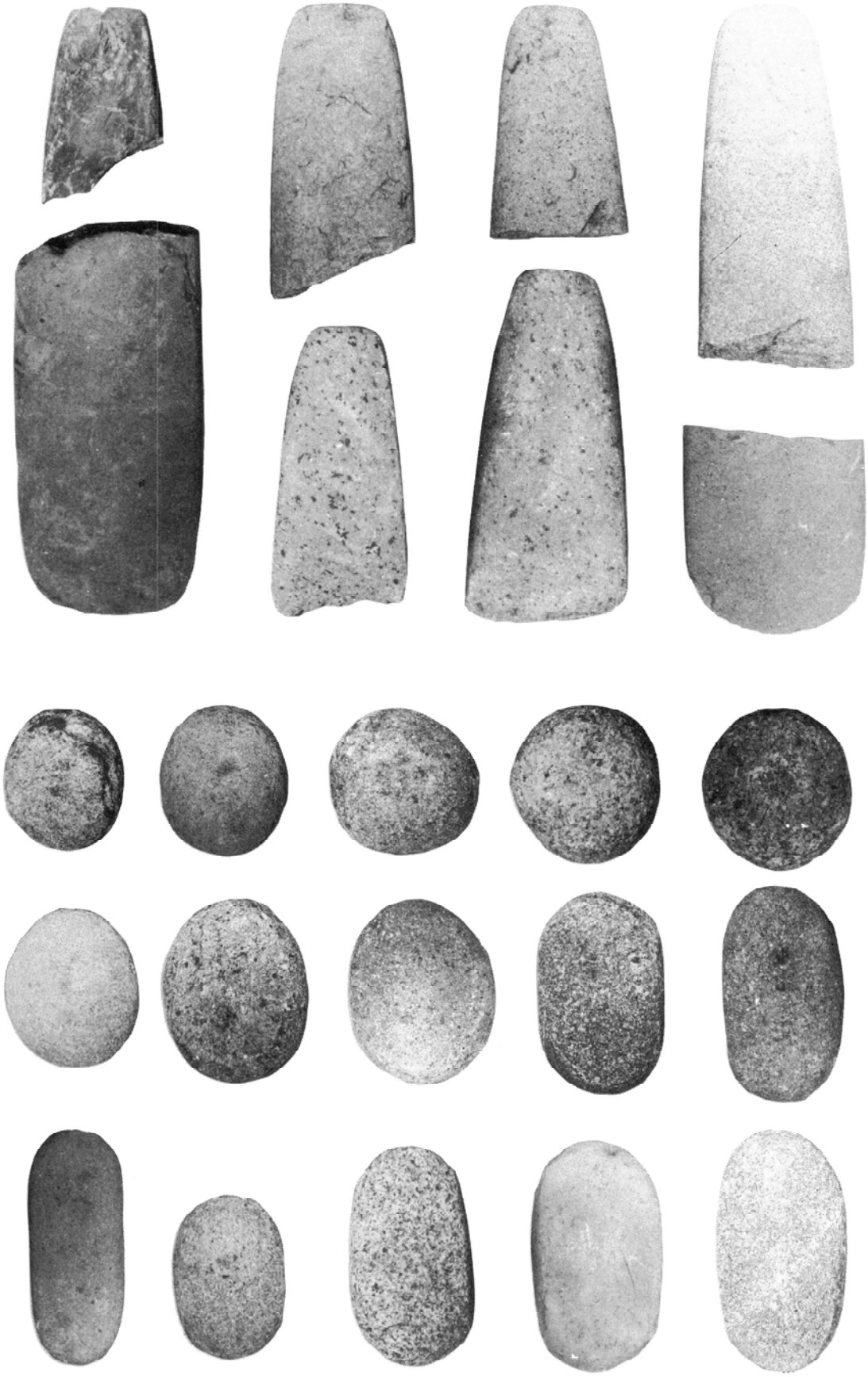


第Ⅳ群1類

石鏃・石槍・石錐・石匙・箆状石器

出土石器(1)

箆状石器・掻器・削器



磨製石斧・磨石・凹石

出土石器（２）

石棒・石皿

出土石器(3)

(2) 後　原　遺　跡

調　査　体　制

調査主体	山形県教育委員会		
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団		
調査担当者	主任調査員	佐々木洋治	（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）
	現場主任	名和達朗	（山形県教育庁文化課技師）
	調査員	大類　誠	（山形県教育庁文化課嘱託）
調査協力	村山市教育委員会　　県村山平野土地改良事務所		
事務局	事務局長	山田信一	（山形県教育庁文化課長）
	事務局長補佐	荻野和夫	（山形県教育庁文化課長補佐）
	事務局員	設楽周一郎	（山形県教育庁文化課主事）

目　　次

Ⅰ　調査の経緯……71
Ⅱ　遺跡の概要……72
Ⅲ　遺　　構……74
Ⅳ　遺　　跡……77
Ⅴ　ま　と　め……78

挿図目次

第１図　後原遺跡（後原・船橋地区）位置図……71
第２図　土層断面図……72
第３図　後原地区全体図……73
第４図　船橋地区全体図……73
第５図　遺　構（１）……75
第６図　遺　構（２）……76
第７図　遺　構（３）……77
第８図　出土土器・古銭……78

図版目次

図版１　後原地区調査状況　　船橋地区調査状況……79
図版２　後原地区遺構全景　　後原地区円墳全景……80
図版３　船橋地区調査区全景　　船橋地区遺構全景……81
図版４　出土土器（後原地区）　出土土器（船橋地区）……82

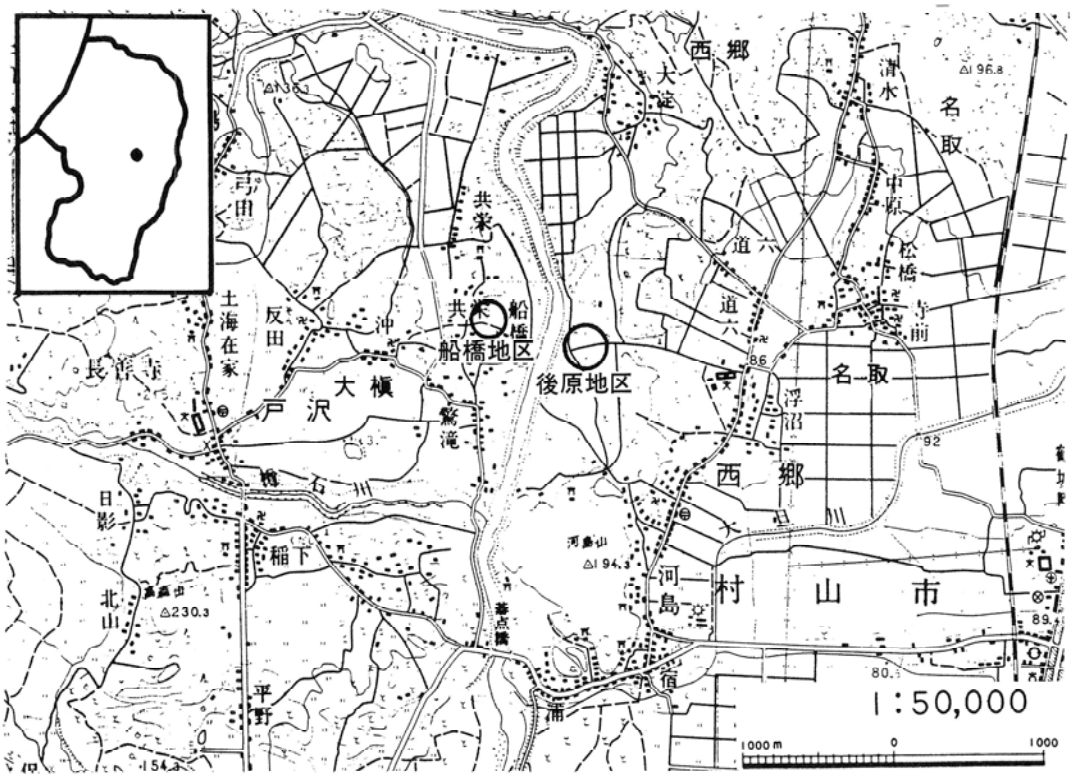
Ⅰ　調査の経緯

中央部を最上川が縦走する北村山地区一帯は，数多くの埋蔵文化財包蔵地（以下遺跡と呼ぶ）が分布しており，これまでも何回となく調査が行なわれている。

ここに広域営農団地農道整備事業・北村山地区が計画されるため，山形県教育委員会が主体となり，昭和53年９月18日～10月５日まで遺跡の分布調査が行なわれた。調査の結果，対象地域に88ヶ所の遺跡が発見され，本遺跡もその時確認されたものである。

昭和54年度からこの地区に対して工事が着手することになり，県教委では先の分布調査結果に基づき，昭和54年９月，村山平野土地改良事務所・村山市教育委員会の関係機関と協議を行なった。その結果，昭和54年10月１日から緊急発掘調査を実施することが確認された。

調査は，後原と船橋の２地区に分けて行ない，10月１日から11月２日までの期間である。路線幅に沿ってそれぞれ２×２ｍのグリッドを設定し，東西方向をＸ軸・南北方向をＹ軸と決定し，順次粗掘り・精査を加えた後，最終的な記録及び写真を撮影した。（第３・４図）



第１図　後原遺跡（後原・船橋地区）位置図

II　遺跡の概要

北村山地区の最上川流域には，河岸段丘が発達し先史～歴史時代の多くの遺跡が分布する。本遺跡もその段丘上に立地し，標高88～90m，河島山北部から約 1.5kmの距離を測る。最上川をはさんで，右岸を後原地区，左岸を船橋地区と便宜上区分する。(第１図)

後原地区は，村山市大字名取字後原に所在し，段丘縁辺部から東側の山麓部までの範囲をもち，主に畑地から縄文土器・石器・土師器・須恵器等が採集される。また，地元の人からの聞き込みにより周辺の分布調査を行なった結果，約 100m北側に周溝をめぐらす塚上の土盛りがみとめられ，略測したところ直径約35m・高さ 3.4m・周溝幅２mを測る。北側が一部崩れて不明であるが，二段構築の円墳を推定するものであることが判明した。(図版２)さらにこのすぐ南側には，方形の土壇上に位置する板碑が，また調査区南側の山頂付近には，直径約10mの塚上の土盛りがそれぞれ確認された。

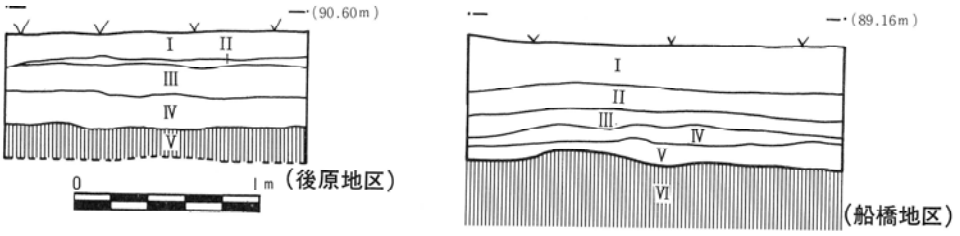
本地区の基本層序は５層に分けられ，Ⅰ層―暗褐色土，Ⅱ層―黒褐色粘質土，Ⅲ層―明褐色土，Ⅳ層―黒褐色土，Ⅴ層―茶褐色粘土である。Ⅰ・Ⅱ層は粘土混じりの二次堆積土で，主に水田の近くにのみみとめられることから，以前の水田基盤整備時の盛土と考えられる。Ⅳ層は遺物包含層で，Ⅴ層は遺構確認面である。(第２図)

遺構・遺物は全体に少なく，70～75－９～12Gに若干みとめられるのみである。

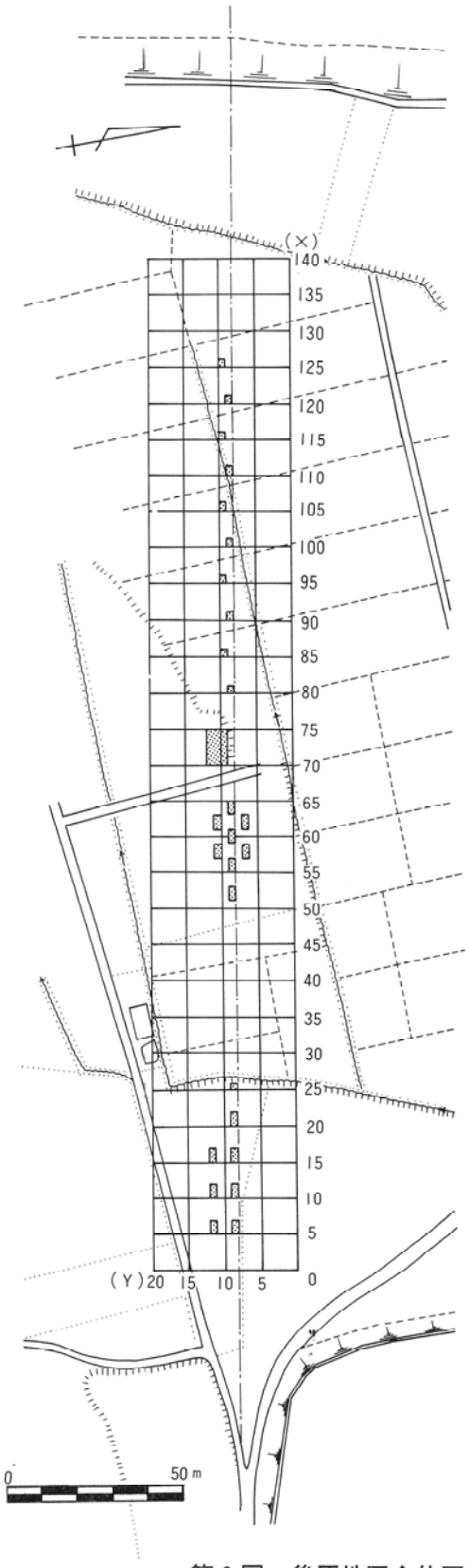
船橋地区は，村山市大字大槇字船橋に所在し，段丘面の緩斜面上に立地する。地目は畑地で，大半が桑畑である。すぐ北側は小河川により入り組んでおり，その対岸の台地は袋遺跡（No.596）が立地する。また，段丘下側の微高地には，川口Ａ（No.599）・棚子（No.598）遺跡等の縄文及び歴史時代の遺跡が確認されている。

基本層序は，Ⅰ層―茶褐色土（耕作土），Ⅱ層―茶褐色土，Ⅲ層―黒褐色土，Ⅳ層―濁黒褐色土，Ⅴ層―濁黄褐色土，Ⅵ層―黄褐色粘土である。Ⅲ層は遺物包含層で，Ⅵ層は遺構確認面である。(第２図)

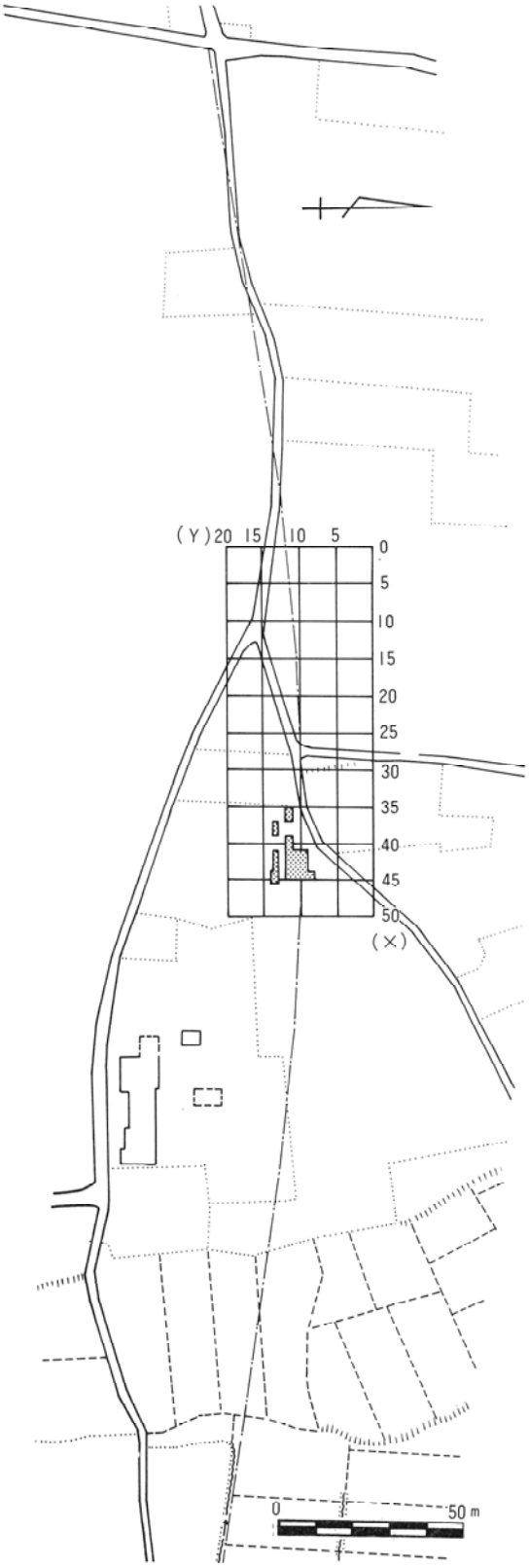
遺構・遺物は全体に少なく，調査区東側39～45―８～13Gにみとめられるのみである。



第２図　土層断面図



第 3 図　後原地区全体図



第 4 図　船橋地区全体図

Ⅲ　遺　　構

後原地区（第５図　図版２）

１号ピット　72－11Ｇに位置する。直径40cm・深さ15cmを測り，直線的に掘り込んでいる。覆土は黒褐色土でやわらかい。

２号溝跡　71－９～75－11Ｇに位置し，北東方向に走る。断面観察の結果，Ｉ層下部から掘り込まれており，新しい時期のものと思われる。覆土は４つに分けられ，粘土混じりでやわらかい。幅1.1ｍ・深さ50cmを測る。底面は若干の起伏を呈するが，ほぼ平坦である。

３号土壙　73－９Ｇに位置する。グリッド壁際に検出され断面観察の結果，Ｉ層下部から掘り込んでおり，新しい時期のものである。底面は土壙状に凹んでいるが，北側は平坦にのびており，全体については不明である。覆土は４つに分けられ，粘土ブロックを含み，全体にやわらかい。深さは1.06ｍ・確認面での直径90cmを測る。

４号土壙　75－10Ｇ，ＳＤ２北側に位置する。直径84cmの円形を呈し，深さ10cmを測る。出土遺物は，みとめられない。

船橋地区（第６・７図　図版３）

１号落ち込み　41－9Ｇに位置する。不整形を呈する溝状の落ち込みで，幅1.1ｍ・深さ20cmを測る。底面もピット状の凹みを呈し，一様ではない。

２号落ち込み　44－13Ｇに位置する。平面形はＳＸ１に類似する。幅80cm・深さ60cmを測る。底面は凹凸があり，舟底状にくぼんでいる。出土遺物はみとめられない。

３号落ち込み　42－10Ｇに位置し，ＳＸ1と直角に並ぶ。幅1.2ｍ・深さ50cmを測る。壁は北側が袋状，南側が緩やかである。外部西側から木炭に混じり，骨片が出土している。

４号落ち込み　43－９Ｇに位置し，南北方向にのびる不整形な溝状の落ち込みである。壁は直線的に掘り込まれ，幅60cm・深さ14cmを測る。出土遺物は，みとめられない。

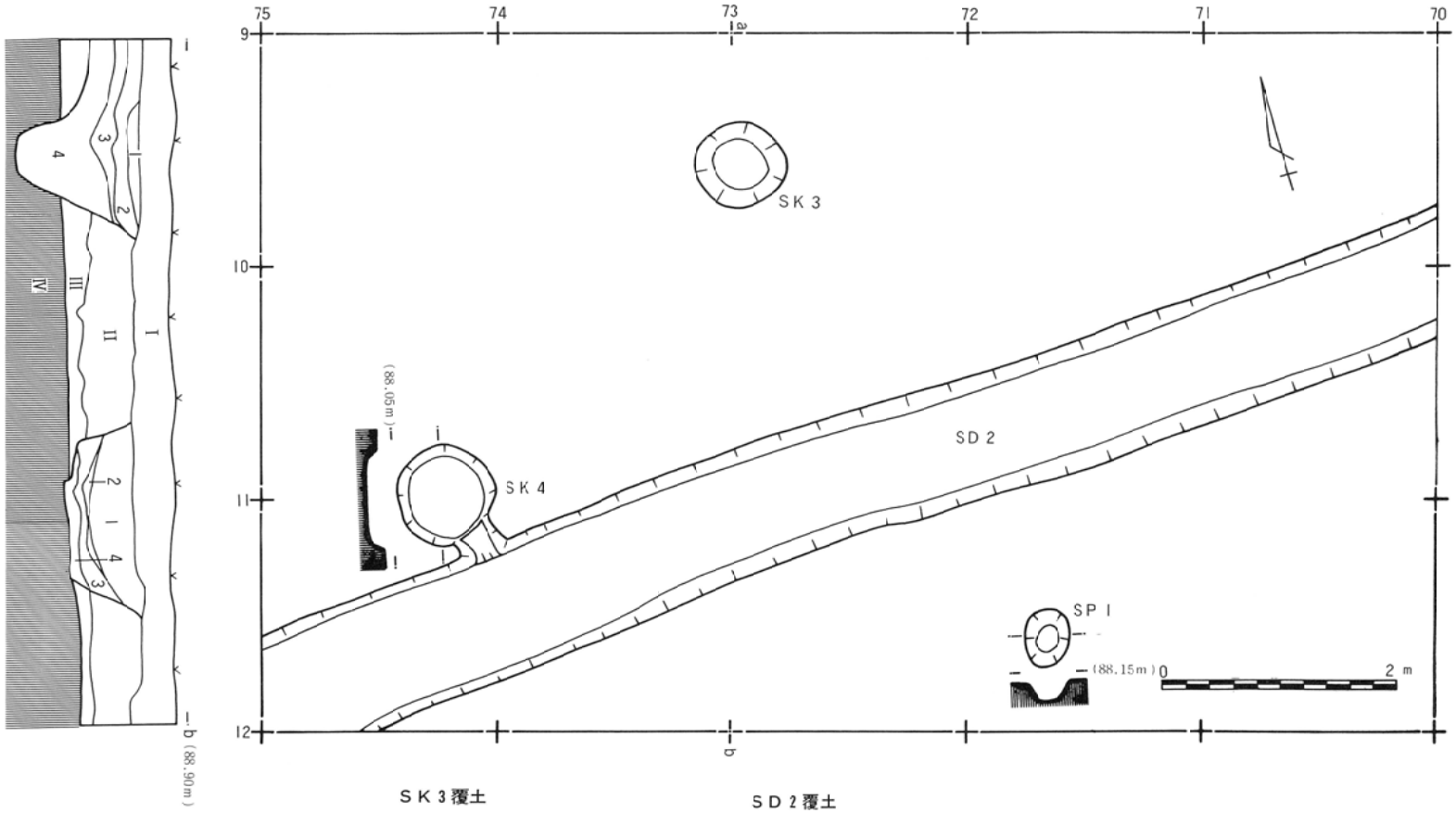
５号土壙　43－10Ｇに位置し，６号土壙を切っている。楕円形を呈し長径78cm・短径65cm・深さ20cmを測る。覆土内から，縄文時代後期の土器片が出土。

６号土壙　43－10Ｇに位置し，北側がＳＫ５と重複する。不整楕円形を呈し，長径60cm・短径40cm・深さ10cmを測る。

７号土壙　43－10Ｇに位置する。楕円形を呈し長径80cm・短径70cm・深さ15cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれ，底面はほぼ平坦である。

８号ピット　39－11Ｇに位置する。楕円形で長径74cm・短径36cm・深さ７cmを測る。

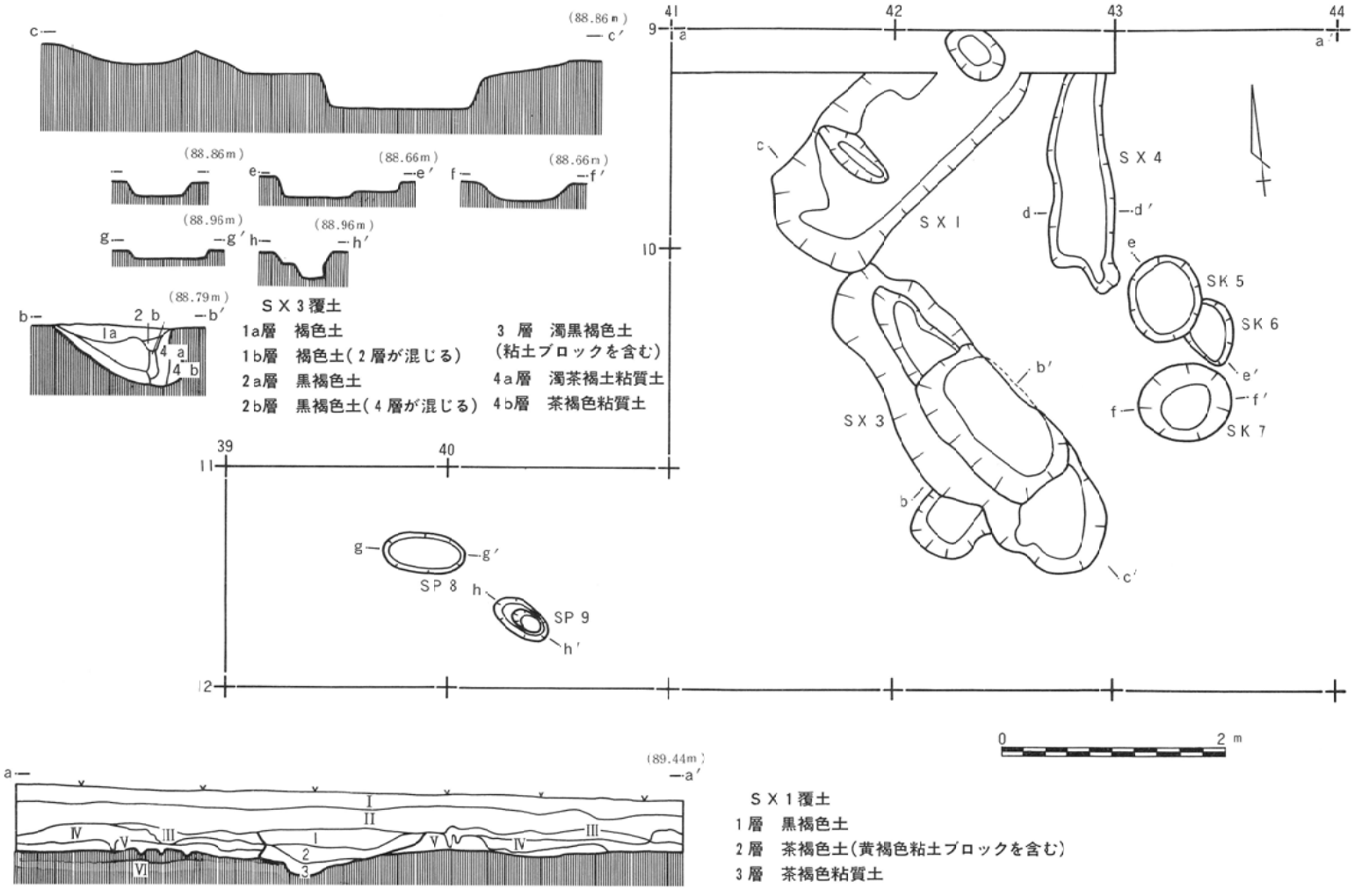
９号ピット　40－11Ｇに位置する。楕円形で長径55cm・短径28cm・深さ26cmを測る。



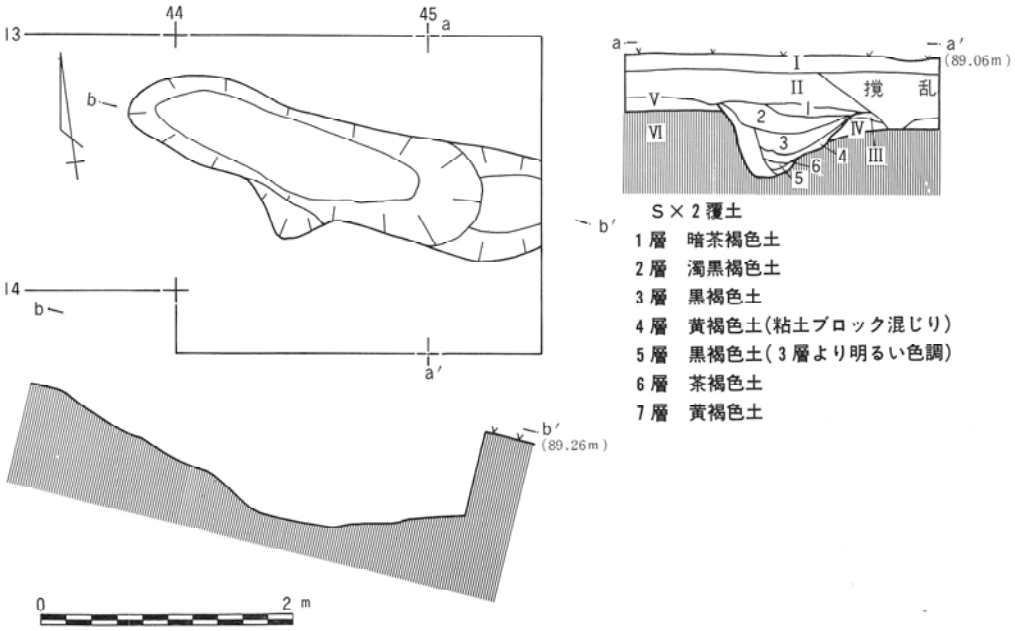
ＳＫ３覆土
1層　黒色土
2層　茶褐色土(粘土ブロックを含む)
3層　黄褐色粘土(黒色土を含む)
4層　黒色土(粘土を少量含む)

ＳＤ２覆土
1層　黒色土
2層　黄褐色粘土(黒色土の中に縞状に堆積する)
2層　濁黒褐色土層(粘土粒子を含む)
4層　濁黒褐色土層(大き目の粘土ブロックを含む)

第５図　遺　構(1)


(88.86m)
c
c′
(88.86m)
(88.66m)
(88.66m)
e
e′
f
f′
(88.96m)
(88.96m)
g
g′
h
h′
(88.79m)
b
b′
2 b
1a
4 a
4 b
SX3覆土
1a層　褐色土
1b層　褐色土(2層が混じる)
2a層　黒褐色土
2b層　黒褐色土(4層が混じる)
3 層　濁黒褐色土
(粘土ブロックを含む)
4a層　濁茶褐土粘質土
4b層　茶褐色粘質土
41
42
43
44
9
10
11
12
39
40
a
a′
SX1
SX3
SX4
SK5
SK6
SK7
SP8
SP9
0
2 m
(89.44m)
a
a′
I
II
III
IV
V
VI
SX1覆土
1層　黒褐色土
2層　茶褐色土(黄褐色粘土ブロックを含む)
3層　茶褐色粘質土

第6図　遺　構(2)



第7図　遺　構(3)

Ⅳ　遺　　物

後原地区（第8図1～7　図版4）

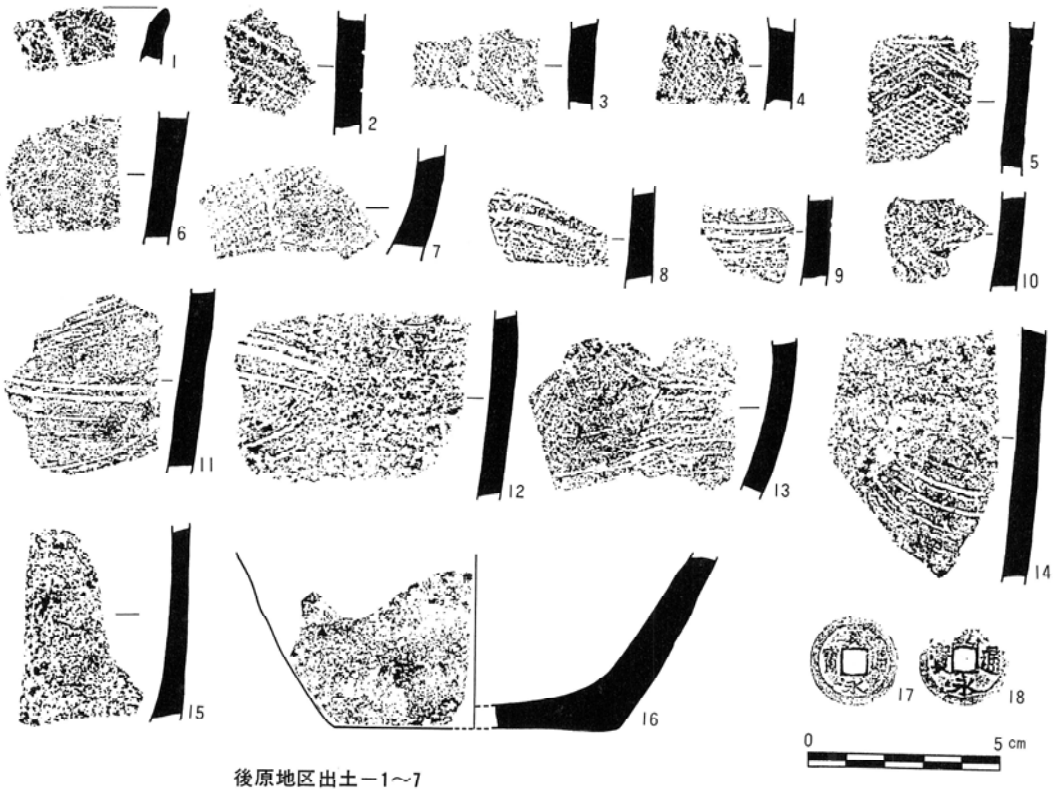
全体的に出土遺物は，稀少である。大半が71－9・10G付近に集中し，全て小片である。主にⅣ層の面精査中に確認され，一部はSD2覆土内に混入している。

1～6は深鉢の同一個体と思われる。全体については不明であるが，横に一条の沈線をめぐらしさらに細い沈線で山形文を描出し，その外側に沈線を格子目状に入れて幾何学形の区画を形成する（5）。また口縁部は小波状を呈し，格子目文を波状に沿って帯状にめぐらし，その内側は斜位に削がれたように緩い稜を形成する（1）。7は，斜縄文を施した深鉢の体部破片である。

船橋地区（第8図8～18　図版4）

出土遺物は，大半が43－10GⅢ層にまとめられ，同一個体の破片である。体部に流水形に刷毛目文を施す粗製深鉢である（8～16）。

他に，古銭「寛永通寶」が2点出土している。



後原地区出土－1～7
船橋地区出土－8～18

第8図　出土土器・古銭

V　まとめ

広域営農団地農道整備事業・北村山地区にかかる後原遺跡の2地区について，緊急発掘調査を実施した。調査期間は，昭和54年10月1日～11月2日の延23日間である。調査区域は，農道路線内に限定し，発掘面積は両地区合わせて116㎡である。

調査の結果は，以下の通りである。

後原地区は，出土遺構・遺物とも少なくほとんど西端の畑地に集中している。遺構では，土壙2基・溝跡1基・ピット1基が検出されたが，全体にやわらかく，粘土混りの覆土の特徴から後世の新しい時期のものと思われる。遺物では，格子目文様をもつ土器から縄文時代早期三戸式に併行すると思われる。だが沈線自体が細く・浅く施されており，縄文時代後期中葉の可能性も考えられる。他の出土例を，待ちたい。

船橋地区は，遺構では溝状の落ち込み4基，土壙3基，ピット2基が検出されたが，性格については不明である。遺物は土器文様から，縄文時代後期のものと考えられる。

後原地区調査状況

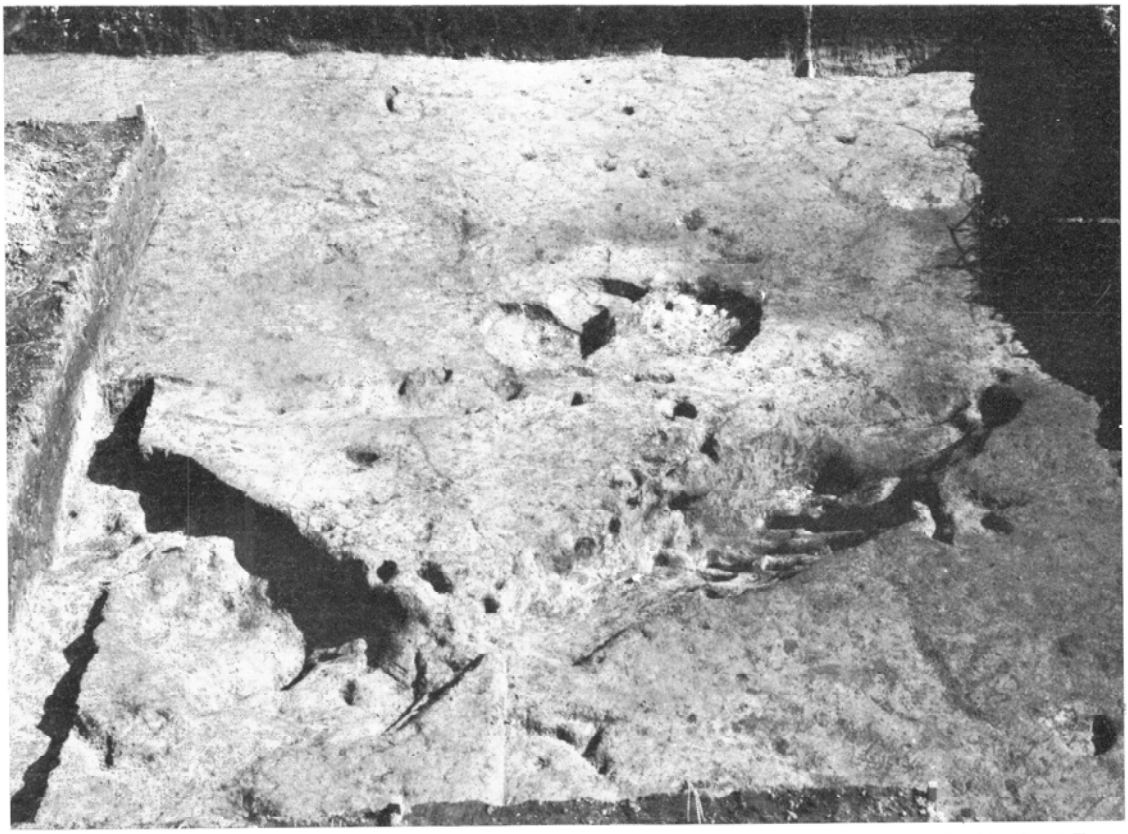
船橋地区調査状況

図版 2

後原地区遺構全景

後原地区円墳全景

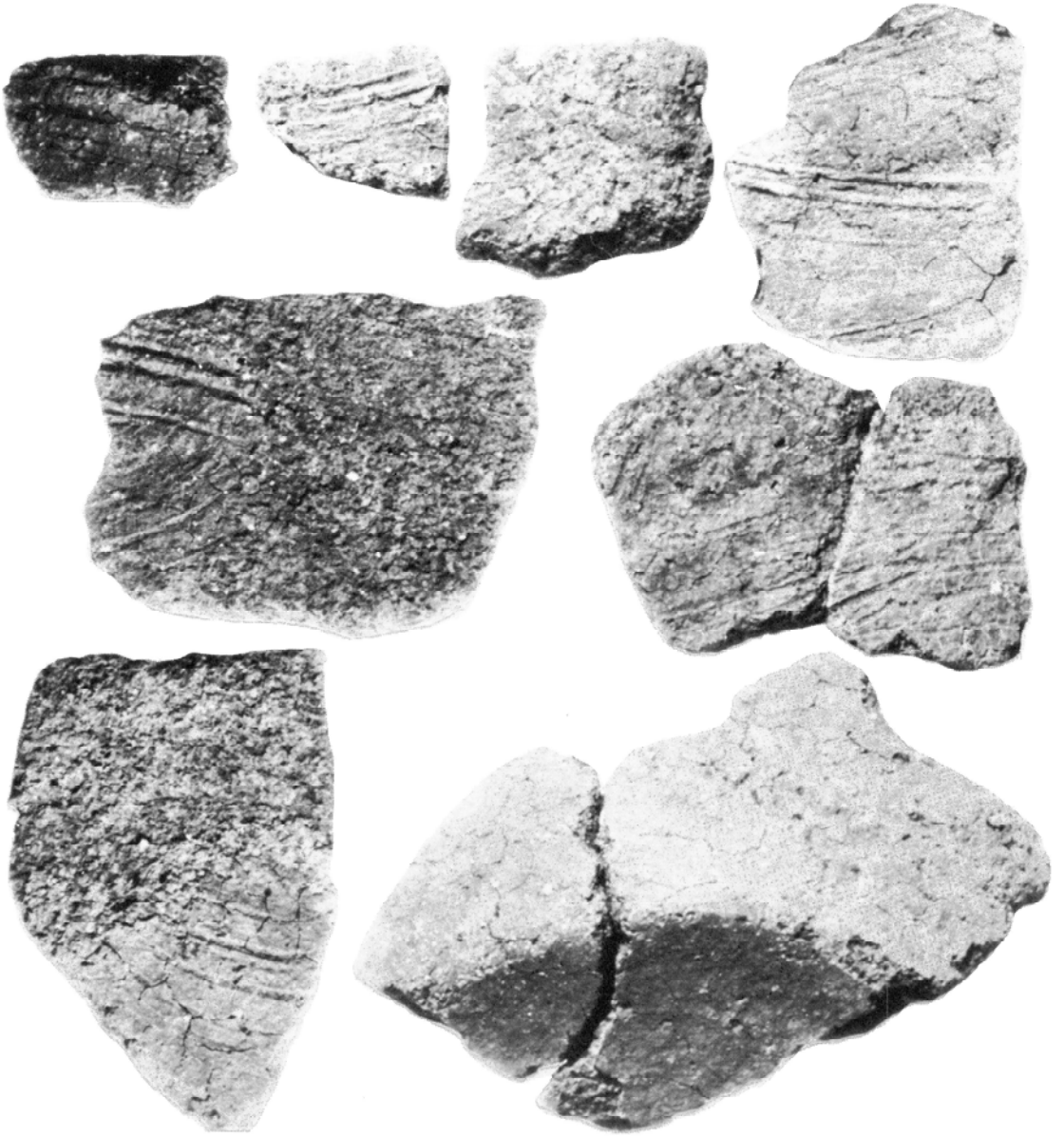
船橋地区調査区全景



船橋地区遺構全景

図版 4

出土土器(後原地区)



出土土器(船橋地区)

山形県埋蔵文化財調査報告書第 63 集

農林事業関係遺跡（1）

谷地（やち）遺跡
後原（うしろばら）遺跡

－発掘調査報告書－

昭和58年 3 月25日　印刷
昭和58年 3 月31日　発行

発　行　山形県教育委員会
印　刷　大場印刷株式会社